

飛驒文藝

平成22年度

第34回 飛驒文芸祭入賞作品集



飛驒文藝 NO.34

発行 社団法人 高山市文化協会
後援 高山市
発行日 平成22年11月3日
印刷 飛驒印刷株式会社

社団法人 高山市文化協会

飛驒文芸祭に寄せて

（旧）高山市文化協会長 小鳥 幸男

昔から「文は人なり」という諺が有る。確かに文章は、その人柄ばかりか、その人の当時の体調、精神状態も語ってくれる。

文芸においても個人の思潮を如実に物語り、その人格をうかがわせる。同じような事が、地域社会においても、文芸に寄せる住民の質の高さが、その地域が持つ文化性のバロメーターとも言える。幸い高山市文化協会主催の飛驒文芸祭は、参加する量と質において他の同種の催しと比べて決して遜色がない。とは言うものの、人に好不調が有るように、地域においても張っている時期と、萎えている時期が有る。飛驒文芸祭はこの地域における力を計る一つの指針と受け止めて決して間違いではないと思う。

かかる意味合いを含めて、この飛驒文芸祭が長く栄える事は、とりもなおさず、高山市の市勢の伸暢を物語る事になり、関係各位の一層の努力発展に期待し、文芸の持つ高い精神世界の高揚を俟つ。

目次

文芸祭賞

該当者なし

江夏美好賞

該当者なし

高山市長賞

小説

橋本 雅

66 40

高山市議会議長賞

俳句

野口 喜代男

12 3

高山市教育委員長賞

短歌

清水 文代

32 13

社団法人高山市文化協会賞

随筆

青山 英彦

21 26 90

現代詩

坂口 比斗詩

21

次

現代詩

短歌

短歌

俳句

俳句

俳句

俳句

俳句

現代詩

短歌

短歌

俳句

宮崎 大輔

尾崎 珠子

和田 操

今井 ち

小林 伸子

小藤 真砂子

山藤 守子

東濃 敬子

小高 子

小島 孝子

上垣 佳可

片岡 知紗

平坂 真帆

森田 絵理加

日下部 友香

9 20 19 18 25

選後評

俳句

岩本 拓馬

11 10

山下 茜

127 113

表紙絵 守洞春

第三十五回飛驒文芸祭作品募集要綱

高山市昭和町

上田 眞穂子

みな角を落しし鹿の寄りて来る
軒つばめ閑宿むかし宿場町
鉄仙花紫好きし母のこと
海の日には海の色なるグラス買ふ
放牧の牛を数へし大花野
大屋根の反り石垣の反り紅葉寺
土産屋の鹿呼ぶ笛を試し吹く
木犀や顔のあたりに風生れり
点滅の信号に冬来てゐたり
行列の殿に付く師走かな

高山市片野町

斎藤 眞砂子

アアといふ埴輪の声やつくしんぼ
故郷に従兄弟あまたや祭笛
どら焼の餡子つぶつぶ子供の日
園児らの囀りを乗せ若葉風
虹一つくぐりて向ふ音楽祭
夏富士の迫る三島に暮れにけり
月光に畏こまる子や衣被
秋の暮一つ点りて昏くなる
冬の日輪プラス思考に変換す
裏庭に雀の鳴くや年用意

(社)高山市文化協会会長賞 俳句

高山市上一之町

山下守

妥協とは口閉ざすこと春炬燵
鍵穴に春陽を埋めて留守の家
玄関に客の残り香梅雨ごもり
端居して来し方おもふ八十路かな
裏木戸のふれずに開く萩の風
祖母若く母美しき七五三
職業を無職と書きし秋時雨
秋霖や手に朝刊の薄湿り
冬帽を脱ぐしぐさして遠会積
問診に素直に答へ花八ツ手

(社)高山市文化協会会長賞 俳句

高山市中山町

東濃敬子

間取り図はサザエさん宅草の絮
カステラの端は厚めに春の雪
掌に乗せる三粒の葉沈丁花
片頬に飴の膨らみ水温む
失くし物探すまじなひ夏燕
パン種を二度の発酵秋近し
メモ通り合はす二杯酢若葉風
坂の下石に村の名花木槿
妖怪の漫画切り抜く吊し柿
河童居る遠野の語り返り花

(社)高山市文化協会会長賞 俳句

高山市八軒町

小林高子

それぞれの顔して笑ふ春の寄席
ぼたん雪降る夜の古き映画かな
古時計突如鳴り出す春の昼
菓子鉢のトルコブルーや夏に入る
くつきりと口紅引きし大暑かな
野の花の籠置かれをり夏座敷
秋暑し華瓶けびやうに朝の水を汲む
打敷の深き錆朱や秋彼岸
搔き上げし灰のぬくもり名残の茶
足継ぎに嘉永五とあり注連飾る

(社)高山市文化協会会長賞 俳句

高山市三福寺町

小 泉 孝 子

触れ合へば胞子煙らす土筆かな
吾の抜けし花いちもんめつちふ霾れり
青梅雨や木地師の墓はみな低し
齧もぢずりして山城跡や新樹光
振摺もぢずりに時ねぢれゆく夕間暮
宙支かひなふ腕涼しき阿修羅像
瀧音の近し靴紐結ひ直す
講座延期のまま逝き給ふ白桔梗
列島輪切り気圧配置図冬型に
小春日やペースメーカー作動良し

青
竜
賞
俳
句

飛驒神岡高等学校

上垣佳可

初嵐飛驒の山々吹き抜ける

朝顔や宇宙空間大冒険

燕くるりん眼下のおもちや箱

綿飴に包まれ進め渡り鳥

雲切れて檸檬の光注がれぬ

青
竜
賞
俳
句

飛驒神岡高等学校

岩本拓馬

慰霊碑の小さき罅^{ひび}なり終戦日

向き合ひてサラダに搾る檸檬かな

アルプスを真赤に染める薔薇の花

万緑の足跡探る関ヶ原

さりげなくレモンを舐める主将かな

飛騨神岡高等学校

山下 茜

忍び寄る源氏螢のワルツかな

アルプスにそつとかぶせる夏帽子

雷や童話の中に飛び込めり

朝顔の絵日記を書く小学生

朝顔やそつとほほえむ祖父と祖母

飛騨市宮川町

清水 文代

種蒔けば芽生え花咲き実を結ぶそのよろこびを生き甲斐として
なつけりと云へど所詮は野良猫か一定の距離越ゆることなし

暮早き畑より帰る道すがら亡夫と唄ひし「夕焼け小焼け」

酒に酔ひし亡夫の繰言もう一度聞きたしと思ふこんな夜更けは
ばちばちとはじけて草の葉に落ちる線香花火よ 子は明日帰る
ストーブと扇風機が居間に何気なく同居してゐる九月の不思議

「生まれたよ」電話の孫の弾む声吾はめでたく曾祖母となる

ふくよかな乳房含ませほほえめる母と子明るし秋の縁側

問ひかけて答ふる人なき淋しさか「今朝の味噌汁少し辛いね」
寂しさと気樂さを足して二で割ればしあはせなのか独り暮しも

高山市国府町

須代一郎

征く朝の何か言いたげ母の眼よ千人針を堅く結びぬ

特攻に志願をしたと認め送る老いたる父母は如何に読まれし

髪残し潜水服に身を固め護国の鬼と散りし名護湾

「帽振れ」に淋しき笑顔振り向かず死地に出で発つ黒髪残して

本当は死にたくないと言った戦友飲んではくれぬ酒を手向ける

人柱堤の穴に入る如く爆弾抱えハッチを閉める

特攻の「一足先に」と散りし戦友蛍となりて会いに舞い来る

南海の藻屑と消えし戦友へ生き長らへて手折る白菊

山裾に静かに眠る戦友を瞑想すれば童顔浮かぶ

大空に捧げし命長らへて今日復興の材曳く我は

高山市中山町

尾崎珠子

眠る間に洗濯機動き飯が炊けラジオが鳴りてわたしを起す

凍てし朝ゆっくりゆっくり走らせて赤信号にふっと息つく

靴下を重ね履きしていざ仕事口あけて待つ白のゴム長

岩塩のやうな塊置き去りに除雪車はゆくわが家の前を

目覚しのラジオのタイマー解除して眠りにつかむ明日は休日

がやがやと樞の実ゆれて鍋ゆれてゐろりの端に幼きわたし

わが庭より巢立ちし百舌よ遊びに来よ木の天辺にキチキチと鳴け

三月の裸の木々は艶めきてシャワーのごとき雨に打たるる

伝へてよひとり都会に暮らす娘へ幸ひ願ひひびな難飾ると

「深夜便」はどなたが聴くか午前二時歌稿書き終へスイッチを切る

〔社〕高山市文化協会長賞 短歌

高山市上川原町

和田 操

明日はいざパリへと発たむ今宵われ鰻を奢る日本酒そへて
夜の十字まだ昼の如き明るさに戸惑ひて歩むセーヌの岸を
セーヌ川のポンポン船にも三色旗立てて働く男ら見ゆる
サン・サバンの時の流れは違ふのか十二世紀が静かに息づく
ペタンクする男らの声と風の音中世のままの午後のサン・サバン
仄暗き螺旋階段の古城より農業大国フランスを眺む
月仰ぎホテルへの道疲れしか回転木馬も広場に眠る
この道がかのサンチャゴに続くのか石畳には帆立貝の印刻みたり
どこもこれも被写体となるフランスのマルシェも牛も街も村里も
蠟燭の灯りに像は微笑めりリモージュの坂の小さな教会

〔社〕高山市文化協会長賞 短歌

下呂市萩原町

今井 みち

触発の予感のありて飲み下すお茶に溶かせし互いの禁句
縄張りを見回る鳶の促せり草取りの腰今日はこれまで
里帰りせし娘の去りて部屋の隅一すじの髪拾う夕暮
しっかりと蓋してみせる生ごみポットカラスの視線に我の意地悪
食べさしを捨ててはだめよほらごらんいちご畑をカラスが見ている
舞い降りるごとくに立ちし春の野にベビーシューズはふわっと踏み出す
保育園苦手の幼帰り来てねずみ花火のごと駆けまわる
窓の子の雨空見上ぐ時明かり庭のプールは裏返しのまま
夏休みばかりでいいねと我を見き保育園へと引かれゆく児は
「保育園体温計が休めって」いつもの朝より元気な幼

高山市曙町

小林伸子

プラハ演説をくり返し聴くオバマ氏の有言実行せつに願ひて
核廃絶への一步と心の震へたりバラク・オバマのノーベル賞受賞に
プラハ演説に一縷の望みを託したる二重被爆の歌人が逝きぬ(山口彊氏)
垂れ幕も表示すらなきオバマ氏の母校を見て過ぐオアフ島にて
被爆者の看とりを短歌に伝へたる桜井幸子氏逝く五月の朝^{あした}
対岸の山々露わに土の見ゆいまだ燃料は木々とふ北鮮
非武装とふイムジン河の対岸に翁の見ゆる自転車こぎて
見はり台や鉄条網を見て過ぎぬ「イムジン河」の歌詞確かめながら
対岸のビルの内部は空洞とふ北朝鮮の体質を見る
「最低限の軍備は日本に必要」と父は半島の脅威を語る

青 竜 賞 短 歌

飛騨神岡高等学校

森 田 絵理加

雨降りの地面に触れる小海月の跳びはねるよなタンゴのダンス
グラウンドに響き渡る声援に輝きを増す球児の雫
寂しさを懐に詰め袖握り見送る笑顔小さき背中
水面に映った蛍のうすあかり風に揺られてハートの形
灼熱の太陽の下少しずつ縮まった影手と手重なる

青
竜
賞
短
歌

飛驒高山高等学校

平
坂
真
帆

いつまでもこのメンバーでこの土地に子供のままでいたかったなあ

行きたいなネバーランドに今のまま大人になんかなりたくないな

グラウンドでソフトやっってる夏の日がなんだかすごく大好きなんだ

黒板にびっしり書いた先生のチョークの文字で眠くなります

夏休み今年は何をしようかな今からすごくワクワクしてる

青
竜
賞
短
歌

飛驒高山高等学校

片
岡
知
紗
希

君のこともっと知りたいと思うけど話せない僕がもどかしい

紫のあやめ咲きたる庭先であなたの幸せ願っています

雨降りて苦悩が募るぽつぽつと別れた君のことを思えば

オルガンでぼろんぼろん音遊び偶然出来た思い出の曲

満天の星空見れば心澄むどれが何座か分からないのに

「挽歌」——二つの命に——

高山市七日町

坂口比斗詩

「長い手紙に」

どこからか

聞こえてくる声がある

「いっしょに あるいて みないか」

何日か冬を数え

空はまだ厚い雲に覆われているが

どこからか また

聞こえてくる声がある

「いっしょに あるいて みないか」

共に在りし日

飄々として人と語らい

綽々として酒酌み交し

山の尾根道を歩く時も

子供たちと興じる時も

自転車で街中を走り去る時も

いつも風の中にあつた

あふれ出る智慧と自づからなる心とを

遊ばせる術など天然であるかのよう

いつも風を残して行かれた

私達は知らない

残して行つた風の中に

言い知れぬ深いよどみの宿る事を

死せる魂を拾い訪ね

生きる事の意味を確めながら

その声は語りかけていたのかもしれない

「いっしょに あるいて みないか」

誰にといいではなく

誰かにというのでもなく

その声自体が残していった風のような

先生そのものであったのかもしれない

見はるかす山々は

まだ白いベールの中

さびさびとした風景にこそ

生への回帰とその実感のある事を

その声はいつも語りかけていたのだ

眼鏡の奥の目差しが

いつも見詰めていたように

どこかに忘れ物をして来たような

捉えどころのない喪失感に

私達は今囚われている

先生にはまだ返事を出していない

「手に纏ける玉」に

「こもりくの初瀬をとめが

手に纏ける玉は乱れて

ありといはずやも」

女はうづくまり

地に伏せし髪のはつれが濡れている

緒は切れて

手に纏ける玉は散り乱れている

小刻みにふるえていた肩口は

背負い切れない悲しみに押し潰され

尽き果てぬ思いの後の諦念が

ほつれた髪の乱れに漂よう

開け放たれた扉の外

遠く輝やく青い空には

くだけた雲が流れている

うづくまる女の冷い背の上に

くだけた白い雲が流れている

一面の砂の海

一面の海の波

一面の波の間に

目を閉じて横たわる女よ

岳父の亡骸よ

先生が逝き

友たちが逝き
そして岳父よ あなたが逝き
いくつもの逝きし命が
幾重成す波となって
今は私の心の波間にたゆたう
遠い日
若くして逝った
父の命の波の上に

あなたの遺した画の中に
人の命のありさまが
克明に 描かれて います

こもりくの初瀬をとめの
涙は今もあふれているか
散り敷く玉は
いつか地に降る雨となり
涙の玉のひとつひとつが
解き放たれた命となって
私達の頭上から やがてそれは降りそそぐのか
私達の心の中に やがてそれは降りつもるのか

岳父よ

(社)高山市文化協会長賞 現代詩

「緑の炎」

高山市高根町

宮 森 大 輔

ふすふすと網膜をゆするのほ
たいくつにひろがる草色の海のためでなく
色のついたざらめを
いっせいにほうり
反射させたような緑の炎

かつて往来した道の草花さえ
いまは名さえ知らないただの一本だ
その焼け跡にひとりたたずむ

口をつぐめ 人々の記憶は

土からわきあがる一本の草の記憶にかなわない

草色の炎を
喉元に
おしこめろ！
のみくだせ！

すみからすみへ
火がうつり ちらちらと
消え入ることができるように。

葉のむせるようなにおいが
さきほどからせわしない
わたしはかえるため
ようやく呼びかける
ひとつの名を思いだす

「虚偽」

益田清風高等学校

日下部 友 香

自分の評価を気にし
他人の評価も他人任せ

それが最良の処世術だと
笑う 嗤う 嘲う

隣人が笑う 私も笑う
隣人が泣く 私も泣く
隣人が好む 私も好む
隣人が嫌う 私も嫌う

怒りを抑え
歡喜を隠し
毒を飲み込み
心を殺す

他人の顔色を伺い
他人の機嫌をとる

社高山市文化協会会長賞 随筆

落花生の花

社員のM子さんの娘さんが結婚されるというので、終業後彼女の家にお祝いを届けにいった。
うす暗くなりかけた景色に溶け込んだ彼女の家は簡素な佇まいにあり、家の前のちいさな庭に、ちいさく萎んだ黄色い花だけがいくつも頭をたれている。

表札はM子さんの名前だった。

玄關の呼び鈴を押すとややあつて、すこしひらいたドアの間に、日ごろ会社で見る殺風景な彼女とはひと味ちがう装いの姿があった。

「ひとり娘とふたりつきりの所帯でしたけれど、これからまた寂しくなります……」

哀しそうに、そして、ちよつぱり微笑まれた。

「亡くなった主人が植えていた落花生の花です。すこしですけれど生った落花生の実を食べるのが主人の楽しみでした」

黄色い花の名の問いにそうこたえ、ドア越しの花に向かう彼女の眼が濡れていた。

三和土での立ち話であったが、外はすっかり暮れていた。すこし歩きふり返ると、暗闇にぼつかりと浮かんだ玄關の明か

多治見市希望ヶ丘二

上小家 旭

りのなかで彼女が、私の背に向かい深々と頭をさげられていた。
(これからまた寂しくなります……)
彼女の声が後れてついできた。

※

上海行きの機内サービスで出された落花生の一袋に、昼間からビールのつまみにするわけにもいかず、そのまま旅行カバンに入れた。

上海に着き、工場の女性責任者と夕食を共にしたときの彼女の言葉を、翌朝ホテルの部屋で反芻をする。

「人生には独りつきりで言葉を忘れたように、ぼんやりと過ごす時間も大切ではないでしょうか、そんなことを最近思うようになったのです」

それは若くして工場の責任者に抜擢され、走りつづけてきた彼女の人生観のお色直し宣言にもとれた。

ひとは折々に、言葉も時間もない世界に身をたゆたわせることも大切な人生の習慣なのだ。私の娘よりもまだ若い上海の女性は、

重責に就いて十年になるが、そのあいだに流れた歲月が彼女の精神に上質な澱を堆積させていた。

そんなことを考えながら、カバンのなかから落花生の袋を取りだし、落花生の粒をテーブルの上に広げてみる。それぞれに大きさもカタチもちがう落花生の粒を見るときもなく見ていると、一粒一粒がこれまで亡くなった友や親しかった人たちの顔に思えてきた。

一粒一粒。

摘んでは。

食べてゆく。

食べながら——こうやって人を殺したり傷つけながら、私は生きてきたんだなあと思った。自分が加害者という直接的な立場でないにしても、なんとなく、そんなふうに見える。人生のときどきに負に傾いた天秤の先に、たまたま悪運があつただけの罰当たり者でもある。

会社のちかくの坂道の途中の石垣にもたれて、日和にはお婆さんが日向ぼっこをしている。私が車で通りかかると、にこにこ笑いながら手をふってくれる。ああ、いい歳を重ねてみえるな、そう感心をする私はいい歳を重ねていないから、手をふり返すことができない。

そのホテルのベッドの微睡みのなかで、高校の同窓会の夢を見

しめは彼女のなかで、なにかをゆっくりと変わらせていったはずだが、美貌はもとより育ちのよい人柄は相変わらずであった。

冬のある日、彼女の家の前を車で通っていたら、彼女が玄關先の積雪をスコップで除けていた。ご主人が健在であるなら、そんな力仕事はしなくともいいのに……青春の遺り火のいたずらが私を車から降ろし雪またじを手伝えと誘惑をする。ブレーキを踏みかけた瞬間、店の奥から若い女性が除雪具を手に出してきた。B子さんに似て飛びつ切りの美人だったから、きっと娘さんなのだろう。そういえばいつかの同窓会で、娘さんが店に出るようになったと嬉しそうに話されていた。やれやれ、とんだお節介をするところだった。

加齢は私の歯をも不機嫌なものにつくりかえ、鉛玉をしゃぶるようにして食べていた落花生の粒も、ようやくのこり少なくなってきた。

たとえとはいえ、おおぜいの人を殺傷してきた自分だって、いつ死んでもおかしくない歳になっている。去年も数人の同級生が亡くなった。あとすこしは生きられるだろうと思ってみても、自分勝手に都合のよいシナリオは神さまには読んでもらえそうもない。だいたい仔細は略しても、昨春のアクシデントだって一歩まちがえれば死に繋がっていたはずだ。

春の日和に死にかけた私は二週間ほど入院をした。

二度に渡るMRI検査は居心地のよいものではなく、かなりの時間を不気味な空間で不気味な音を聞きながらひたすら耐えた。もしここでクシャミをしたらどうなるのか。堪え性のない私に

ていた。

開会にあたり、ひとりの男子同級生がまるで皇室の席にあるかのように、うやうやしい顔つきで校旗を携えて入場してきた夢だ。校旗入場は私たち同窓会の定番だが、私のもっとも嫌いな光景のひとつだ。この同窓会に足が遠のいたのも、それが原因かもしれない。

昨年同窓会の案内が届いた。あまりにも一流にこだわった内容だったので、のこりわずかな人生ゆえ、飲み食いばかりでは能がないという旨を簡単にしたため欠席の返信とした。キザだなあと思った。きつと鼻持ちならない野郎と映ったにちがいない。高校時代のあいつは勉強もできず、身なりもやることも三流以下だったよな、と噂されたことだろう。クシャミも出ず、風邪もひいた憶えはないのだが……。

夢のなかにB子さんがいた。

同級生だった彼女には想い出がある。美少女として名高い彼女は高校の華だった。

あれはいつだったか、B子さんに恋をしたT君に引つ張られて、彼女の家を訪問したことがあった。上流家庭の離れの彼女の部屋で、T君の金魚の口のようにうごく口元を眺めつつ居心地の悪い私は、ていのよい提灯持ちだったわけだ。

卒業をした彼女はやがて市内の名家に嫁いでいった。消息は臆気だが、T君も格好なお相手と結婚しただろう。それはそれで昭和のよき時代のどこにもある話だった。

運命の風は気まぐれに吹く。B子さんのご主人は早世された。

彼女とはその後数度、同窓会で席をおなじくした。遣された哀

とっては、最初からやりなおすことにでもなつたらとんでもないことだ。こういうときにかぎって鼻の穴がむずむずしだすからニングンの体は厄介だ。舌先で鼻の頭を舐めれば治まるという話を聞いた憶えがあるが犬ではあるまい、そんな芸当ができるものか。嗚呼、どうか神さまクシャミが出ませんように、と日ごろの不信心を棚上げの神頼みが功を奏してかMRIのなかの空洞を轟かすことはなく、病巣はもとより脳の空洞化もとあえずのところ見あたらないという副産物まで頂戴した。

院内の散歩の途中、リハビリ室の前で車椅子に乗った男性に私の目が止まった。

T君によく似ている。半世紀ぶりのことだから自信はない、他人のそら似というところで、やり過ぎそうとしていたら、男が私の名を呼んだ。そら似にあらず。脳の認識力はまさに神業だ、五十年ぶりの再会は、たちまちにして彼のお爺さん顔に、あのときの紅顔の(美)少年が上書きされてゆく。

不意の遭遇に途惑いながらも、私の手はあたかも機械仕掛けの人形の手のようになって、車椅子の背を押しはじめていた。

「消灯のあとの……暗い病室が……たまたまなく……怖いんだよな」私を連れて個室にもどったT君は、末期癌だと告げた細い声で、とぎれとぎれに、それでも軽く言った。

「あらあら、子どもみたい。男の人って怖がりなのね」入室してみえた奥さんが話に加わった。白髪を白髪のままの小柄で上品な女性だ。

消灯後の暗闇のなかで襲ってくる凄絶なまでの死の恐怖と闘いながら、空が白みかけるのを待ちかまえて、窓の下の道路を眺め

るのが日のはじまりの愉しみだという。そのなかで毎朝きまつた時間に老犬を連れてお婆さんが散歩して行く姿に、かならず目が止まる。表情のない顔で一步一步、足下をたしかめるように歩くお婆さんと、よろけながら後ろをつく老犬の姿を見ると、その女性と犬はきつと詰まらない日々を送っているのだからと考えると、そんなふうには昔から自分勝手に物事を決めつけてしまう悪い癖があるのだと。

私は飼っている愛犬の話をした。

散歩の途中、あたりかまわず嗅ぎまわっている犬の姿が馬鹿みたに見えて、そんな犬の行動に無関心で価値を見つげようとしていない自分のことを。

「でも、それって悪いことじゃないみたい。人間は自分勝手に幸せで、自分勝手に不幸せなものだから、生きたいように生きればいいのよ」と奥さん。さいぜんの言葉といい、つとめて明るい方へ向かおうという気遣いが窺える。

「うちのワンコ……十歳で死んだけど……ショックが大きくて」とT君が言う。「テレビを……観たい、と思って、メガネを……さがすけど、どこかに、……ないか」

そのメガネを掛けたT君の言いに、奥さんは私を見て笑った。

「犬は土に還りましたけれど教えられることばかりで、わたくしたちに人生の宿題をたくさん遺してくれました」

冷蔵庫の上に飾られている犬の写真を見つめながら奥さんは言った。

「犬は……言葉が……話せないから……な」とT君。

T君はなにを言いたかったのだろうか。もしも犬が言葉を持つ

それは照れ隠しが全部であったけれど、奥さんをはべらせての言葉は、死を覚悟の上のことであったか。

布団の下で、T君の体が激しくゆれていた。

彼には告げたいことがたくさんあるはずだ。そして今いちばん告げたいことは、奥さんへの感謝の気持ちだろう。彼は聞きわけのない子のように泣いていた。おしなべてオトコは死ぬまで少年の日の掌のなかから抜け出せぬように、彼もまた少年のままであった。ありがとう、の気持ちに言葉に出せないオトコは泣くことと奥さんへお礼を告げているのだ。

私の横に立つ奥さんは、ハンケチで目頭をおさえられていた。かくじつに時計の秒針は進んでいるはずなのに、どうして病室のなかは水槽に張られた水のように、時間も空気さえもうごかなく感じてしまうのだろう。しかし時計の針は私が病室に入ってから確実に三十六分進み、看護士が巡回してきてシーツを取り替えたとき、私の頬にたしかな風があつた。

と、私の耳元で、

「冥土の土産に、お連れになったら」

そつと囁かれた奥さんは、笑いながら泣いていた。

言葉には《あなた、B子さんを》が略されていたが、それにしてもこの一言ほどみごとな千歳の采配はなからう。

いまの私には——おそらくこの先も、あの橋を渡る勇氣はない。彼もおなじだろう。しかし、彼は、あの橋を、渡って行つた。

「またな」

それが彼のさいごの言葉だった。また、とはどこのことだったか。T君の葬儀に息子の姿はなかつた。

ていたとしたら——いや、人類の他に言葉を持つ霊長類がなぜ存在をしないのか。時間を巻き戻していったら、すべてのイキモノはひとつに交わってゆき、やがて創造の日へと溶けてゆく。それがたとえ犬であれ、一匹の犬のことを深く愛しそして理解できるなら、全宇宙を理解することに繋がってゆくはずだ。

「犬の寿命にくらべれば人間は……」私は話の途中でしまったと思つた。

言葉が途切れたあとに漂う濃密な沈黙を破るように、「生きるって……なんだい」ぼつりと言うT君のその言葉は、まるで世界とのあらゆる関係を突き放すような冷たい響きがあつた。

生きるって——人生ってなんなのだろう。列車の窓から漠然と眺める太陽のように、一緒に伴走してくれているように見えても、実際にはるか彼方に漂っているだけで一緒に走ってくれてなんかいない。そして、いつかの日には朽ち果ててしまう太陽——。

「息子……会いにきてくれるかな……」反りの合わなかつたT君のひとり息子が、家を飛び出したまま音信不通だという。

話が深刻に向かいはじめたので、奥さんの前であつたが、いままなら笑い話ですませるとして、私とT君がB子さん宅へ行つた思い出話をした。

「あなたにそんな武勇伝があつたなんて見直したわ」

そう言うのと、奥さんはさりげなくT君の掛けていた牛乳瓶の底のようなレンズのメガネを外した。

「なんだ……」T君は掛け布団の下から割り箸のような指の手を出すと両の頬をこすり「B子さんか……もう一度、会いたかつたな」と言い、掛け布団を顔の上まで引き上げた。

なかつたけれど、いつの日か、息子はきつと帰ってくるにちがいない。なよりも私は歳月のやさしさを信じている。

そんな想い出をなぞりながら摘んでいた落花生もさいごの一粒になつていった。

私には知るよしもないが、落花生にだつて生きる喜びも哀しみもあつたはずだから、せめてこの一粒は袋にもどして旅行カバンにしまうことにした。

※

M子さんには後日談がある。

数年後、退職された彼女の家の前を通りかかると、玄関先で彼女が赤ちゃんをあやされていた。私の顔を見るとあの日とおなじように深々と頭をさげられた。その場所に黄色い花は見あたらず、葉をつけた落花生の茎だけがあつた。

「嫁ぎ先のおやさんが、独り住まいのわたしのことを案じられて、娘夫婦が同居してくれることになつたのです」彼女の顔が一瞬、ピカピカと光つたように見えた。「娘夫婦とこの子のことは、きつと天国の主人からのプレゼントなんです。いま土の下で落花生の実が育っています。この子が大きくなつたら、主人のかわりに食べてもらいます」

と言うと彼女は赤ちゃんの体に顔を埋めた。

泣かれているようだった。

土の下から、一斉にひらいた黄色い花とともに微笑まれたご主人のカタチが、ゆつくりと浮かびあがつたように思えた。

落花生は、落ちた花が生まれる、と書く。

落花生は一日花だ。茎の根元の方にちいさな黄色い蝶のように
愛らしく、そしてひっそりと咲く美しいその花は、早朝にひらき
お昼には萎んでしまう。

然るに、萎んだ花の子房は長く伸びて土のなかに還り、やがて
あたらしい実をはぐくむことに落花生の名の由来がある。

高山市教育委員長賞

児童文学

あもうのくろめ

高山市石浦町

はしど かおり

—しろがね—

ごっこごっこのおおゆきや

やまに さとに たにに

てんから どつどつと まつてきよる

おりのみみには ゆきんこの うたがきこえる

さく さく さく さく

さく さく さく さく

ゆきのよさがりが あんまり さみしゆうて

おりは ゆんべ こそつと そとにでた

てやあしは つめとおしみて おったけど

なんじやら

はらのしんが ぼっぼと

あつつうて えろおなつたで

ゆきのかたまりを ひとつおつ

がばり ぼばつてみたんや

くちんなか

めらめら めらめら

ゆきがとけて

すうつと のどをおちて はらにしみた

ああ とおく とおく

おまえさまのみやこにも

ゆきは ふつておるんやろうか

おりのほおべたを めえから ぬくといもんが
つうと つたつた

「ごっご」この ゆき

おまえさまにも

どうぞ ぐつてみなされと

かじかむてに さつくりすくつて そらにさしだした

めに みえぬ おまえさまは

おりのてから ゆきだまを なめてくださった

ほほえんで くださった

ゆきよ ゆきよ

おりが ねむれんよさり

さくさくの

あもうのゆきが いやしてくれる

のきにさがった かねこおり

てえのばして つかんでみる

つかむ さきから

かねこおりが とける

すけた つらのの そんなかに

ちろちろはじける こんまい あわのつぶ

おりの ころのおくそこも

こんに うつくしゅう すけて

つつみかくさず おるんやぞよ

おまえさまに

このかねこおり みてもらいてえな

おりの ころを みてもらいてえなあ

おつたえします

ありがたや

はらに おまえさまの たからが

さずかりました

だいじだいじに しとねます

―にしき―

おりが おまえさまの くださった

つきをのんでまっしてから

はやもう

いくつきのひが すんでまっした

ゆめうつつの つかのま

おりは もうひとくち

みずをすくつておくれ と

おまえさまに ねだつておつた

おりは あのみずは わすれん

おまえさまの すくつたみずは

うもおて ところと

したべらのさきから いっぺんに

はらのおくそこまで ながれていった

たいせつな たいせつな

おまえさまとの まつりのよるのこと

そのよから あのたにの せには

つきがうつらんように なつてまったんや

おりが のんでまったでと

むらのしゅうは うわさしとる

つきをのんで こができたといつてはばる

あきまつりのよるやつた

ねんに いっぺんの むらまつり

あんときは

おりもおまえさまも たあんとどぶをいただいたんや

ほうねんまんさく まつりの どぶをはらほうず

そうして ふたあり

つめたい わきみずをのみとうなつて たにへおりたんや

おめえさまは つうつと みずをりょうのてにすくつて

おりにさしだしなさつた

ぶあつてい てのひらのわきみずに

まんまるおつきさんが うつくしゅう

ままこおひかつて うつつておつた

おりは そのおまえさまの てをすすつて

うんまいみずを

たつぷりのみほしたんや

いきかえるくらい つめとおて

とろける あまいみずやつた

おまえさまの みやこのはなしをききながら

—りよ—

さわさわ さわさわ
さわさわ さわさわ

あおい くさがゆれる

むむむむ ぶつむむむ

めぶいて いきかえった

やまの きのうたがきこえる

ええかざがする

くす くす はなの かざ

めを つぶつてみる

おりの いまおるここが

やまの うえでのおて

てんの くものなかなんやうて

おりはこの こまい しろちどりのはなになって

おまえさまのござる にしのみやこまで

かぜに ながされ

つうい つうい とんでいくんや

とんでいって

くものまから ちいとだけ

おまえさまの おすがたを

なつかしい おまえさまの おすがたを

おがむんや

そおして ひとつだけ

さえずってくる

ちゅい ちゅい ちゅつちゅ

ちゅい ちゅい ちゅつちゅ

おまえさまの ぼうのこが

りっぱな ぼうのこが うまれました

ちちを がぶがぶ のんで

でこう してなうて おりますと

ちゅい ちゅつ ちゅい ちゅつ

さとのしゅうは ぼうのはなが あんまり

たかくつきでてるおるで

それは おまえさまのおかおに うりふたつなんやが

ぼうを とりとよびよる

はなのたかい わしのはなのとりと よぶ

おりは そのはなを

じまんにおもつておる

ちちを くわえる ぼうのかおを

いとしいとおもつておる

かみも そうそう おまえさまのかみと おんなじ

あかあい ちじれ

まっしろい ちちを くちにたらしめて

ぐいぐい すいついてはなさん

ぼうよ

いいいちち だしてやるでな

よおけのんで でこうなるんやぞよ

つぶらを ねどこに

すやすや ぼうは

ねんねこ ねいきをたちよります

—くれない—

ちちを くれながら おりは

おまえさまが

はじめて このやまに ござったときを

おもいだして おる

おりは おんなながらに うまれてこのかた

ちからがとりえの むすめや

そこらへんの わかいもんに は まけん

おとうとつらつて やまのおくにはいり

りょうをしたり きをきつたり まいにち

おとこかおまけの はたらきをしておった

くろべえの むすめは まつくろくろめ

すすをかむつて まつくろくろめ

おとこのなりの まつくろくろめ

おりを みんなは しらんうちに

くろめとよんでおった

おりは いろけは なかつたんやけど

やまのかせぎは ひといちばい
あせながして いちんちすごしや そんなでえかつた

あもうの おやまには ごっそりおたからがある

はるは やあらかい めがよおけ
なつは さかなが うようよ
あきには こげやらきのみやら
ふゆにや けものを おつかける

あさからばんまで やましごと
せいだしや

いちんち あつというまに すんでまう

そんな あんとき

おまえさまが たあんとおともをつれて

あもうへ やつておいでになつたんや

いきなり やつたで

びっくりついたあ

そやつて おまえさまは

けえは あかいし

はなは たかいし

だいいち いままでみた おとこしゅうのなかでも
とんでもないくらいに せいがでかつた

にしのみやこの おえらいおかたと

みんな くちぐちに

おまえさまの うわさをしよつた

どうやら りつばな ごみぶんのおかた

みやこへの やまのさいを さがしにござつたんや

あもうの きをきりにござつたと

おまえさまは さつそく おとうのくろべえを
おともにおつれなつた

やまのことなら くろべえがいちばんと

そして おりもおともに したがつた

おまえさまは おりが あんまり

はたらくんで めをまるうなさつておつた

にを どざり おねて

おとこまさりに やまをとんでまわつておつたでな

でかい ようしとなつたさいを みやこのたちものに

えらぶ おまえさまのおすがたは

とおくからながめておつても
からだがあつうなつて

おりは ずつこのさきも

おまえさまが ここにおつてくださればいいのにと

ひそかに ねがつておつたんや

ひとなつがすぎて

あもうでのごようが すんだ

あの さいごのひ

おまえさまは その ぬくとい

りょうので おりの ごつついてをはさみ

だいに なでてくださった

そして わかれを
ゆつてくださった

てんにちかい

てんが うまれた

このあもうを わすれないと

あれから いちねん

ちちを ほおばる

このぼうを わすれがたみと

おりは だきしめ

いつか おまえさまに つたえたい

りつばに しとねて つたえたい

おりは しあわせもんですと

—くがね—

おさないとりは ようしてくれます

そいで さいくもんが ようでまます

いつつになつた そのとしに

かかさま ひとりで いねこきが

たいへんでしよう と

なたを ちよちよいと きのきれはしに

あてたかとおもうと

あつというまに そのさきから

ひらり ひらりと ひとがたの
これまた どうじゃい てにのるほどのものを
つきからつきへと こさえました

とりのてに なたは おおきく
まさか こんな こまいさいくもんが
とんででてくるとは

かかさを てつだう
しろしょうぞくの けらいどもやと
せつせこ せつせこと

いまにも のらを かたつけてくれそうな
こまい けらいども

とりの やさしい ころろにそでがぬれた
しぼるほどに そでがぬれた

かかおもしろい
おさなごころに うれしなみだがおちたんや

とりよ その きょうなわざは
いつか おまえの とりえとなつて
いつか りつばな わかものになつて

高山市長賞 小説

確かな君と、曖昧なあたし。

「強くなりたいたい、という思いとは裏腹に、その笑顔はあたし(僕)を一層弱くさせる。出口が見えない。確かなあたし(君)に辿り着けない。」

あたしの名前は？

憂衣。ああ、そうだ。憂衣だ。たぶん憂衣だ。親はなんでこんな暗そうな名前をつけたのかわからない。たまに自分の名前を忘れそうになる。ほんとにたまに。それでさっきみたいに「ああ…あたし、憂衣か。」と不思議な感覚に襲われる。そんなことがたまにある。たまに。ひどいときは今自分がどこにいて、何をしているのか一瞬わからなくなる。

「あー！」
「びっくりした。何？」
「課題してない。」

みやこの ととさまのもとへ
かけさんじ
きつと てがらを たてることやろう

あもうのくろめは まつくろくろめ
てんに うまれた
おやこうこの とりのかか

あつさ
やまのかみさま かんしゃもうします

おりは ほんとうに しあわせです

まほろばの
とおいみやこの おまえさま
どうぞ ためらつて
おたつしゃで いつまでも

(完)

ふところふかい あもうの しぜんに けいいをこめて

2010 しょうがつ

— 参考 — 伝承 飛騨河合天生民話

高山市花里町

橋 本 雅

「いつものことじゃん。」

「今日までだったのに。あの先生怖いんだよなあ…。つてかそろそろ足痺れてきたんですけど。」

「知らない。」
「…鬼。」

ああ、今あたしは喜一の膝に頭を乗せてぼーっとしているんだ。この喜一の膝は確か。(痺れているらしいが知らない)喜一がいることも確か。その確かな喜一が吸っているのはマルポロであたしはその匂いが嫌い。それも確か。あと確かなことといえば…さつき母親の手伝いで玉ねぎを切っていた時に包丁で切った小指の痛み。ずきずき。おさまったり、また痛み出したり。この痛みも確か。曖昧なあたしから確かな痛みが出てくるのもなんだか変な話だけど。

あとは…もうわからない。あんまりわかりたくない。蛍光灯に自分の髪を照らし合わせながらおつかおつか上へのぼって行くマルポロの煙をただぼーっと眺めていた。喜一の手があたしの目の前でちらつく。

「憂衣?どこ見てんの?」

「…宇宙の果て。」

「宇宙に果てってあると思う?」

「無いって思ってたら無いし、あるって思ってたらあるよ。」

「…じゃあ俺の中に宇宙の果てはあるな。」

「…夢が無いね。」

「今に始まったことじゃないだろ。ってことは無いと思ってるんだ?」

「当たり前でしょ。」

「夢があるね。」

喜一はそう言つて少し笑つた。そしてまたスパスパとタバコを吸い始めた。

彼女、憂衣は確かに此処にいる。僕の目の前に。それは僕なんかより彼女がわかっていることだと思ふのだが彼女は自身を「曖昧な存在だ」と言う。言葉にすると、「はつきりしていない」と言う。僕自身、勉強はできる方だと自負しているが、彼女の言動はまったく理解できない。わからない。理解しようとすればするほどわからなくなる。一度寝る前に、彼女のなぞなぞについて深く追究しようとしたことがあつたが夜が明けた。そんな彼女は今日も僕を「曖昧な世界」へ引き込もうとする。

「ニコラスはどこにいるでしょう?」

「……え?」

質問やなぞなぞを僕に問いかけているときの憂衣は実に楽しそ
うだ。

「…わかんない?」

「……さっぱり。」

「頭固い。」

少しイラッとしたが僕はいつものように受け流すことにした。
ニコラスがどこにいるかなんて考えてたら、あつと言う間に白髪
頭になつちまう。僕はフーッと煙を吐いた。

「あ、怒つた。」

「怒つてない。」

「じゃあイライラしてる。」

「僕そんなに顔に出る?」

「うん。」

にっとう憂衣が笑つた。そんなにわかりやすいかな。僕はまた煙
を吐いた。

「マルボロ、臭い。」

鼻をつまみ、眉間にシワを寄せながら憂衣が僕を睨んだ。色素
の薄い目が光に照らされて茶色から黄土色に変わっている。少し
見惚れそうになつたが、憂衣が僕のタバコを取り上げたので視線

始まった。

「ニコラスは、どこにいるでしょう?」

「また突拍子もない…。」

「いつものことですよ。」

「…ニコラスって誰?ってか何?」

「考えて。」

僕は「はいはい。」と答えつつタバコの灰を落とした。

「宇宙?」

「ニコラスは酸素が無いと生きていけないの。」

「じゃあ人間なんだ?」

「犬だつて猫だつて昆虫だつて酸素が無いと生きていけないよ。」

「…じゃあ地球にいるんだ?」

「いちおう。」

「なんだそれ。」

「ニコラスは強そうに見えて弱い。ガラスみたいに。触れただ
けで壊れそう。」

「ふーん。それで?」

「…ちゃんと聞いている?」

「聞いてますとも。」

「目はあんまりよく見えないの。手と足は小さくて、愛が主食な
の!それで、ニコラスは仮名で、他にもいっぱい名前があるの。」

「…ほお。」

は取り上げられたタバコにうつつた。

「あ、返せよ。」

「吸つても害が無くて、香りもアロマみたいなタバコができれば
いいのに。」

体を起こしてタバコを眺めながら憂衣は口を尖らせた。やばい。
足がビリビリしている。立てなさそう…。それはそうとニコラス
はもういいのか?逆に僕が聞きたい。ニコラスはどこでしょう?

「憂衣が発明したら?」

冗談のつもりで言つたのに、憂衣は真剣な顔で、そうしうか
な、と言つた。

「でもカルバンクラインとマルボロが混ざつた匂いは好き。」

憂衣が僕の首元に鼻を寄せる。色素の薄い髪が頬をくすぐつて
少し心地よい。

「でもマルボロの匂いだけだったら嫌い。」

それだけ言うと、憂衣はまだ痺れがとれていない僕の膝に頭を
乗せた。声を上げそうになつたが、それは情けないので我慢した。

「まだ痺れてる?」

「…別に。」
「やせ我慢。」
「そう思うならどいてよ。」
「やだ。」

僕と憂衣は、正反対だ。まあ、男と女っていうのはもちろんのこと。まずさっきのとおり僕は愛煙家で、憂衣はタバコが大嫌いだ。タバコの煙を吸うだけで吐き気がするほどで僕が吸うたび「臭い、臭い。」と鼻をつままれ嫌味を言われる。あと、僕はポジティブで楽観的で平和主義。座右の銘は「なんとかなる。」一方、憂衣はネガティブで悲観的で、虫も殺せないような顔をして実は喧嘩っ早い。憂衣の座右の銘は……なんだっけ。忘れた。あ、僕は忘れっぽくて、憂衣は記憶力がいい。ただし変なところだけ。なんでもそんなこと覚えてんの？ってくらいちゃんと覚えてる。だから、へたなことは言わない。言えない。まだたくさんある。憂衣はとにかく素直じゃないし、意地っ張り。僕は素直すぎてたまにそこを怒られる。それと、僕は理数系で憂衣は文系。僕は現実主義で、憂衣は典型的なロマンチスト。あ、あと僕がずっと好きで買い続けている漫画を憂衣は「おもしろくない。」と言って三巻で読むのをやめた。とにかく飽き性で気分屋。

…とまあ、まだまだあるけど言い出したらきりが無い。そのくらい正反対の僕らが、別に付き合っているわけでもないのにお互いの部屋を歩き来して、何をするわけでもなく、唯一の共通の趣味である邦楽ロックを流しながらただぼーっとしている。はたか

「だからさ。なんで？ってのはなんで？」
「…。」

まただんまりだ。このやりとりももう十回目。いい加減、僕も諦めればいいのに。しつこいからなあ。僕。第一最初から諦められる恋なら最初からしない！

「…喜一はさ。極上ステーキを食べる前と、食べてるときと、食べた後、どれが一番 幸せ？」

憂衣は質問好きだ。しかもちよっと考え込むようなすぐには答えられない質問ばかり。ニコラスがいい例だ。

「食べてるとき、かな…。」

「じゃあ、赤ちゃんのと子どもときと大人のとときは？」

「子ども？」

「じゃあ、友達と友達以上恋人未満と恋人は？」

「恋人！」

僕は即答した。憂衣の大きい目が少し細くなった。

「あたしは、真ん中がいい。」

この答えも十回目。質問の内容は毎回変わるけれど、最終的にはいつもこの答えに辿り着く。わかっていただけ。くそう。OK

ら見たら不思議な光景だ。僕もそう思う。

僕らの関係を一言で言うならば「友達以上恋人未満」っていうのがしっくりとくる、だろうな。そう思っているのは僕だけかもしれないけど。僕は憂衣のことを女として見ていないわけではなく。…まわりくどいか。僕は憂衣のことが好きだ。出会った時からずっとそりや健全な男ですから、下心がまったく無いわけではない。無い方がおかしい！男女の友情なんて無いと思う。現に僕が友達の憂衣を好きなんだから。この「友達」という一線は僕がキスなりなんなりすれば、簡単に越えられるだろう。僕にその勇気さえあればの話だけど。あとのことを考えたら怖くてとても。だから僕はその一線を越えようとする勇気を言葉に託してみるんです。

「憂衣、付き合おうか。」

タバコを灰皿に押し付けた。今日で十回目の告白。十回目でもいまだに緊張する。今日こそは！なんて期待も少ししてる。

「…なんで？」

やっぱりか、と思ったけどやっぱり少しへこむ。十九年間生きてきて女の子に告白は何回かしたことはある。だけど、「なんで？」と即答した子は憂衣だけだ。

されるわけでもなく、すっぱりフラれるわけでもなく、憂衣はいつも僕を歯がゆい気持ちにさせる。

「今こうしても楽しくない？」

「…楽しいけど…嫌だ。」

「どうゆうことよ。」

「わかんない！歯がゆいんだよ！きーってー！」

勢いよく立ちあがったが足がまだ痺れていて、うっと奇声をあげ、そのまま倒れこむようにベッドにダイブした。まだ嫌いって言われないだけマシなのかなとか思いつつ僕は枕に顔をうずめた。憂衣の髪の毛のおいがする。歯がゆさを忘れるためにこのまま眠ってしまったかった。

しばらくしてせつかくうとうとしてきたのに、憂衣の一言で一気に目が覚めた。

「彼女、ほしいの？」

この子は無神経なのかな？少しイラッとしたけど、顔を憂衣の方へ向けた。でもこんな質問は初めてだ。

「彼女、つくっていいの？」

「…だめ。」

ああ、なんて矛盾している。少し意地悪のつもりで聞いたのだ

が逆効果だった。余計歯がゆくなくなってしまった。大馬鹿だ。

「…なんで？」

「甘える人がいなくなる…。」

憂衣は眉間にシワを寄せた。

ハタから見たら、わがままとか傲慢とか小悪魔とか、そんな感じに見えるだろう。けど僕は憂衣が人一倍、いや、人十倍くらい寂しがりやなのを知ってる。独りがとても嫌いだ。けど男女間わず友達は多い。だったら友達に甘えたらいいじゃないか、とも思うけど本人曰く、友達に甘えるのは嫌らしい。僕にはあまり理解できないが、それは価値観の違いだからしょうがないかと思う。まあ、逆に考えれば僕だけに甘えてくれるということだし嬉しい限りなのだけれど、それもそれでなんと歯がゆいし…それにずるい。そんなことを言われたら、逆に嬉しくなってしまう。それをわかっていて言っている気がしてならない。少し恐怖さえ覚える。確信犯なのだろうか。

「ずるくない？」

「…ずるいよね、やっぱり。」

そう言っ、しよげる憂衣。これも計算か！とか思いつつ僕はやっぱり憂衣の思うツボなんだと実感する。

男女の友情は成立するけどそれが酷く脆いことも、簡単に壊れてしまうことも知ってる。わかっている。嫌われたくない。だから、こんな曖昧なことしか言えないのだけれどやっぱりずるいのかな？

「(おお…今日はいつもより長いな…)。」

喜一も歯がゆいと思うし、あたしも歯がゆい。そりゃ全部、自業自得なんだけどやっぱりあたしも歯がゆい。喉の奥に鉛が詰まっているような、何かがずつと腰を据えているような、どうしようもなく切なくて歯がゆくて言葉では言い表せない。

「…リスカ、やめたら？」

そんなことをごちゃごちゃ考えていたら、喜一が眉間にシワを寄せながらあたしの左手首を眺めながら言った。

あたしは物事を深く考えすぎないところがあるらしい。自分ではそうは思わないけど、喜一にも友達にも、親にまで言われる。その考えに行き詰るとイライラして自分を傷つけてしまう。いつそ死にたい、消えたいとも思う。何度もやめようと思っただけど、やっぱり衝動には勝てなかった。そしてやめられないまま今に至る。腕には濃い傷痕から薄い傷痕まで様々で、さらに痣までついている。

「はあ…ううん、ずるくないよ。」

僕はいろんな意味のこもった溜め息をついて、憂衣の頭を撫でた。憂衣は相変わらず眉間にシワを寄せたまま下を向いていた。

「(あ、考え込み始めた)。」

あたしは、ずるいのかな？

喜一とは、恋人にはなりたくないけど傍にはいてほしい。他の誰かじゃだめで、喜一じゃないと安心しない。タバコも大嫌いだけどそれでも喜一じゃないと嫌だ。

あたしは、喜一が好きだ。

だけど恋人になってしまったら、どうなるのかあたしは知っている。

自分が自分じゃなくなる。何も見えなくなる。気持ちが制御できなくなる。きつと喜一の重荷にしかならない。今も甘えつばなしなのに、余計に喜一を頼って甘えて困らせてきつと、嫌われてしまう。

あたしは知ってる。わかっている。

「…なんか言えよ。」

「…やだ。」

「なんで？」

「喜一がタバコを吸うのと同じ。」

「…？」

「傷が見えるか見えないかだけよ。きつと喜一の肺もあたしの左腕みたいに傷だらけ。」

喜一の眉間のシワが、より一層深くなった。今何を考えてるのかな？怒ってるのかな？喜一は口下手だから思っていることが上手く言えない。でも表情ですぐわかっちゃう。わかかって毎回毎回考えこむような質問をするあたしはやっぱり意地が悪いんだろうな。

「…でも、傷見るの嫌だ。」

「あたしも喜一がタバコ吸う姿を見るの嫌。」

ああ言えばこう言うとはこういうことか。喜一の眉間のシワが、すごいことになっている。ギャザーの入ったスカートみたい。

「もういい。」

拗ねたのか、怒ったのか、喜一は布団をかぶった。あたしのベッド下なのに。

「でも小指のケガは不可抗力だよー!」

喜一は何も答えなかった。答えてくれなかった。「もういい。僕も吸うから好きだけ切れば。」と言わないのは喜一の優しさなんだと思う。

ねえ、喜一。こんな曖昧なあたしだけけど、ちゃんと喜一のこと好きだし、いつも想ってるよ。彼女なんてつくってほしくないし、他の女の子と喜一が触れ合って、想い合ってほしくない。そんなこと想像もしたくないよ。それは確かなの。でも何か、何かが邪魔をするの。彼女でもないのに、こういうこと思うあたしはおかしい?でも「彼女」じゃなきゃ思っちゃいけないのかな?じゃあ「彼女」と「好きな人」の違いってなんなんだろう?「付き合う」ってなんなんだろう?

あ、あたしも眉間にシワ寄ってる。イライラ。

「バイトだから帰る。」

ベッドから飛び起きて、喜一は帰る準備をし始めた。喜一が帰るときはいつも「バイト」。本当にバイトの時もあるし、バイトが無い日でもバイトだから帰ると言う。これはいまだに謎。喜一のことでも唯一わからない。でも追求しても仕方ないと思っ、あえて聞いていない。単純そうだけど。

のだ。これが考えすぎなのかな。うーん。

「憂衣——」

一階から母親に呼ばれ、一気に現実に戻された。どうせまたあの話だろう。母親には悪いけど、あたしは前のお父さんしか、お父さんとして見れない。意地とか、そんなもの張っているわけではなくて——…本当は頭ではわかってる。喜一との関係にしても、母親の再婚にしてもあたしは今の関係が、景色が、気持ちだが、日常が、変わってしまうのが怖いだけなんだって。ただ、それだけなんだって。

また鼻の奥がつーんとした。唇を噛み締めて、母親のいるキッチンへ向かった。

あたしは やっぱり ずるい?

二

決まって月曜と木曜は後ろが重い。この曜日は憂衣が僕の家へ来て、帰りは自転車の後ろに憂衣を乗せて、憂衣の家まで送っていく。まあ、今日は水曜なので、後ろは軽い。そういえば憂衣と出逢ったのも水曜だったな…。その日もちょうどこんな晴れと曇りが混ざったような空をしてて——…人間の記憶ってものは日

「…わかった。またね。」

あたしは少し笑って右手を振り、喜一は部屋を出た。喜一も少し笑ってくれた。しばらくして窓の外からキーコキーコという自転車を漕ぐ音がした。急いで窓を開けて、自転車を漕ぐ喜一の後姿が見えなくなるまで、あたしはずっとずっと見つめていた。それが習慣になっていた。空は赤く染まっていたけど灰色の雲がところどころに散らばっていてあたしの心みたいだった。鼻の奥がつーんとなった。網戸を閉めて一息吐き、後ろを振り返るといつも通りの光景が広がっていた。飲みかけのジュース。広げたままのポテトチップス。めくれたままの雑誌。あたしが今まで読みあさっていた少女漫画の束。かかりっぱなしのコンポ。喜一が勝手に買ってきて、勝手に置いてった灰皿。ぐしゃぐしゃになった布団。

「あ、ペンケース忘れてる。」

明日学校持っていくってあげよう。部屋を一通り片付けていつも通りの場所に座った。

チリンチリン

風鈴が鳴った。いまだに喜一がいないこの部屋に慣れない。寂しい。もうあたしも部屋も喜一でいっぱいなのだ。彼女でもないのに変かな?かと言って片思いというわけでもない。うーんうーん。でもあたしは確かに喜一のが好きだし、いないと寂しい

日に薄れていくけど、あのとときの憂衣の表情、仕草、髪型、まつげ、肩、目線、第一声、全て鮮明に覚えている。

憂衣の第一声は——…

「人ってさ、誰からも必要とされなくなったら、どうなると思う?」

その日は二限をサボっていつものようにタバコを吸おうと裏庭へ行ったら初めて見る子がそこにしゃがんでいた。

細くて白くて、髪は何故かぐしゃぐしゃ。大きな目はどこかの果てを見るような、そんな目をしていた。頬には涙の痕とたくさん泣いたのか、頬が少し腫れていた。

「あ…すいません…。」

何がすいませんなのか自分でもよくわからないがつい謝ってしまった。正直ちよつと見惚れてしまっていた。見惚れてすいません、のすいませんかもしれない。それも意味がわからないけど。

それから少しだけ僕らは見つめ合っていた。憂衣は無表情だが何かの拍子に泣き出してしまいうな、そんな顔をしていた。僕もすぐに立ち去ろうと思えばできたのだが、そんな顔をしているもんだから、そうもいかなかった。だからと言って何か言葉をかけるわけでもなく、ただ憂衣の目を見ていた。目が離せなかった。

少しして、ようやく憂衣が口を開いた。

憂衣が下を向いた。肩が少し震えている。

「人ってさ、誰からも必要とされなくなったらどうなると思う?」
「…へ?」

「な、泣くなよ。」

すごい間抜けな声を発していたら。憂衣は相変わらずさっきの表情のまま。

どんな言葉をかけていいのか何をしていいのか全くわからなかった。

「人ってね、誰からも必要とされなくなったら、ツマサキから灰になって、消えちゃうんだよ。さらさらーって。」

「泣いてない…。」

(そういやこの頃から天邪鬼だったな…。)

どんな言葉を発せばいいのか全くわからなかった。というか、少し混乱していた。

「友達とか、いないの?」

「…いるよ。自慢じゃないけどたくさん。」

「じゃあ消えないじゃん。」

「必要とは違うでしょ。」

「人間は…消えないよ。」
「…君、現実主義ね。」

「…。」

確かに現実主義だけど。でも間違っていないでしょ?

「いないとダメ、生きていけない、つてほどじゃないでしょ?」

「…そうかな?」

「…あたしはそうでもない。」

「そんなこといつも考えてんの?」

「…。」

「もっと気楽に考えようよ。ポジティブにさ。」

「…君、嫌いな食べ物ある?」

「…ピーマン。」

「いきなりピーマンを好きになれ、つて言われても無理でしょ?」

「消えたところ、見たことあるの?」

「…うん。まだ。だけどあたしの好きな漫画家が言ってた。」

「…。」

「あたし、今誰からも必要とされなくなったから、もうすぐ灰になって消えるんだ。」

「そりゃーね、…。」

「それと同じ。いきなりポジティブになれつて言われても無理。」

「…じゃあ少しずつ!」

「…:…あたしと君、正反対だね。」

また、やってしまった。

三

そう言つて憂衣は少し笑った。思えばこの時から、僕は憂衣の曖昧ワールドに魅きつけられていたのかも知れない。人間って自分に持っていないものを持っている人に魅かれるつて言うし。憂衣の質問?なぜなぞ?に答えるのも少し楽しい、とか思う自分が怖いけど。憂衣のことになるとついつい僕も考えすぎになる。その日から僕は少しづつ仲良くなつていった。でもあの日泣いていた理由はいまだにはつきりとはわからない。聞いても濁されるだけだった。だからもう深く聞かないことにしていた。でもやっぱり今でもあの泣き顔が脳に焼き付いて、離れない。

お湯に浮かぶ赤いまだら模様。ピー玉の中身みたい。やつてしまったーどうしよーなんて思いつつ、かれこれ一時間くらい眺めている。…また喜一に怒られる。今度こそ見放される。怖い。けど少し怒られたいな。傷痕に気づいてほしくない。けど気づいて欲しい。触れたい。触れられたい。抱きしめたい。抱きしめて欲しい。けど今までの関係が崩れてしまうかもしれない。嫌だ。けど触れたい。触れたい。好きだと言いたい。けど怖い。怖い。怖い。気づいて欲しい。助けて欲しい。怒って欲しい。けど、けど、けど、だけど。

「いかんいかん。」

矛盾。矛盾。矛盾。矛盾。矛盾。矛盾。

首を左右に振つて雑念を振り払った。憂衣がいつも自身のことを「曖昧」だと言う度に、僕はなぜか胸が張り裂けそうになる。憂衣は僕のものだ、と堂々と言えたら、抱きしめられたら、君は「確かな君」になれるのか?考えるけどいつも答えは出ないまま。

切つても切つても矛盾する脳みそ。考えても考えても、あたしは「確か」にならない。

怖い。切ない。寂しい。苦しい。愛しい。欲しい。助けて。嫌い。好き。好き。好き。死にたい。生きたい。消えたい。気づいて。

「姉ちゃん…。」

「ドア開いてるし、どうしたのかと思ったら唸ってるし…。具合悪いのかと思った。」

「いや…大丈夫…。」

「悪い夢でも見たの?」

「…夢…。」

絞れそうなTシャツを脱ぎ捨て、新しいTシャツを着ている最中に、夢のことを思い出した。とんとん海底に沈んでいく憂衣。

「ちよつと、喜一!?!どこ行くの!」

憂衣に、会いたい…。

気づいたら、自転車に乗っていた。今会いに行ったら「汗臭い。」って嫌がられるかな? いちおうTシャツは替えただけ、言われかねないな。でも、今、君に会いたい。君が海底に沈む前に…。

「憂衣?もうお風呂あがった?」

洗面所で着替えていると、ドアの向こうから母親の声がした。

「うん。」

「なるべく早く髪を毛乾かして、リビングまで来てちょうだい。」

しは海底にいるような気分で二人を眺めていた。母親…いくつだっけ? そう若くもないのに、化粧も服装もちゃんとされていて、少し頬まで赤らめている。そのことに、なんでこんなに嫌悪感を抱いてしまうんだろう? 二人の会話なんて、全然耳に届いていなかった。もうキスはしたのかな? 抱き合って、愛し合ったのかな? そんなことをとんとん考えてしまう自分にも嫌気が差した。少し吐き気もした。

「憂衣ちゃん。憂衣ちゃんさえよかったら、僕は君の父親になりたいんだ。」

もう何を答えていいのかもわからなかった。眩暈がする。

「憂衣、さつきから黙ってないで、何か言ったらどうなの?」

「いや、ちよつと唐突すぎたかな。ごめんね。そうすぐにはいいよ、なんて言えるわけないもんね。」

「いえ…。」

「あ、あと…もうひとつ報告があるの…憂衣に弟ができるかもしれないの。」

海底からマグマまで一気に突き落とされたような衝撃が脳内に走った。気づいたら裸足で家を飛び出していた。

「憂衣!?!」

「憂衣ちゃん!」

「…なんで?」

「紹介したい人が来てるの。」

ついにこのときが来たのか。また喉の奥の鉛が大きくなったような気がした。

「…。」

「憂衣?聞こえてるの?」

「….:わかった。」

「もう…。なるべく早くね。」

顔は見えないが、さぞ幸せそうな顔をしているのだろう。母親には申し訳ないが、あたしは全然喜べない。たとえ新しい父親が神様のようないい人でも、あたしは喜べない。それは前の父親が大好きだったからなのか、今の光景が変わることの恐怖からなのか、もう何もわからなくなっていた。左手首の傷が痛んだ。

「初めまして。榊原と申します。」

「…初めまして。」

「愛想が悪くてすみません。改めて、娘の憂衣です。」

「いやいや、写真で見たとおり、美しい娘さんだ。玲子さんによく似ている。」

「あらやだ。うまいんだから。」

ハタから見たら和やかな雰囲気なのだろうが、相変わらずあた

もう何も聞きたくない。喉の奥の鉛が、脳内に転がってゴロゴロしている。酷く頭が痛くなってきた。

「喜一…喜一…。」

つま先からは血がにじんでいた。喜一に会いたい。喜一、喜一。

「憂衣…。」

振り返ると、喜一がいた。電柱の灯りだけが頼りなので、あまりはつきりと顔は見えなかったが、あの声は確かに喜一だ。夢なのではないのだろうか? でもつま先が痛い。夢じゃない。

「え、何してんの?裸足だし…あ!お前…また切ったろ?」

喜一が近寄ってきて、あたしの左手首を掴んだ。その瞬間、いろんなものがあたしの中から溢れ出た。一線を越えてしまう。崩れる。けどどうあかしには、目の前にいる喜一しか、いなかった。見えなかった。

「憂衣…。」

甘ったれ。臆病。わがまま。利己主義。今だけ全部許してください。

「わっ…俺汗臭くない?」

「ううん…。」

「びつくりするだろ。どうしたんだよ…。」

優しい喜一、喜一。喜一は、いきなり抱きついたにも関わらず、いつものようにあたしの頭を優しく撫でた。その無条件の優しさに余計涙が溢れ出た。

「怖いよ、怖いよ。つま先から灰になって消えちゃうよ…。」

「…憂衣…。」

はつと我に返った。まだ、まだ間に合う。守れる。

「…い、いめん…。なんでもない…。」

「…。」

体を離れた瞬間、再びあたしは喜一の腕の中に引き寄せられた。Tシャツの胸元からは、いつものマルボロとカルバンクラインの匂いがした。また涙が出た。

「…喜一…?」

「…。」

自分の無力さ、口下手さに、今一番嫌気が差している。憂衣が泣いていて、消えちゃうと肩を震わせているのに、僕には何もできない。言えない。僕のものじゃないから?付き合おうか、と軽

「なんで、曖昧じゃだめなの?」

また、なんで?だ。ああ、もう。僕は少しずつイライラしてきた。

「逆になんで曖昧じゃなきゃだめなの?」

「…あたしは喜一を飲み込んだりから…。」

「どういうこと?」

「そのままの意味。あたしは…そのままの喜一でいてほしい…。」

「付き合ったら僕が変わるって言いたいのか?」

「…そうじゃなくて…。」

「意味がわからないよ。」

「…喜一には、わかんないよ…。」

「…バカだからって言いたいのか?」

「違うよ!」

「憂衣の言うこと、理解できないことが多いよ。質問だって答えられないこと多いし…だけど必死に理解しようとしてるじゃないか。憂衣のこと守りたいって思うんだよ。こんな僕だけど…憂衣のこと確かか?にしたいんだよ!」

「…。」

「憂衣、僕のこと嫌い?」

「ううん。」

「好きでもない?」

「…ううん。」

「どっち?」

「…好き。大好き。」

く言うくせに、僕には何もできない。こんなにも助けたいのに。救いたいのに。傍にいたいのに。

「喜一、痛いよ…。」

ただこうやって抱きしめることしかできなかった。憂衣にとつたら、これは慰めのハグにしかないのかな。何も伝わらないのかな。

「ほんとに、なんでもないんだよ?」

「なんでもないのに、消えるってなんだよ。」

「…。」

「僕が、必要としてるだろ?」

「え…?」

「…僕は、憂衣がいなくてだめなんだよ。だから、だから…。」

何も言えないことが情けなさ過ぎて、僕まで泣いてしまった。

「もう、僕のものになつてくれよ。」

「喜一…。」

十一回目の告白。泣きながら言うとか最低最悪の告白だ。憂衣は下を向いちやうし、涙は止まらないし、かつこ悪い。かつこ悪すぎる。ちよつと辺りが暗いのが唯一の救いだ。

「じゃあなんで…?」

憂衣は相変わらず下を向いたまま。でももう我慢できなかった。はつきりさせたかった。

「…喜一には、わかんないよ。」

何を聞いても、言っても無駄なのかな。その左手首の傷を減らすことさえもできない。憂衣の涙を無くすることもできない。できない。できない。そんな自分に余計イライラした。

「…もう、いい。」

「喜一…あのっ…。」

「バイトだから帰る。」

もう自分でも意味がわからなかった。こんな時間にバイトなんかあるわけない。初めて憂衣を自分から突き放すようなことを言った。もういいと言ってしまったら、全部終わる。憂衣が僕を追いかけてこないことくらいわかってたから。だからこそ惚れた弱みみたいなもので、自分から突き放すようなことは、言わなかった。言えなかった。悔しいけど、なんか情けないけど、それだけ憂衣のことが好きだったから…。だけど、もう終わりだ。僕の手じゃ憂衣を海底から救いあげることができないと、今はつきりわかってしまった。ああ…なんて女々しい終わり方…。僕は倒れていた自転車を起こし、とぼとぼと歩き始めた。憂衣はやっぱり止

めてくれない。本当にこの世の終わりだと思つたくらい、自暴自棄になつてきた。僕は自転車に乗った。後ろを振り返るかとも思つたけど、もういいと言つた手前、かっこ悪いので急いでペダルを漕いだ。また涙が出てきそうになつたけど、こらえた。早くこの場を立ち去つてしまえばいいのに、後ろを振り返りたくてたまらなかつた。今憂衣はどんな表情をしているんだろうか。また泣いていないだろうか。未練がましいにも程があるが、氣になつて仕方なかつた。

自分から終わらせるようなことをしたのに、この心に開いた穴はなんなんだろう？

今日の後姿はいつもと違う。守り続けてきたものを守つたのに、崩れてしまった。今までどれだけ告白の返事を濁しても、もういい、なんて言つたことなかつたのに。涙もすっかり止まり、呆然と立ち尽くすだけだつた。ああ、またあたしの大事な居場所が、ガラガラと音を立てて崩れていった。本当は氣づいてる。今でも、今も、それらを崩れさせたのも、壊したのも、全部自分なんだというのを。自分が臆病なせいなんだと。曖昧な返事をしてきたのも、母親の再婚と弟の妊娠を認められないのも、手首を切り続けてきたのも、喜一に甘えてきたのも、全部全部あたしのわがままなんだということ。切りたての左手首の傷が痛んできた。もう何回切つたつて、喜一は見ても怒つてもくれないうらう。喜一がいるときは切つてしまおうに、いなくなつた途端切る氣が起こらなくなつた。意味がわからない。本当にわがままだ。

が言うのもなんだけど、姉ちゃんは結構プラコンだ。歳が六つ離れているので、小さいころからすごく可愛がつてくれている。ちなみにバツイチだ。

「お父さんもお母さんも旅行中だつたからよかつたものの、いたら大目玉なんだからね。」

「…めん。」

「どこ行つたのよ。」

「…フラれてきた。」

いや、フツてきたのか？もういいって言つたのは僕だし…。…もうどうでもいい。どうにでもなれ。

「こんな時間に家まで会いに行つたの？」

「偶然、外で会つた。」

「ええ？あんな真夜中に？」

「うん。」

「その子を送つてきたから、こんな時間になつたの？」

「え…いや、一人で自転車ひきながら帰つてきたから…。」

「じゃあその子置き去りにしてきてたの？」

「…。」

「何それ！フラれた腹いせ?!」

「そんなんじゃねえよ！」

「でもあんな時間に一人にきてきたつて…何かあつたらどうすんのよ。」

大事だからこそ、守つたのに、守ろうとしたのに、あつけなく壊れてしまつた。

「喜一…。」

小さな傷でも、見つけてしまつたらズキズキと痛みだしてしまふ。それと同じで、もう喜一は戻つてこないとわかつてしまつた途端、また涙が溢れだしてしまつた。喜一を飲み込まずに済んだはずなのに、守れたはずなのに。喜一のためだと思つたのに、それも自分自身を守りたかつたというただの自分のエゴだつたのだと、今更になつて氣づいた。わかつてる、わかつてると言いながら、自分を守りたいだけだつた。肝心なことをあたしはわかつていなかつた。ああ、あたしは揺れすぎている。矛盾しすぎている。だからあたしは曖昧なのだ。喜一への氣持ちさえも、好きという氣持ち以外はふわふわして、何がなんだかわからない。もう、わからないことだらけだ。どうしたら、どうしたら、どうしたら、どうしたら、どうしたら…考えれば考えるほど、鉛は大きくなるばかり。つま先を見ると、少し霞んで見えた。

四

「あ、やつと帰つてきたーあんだどこ行つたのよ！」

とぼとぼと歩いていたので、家に着くころには辺りはもううすすら明るかつた。玄関には姉ちゃんが腕を組んで立つていた。僕

「…。」

姉ちゃんに言われて、少しずつ焦つてきた。自分のことしか考へてなかつたけど、あのあつ憂衣はちゃんと家に帰つたのだろうか？いや、でもあれはどう見ても家を飛び出したに違いないよな…。裸足だつたし…。

「…憂衣…。」

「ちよつと、その子に電話してみたら？」

「…。」

変な胸騒ぎがした。嫌な予感も。すぐに携帯から電話をかけてみたが、つながらなかつた。とりあえず僕は憂衣との共通の友人に片っ端から電話をかけてみた。しかし、誰も知らないと言う。

「その子の家の番号とか知らないの？」

「知らない…。ちよつと家行つてくるわ。」

「そうした方がいいかもね。」

「…。」

帰つてきたまんまの格好で、僕は家を出た。この嫌な胸騒ぎが、氣のせいであつてほしいと心の底から願ひながら、僕は憂衣の家へ向かつた。

「憂衣…昨日の夜から帰つてないの…。携帯も置いていつたまま

だし…。」

一晩中、泣き腫らしたのか目を真っ赤にした憂衣の母親が僕を迎えた。その母親の横には見知らぬ男の人が母親の肩を支えている。

「僕がいきなり父親になりたいなんて言ったら悪いんだ。本当はすまない。」

「雄二さんのせいじゃないわよ…。私が…。」

「…父親…?」

「…憂衣から何も聞いていない?…私、この人とお付き合ひして、再婚しようと思ってるの…。それで、昨日挨拶に来てくれていたんだけど…。」

「挨拶も早々に、僕が憂衣ちゃんに、父親になりたいなんて言っただから…。」

「そのまま家を飛び出して行って…帰ってこないの…。」

再婚?新しい父親?そんなこと一言も言っただけじゃないか?僕は憂衣との会話を思い出せるだけ思い出してみた。だけど、そんな話少しも出なかった。憂衣の前の父親が癌で死んだことは仲良くなって早めに聞いたが…。憂衣とは色んな話をした。なぜかや質問も多かったが、普通の何気ない会話だった。いい話ばかりだった。好きな音楽の話、好きな食べ物の話、宇宙の話、タバコの話、過去の話、未来の話、昨日見た夢の話、月と星の話、本当に数えきれないくらい。だけど再婚の話、母親の彼氏の話、そんなこと

でも…後ろで母親の泣き声が聞こえたが、もう僕には憂衣しか見えていなかった。

「憂衣……!」

五

それは一瞬でした。けれどそれはとても輝いて見えました。キラキラして、チカチカして、みんな笑っていて…あたしはとても楽しかったです。幸せでした。だけど、幸せな一方この幸せがいつか崩れてしまうんじゃないか、という不安と恐怖がいつもありました。そして、その不安のとおりに全てが崩れたとき目の前が真っ暗どころか、真っ白になりました。キラキラチカチカしていたものは、ものすごい速さであたしの前から遥か彼方に逃げていきました。みんな泣いていました。裏切り、裏切られていました。不信になっていました。依存していません。怒っていました。いみじみあつていました。迷っていました。逃げていました。そんな状況に耐えられなくなり、あたしも逃げ出しました。もうどうしたらいいかわからなくなつて、逃げ出してしまいました。そのときわかりました。一線は越えてはいけません。無意味に心を開いてはいけません。依存してはいけません。そうしなければ自分が壊れる。みんなが壊れる。今までの景色、気持ち、関係、会話、そんないろいろなものを守るには、それが一番だと思いました。そうやって思ってきました。だから、守ってきました。守ろうとしました。けどやっぱあたしには無理でした。無力でした。何もできない

一度も聞いたことがなかった。

「弟ができたなんて言ったら余計にショックを受けたのかしら…。」

そうか。憂衣と初めて出会ったときに必要とされなくなったって言っていたのは、父親が死んだからじゃなくて、母親に新しい彼氏ができていたからなのか。しかも弟ができたって聞いて余計に必要とされなくなったって…こういうことだったのか。とどこころに散らばっていた点と点がつながって一本の線になった。なぜか僕までショックだった。憂衣はどんな気持ちで僕にすがったんだろうか。人一倍強がりだけど、泣くときは僕の前でしか泣かなかつた。辛い、苦しい、ということも僕にしかこぼさなかつた。リスカの傷痕も僕にしか見せなかつた。そのくせに、なんでそういう大事なことは言ってくれなかつたんだろうか。なぜ、なぜ、という気持ちが大きくなつていった。

「どうしよう…。警察に捜索願…。ああ…憂衣…。」

「大丈夫だよ。玲子さん…。」

海底に沈んでいく憂衣が頭の中をよぎった。

「あ、ちよつと君!」

今度こそ、救わなければ!たとえ僕の腕が凍って折れてしまつていどころか、自分から崩れてしまいました。わかっているつもりでした。知っているつもりでした。だけど何一つわかっていませんでした。知りませんでした。あたしは、ただの臆病で、自己中心的な人間でした。守りたかつた。けれど結局守りたいのは自分でした。傷つきたくないから、苦しくなりたくないからと、一線ではなく、壁をつくつていたのは、あたしでした。馬鹿だと罵つてください。あたしの好きな漫画家が言っていました。人は必要とされなくなつたら、つま先から消えて無くなる、と。必要とされるなら誰でも嬉しかつたです。たとえ課題を代わりにやつてくれ、だとか飲み物買ってきて、だとかそんな小さなことでも必要とされているなら嬉しかつたです。とにかく人から嫌われたくなかつた。必要とされたかつた。だけど知らず知らずのうちに壁をつくつてしまった時点で、そんな願いは叶うはずもなかつたのです。誰が壁をつくつていて人間を好きになろうとするのでしょうか。あたしには矛盾が多すぎました。こんな人間、必要とされなくなつて当たり前です。はたから見たら幸せなはずなのに、何も不満はないはずなのに、どこか心の中では恐怖と不安と矛盾を抱えています。いつもこんなことを考えてしまう自分に嫌気が差していました。「普通」の人の「普通」の脳みそが欲しかつた。でも人と同じには嫌でした。ここでも矛盾していました。こんな人間、誰が必要としてくれるのでしょうか。ああ、もう謝ることしかできません。ごめんなさい。幸せを望んでごめんなさい。思考回路がおかしくごめんなさい。大人になつていくにつれて、色んなものを見ました。汚いもの、美しいもの、矛盾したもの、強いもの、弱いもの、丈夫なもの、脆いもの、不安定なもの、不確かなもの、

曖昧なもの、好きなもの、嫌いなもの、待つもの、待たれるもの、諦めないもの、諦めるもの、甘いもの、苦いもの、すっぱいもの、見たいもの、見たくないもの。色んなもの。世界は美しいと思いましたが。汚いと思えました。矛盾しています。矛盾の中で生きています。あたしも、みんなも、犬も羊も、てんとう虫も、何もかもそんな世界から逃げたいと思えました。でもここにいたいとも思いました。矛盾しています。だけど、それが事実です。ごめんなさい。消えてしまったら、こんな鉛を飲んだような感覚から解放されるのでしょうか。いろいろな苦しみから、いろいろな不安から、逃れられるのでしょうか。楽になるのでしょうか。わかりませんがこうやって文を書いているという事は、消えていないということなんです。これは、遺書のように遺書ではありません。…たぶん。でもあたしが消えてしまったら、遺書になるのでしょうか。それも消えてしまったら知ることできないのですか。あたしが消えてしまって、悲しむ人（果たしているのでしょうか）、喜ぶ人、変わるもの、変わらないもの、それを見ることも知ることでもできないのですか。あたしはひよつとしたら、あたしが消えてしまったあとのこと、ものを見たいだけなのかもしれません。どう変わるのか、変わらないのか、見たいだけなのかもしれません。何か変わったのなら、あたしはそれだけで「確か」になれる気がします。だけど、こうして空を眺めているとやっぱりあたしが消えても何も変わらないような気がします。あたしが何人いなくなっても、何度いなくなろうとも、雲は流れます。鳥は飛びます。魚は泳ぎます。子どもは遊びます。男女は恋に落ちます。お腹は減ります。喉は渇きます。セックスをして赤ちやんができます。人は

らえるのでしょうか。あたしが消える前に、直接言えばよかったのですが、今更こんなことを言っても信じてもらえないと思つて…。これも自分勝手ですね。ごめんなさい。謝つてばかりですね。でもそれほど申し訳ないと思つています。もつと真つすぐにあなたと向かい合いたかった。それも「普通」の脳みそが欲しかった理由です。いろんなものが邪魔をして、言葉にならなかつた。言い訳にしか聞こえないかな。もう何も言いません。あたしは喜一のことを好きです。今のあたしにはそれだけしかありません。

あ、雨が降り出しました。でも空は晴れています。夕立のようです。砂浜に雨が溶けて、独特の匂いがします。あたしはこの匂いが好きです。全部許してくれるような…そんな感じがします。死ぬという言葉が嫌いです。だから死にたいじゃなくて、消えたいと思うようになったのですが、同じなのかな。もうよくわかりません。曖昧です。手が震えてきました。涙も出てきました。何度も目の前を電車が通りました。魚が跳ねました。もうすぐ日が落ちます。太陽が沈み、月と星が光ります。また一日が終わります。そしてまた太陽が昇ります。漁船が動き出します。植物は成長します。食物連鎖は続きます。何も変わらない毎日。

それで幸せなはずなのに、嫌気が差すのは何故なのでしょう。それなのに変わってしまったら、怖くなるのは何故なのでしょう。人間って変な生き物ですね。だからあたしはもつと変なわけでしょう。きっとこの世界では生きにくいでしょう。逃げるわけじゃない。

そう言い聞かせます。また逃げるのか、という声が聞こえます。

いがみ合い、殺し合います。何一つ変わらない気がします。あたしは世界を美しいものだと思つて消えるのでしょうか。もし最後に見た景色が、一輪の牡丹だったとしたならば、美しいと思つて消えるのでしょうか。もし最後に見た景色が、戦争だったのならば、汚いと思つて消えるのでしょうか。あたしはこういう悲観的なことはあまり外に出さないようにしようと思つていましたが、やっぱり性格なので無理みたいです。今まで迷惑をかけた皆さん、ごめんなさい。

今ここですべて吐き出してしまおうと思つています。迷惑でしょうか。誰が読むのでしょうか。あ、これを読んだのが喜一だったのなら、深く謝りたい。ごめんなさい。いつも振り回してばかりでごめんなさい。いつも曖昧なこと、難しいことばかり言つてごめんなさい。はつきりとあなたのことを好きだと言えなくてごめんなさい。ただ、あなたのことを守りたかつたのです。あたしに付きまとう黒いものに飲み込まれてしまうのがどうしても嫌だった。また難しい話だ、と首を傾げますか？それとももう相手にしてはくれませんか？消えるのであれば、ここですべてあなたへの気持ちをつづりたいと思つています。変な脂ぎつたおじさんが読んでいたら嫌だなあ。…まあいいか。あたしは喜一のことを大好きでした。愛していました。もし、あたしが消えても気持ちだけ残るのであれば、過去形ではなく今もそうです。喜一のことを大好きです。愛しています。だからこそ守りたかつた。周りが偽善だと言つても、喜一が理解できなくても、それがあたしにとつての事実です。今まで曖昧なことを言い続けてきたのもそれが理由です。ごめんなさい散々苦しめてごめんなさい。でも愛しています。信じて

違う、そうじゃない。消えるだけなんだ。逃げるのか。違う。逃げていただけだ。違う違う違う違う違う違う違う！

あたしが守つてきたものは……臆病な自分……？

夕日が沈んで、あたしは目を閉じた。もうボールペンのインクが無くなった。ワンピースのポケットには三百円入っていた。そのお金で買ったのがノートとボールペン。何枚も何時間もこうしてここに座つて書いていた。ありつたけ書いたら何か見つかるかもしれないと思つたから。だけど何も見つからなかつた。ただ残つたのはやっぱり喜一の顔と、漠然とした悲しみだった。もしかしたら喜一が捜しに来てるかもしれない。そんなことを考えているあたしは甘つたれの何者でもない。自分で壊したくせに、会いたいと思う。自分で自分に呆れてしまう。キーンという飛行機が飛んでいる音がしたので、そのまま砂浜に体を倒した。いつも喜一を見送つたあとのあの空に似ていた。ああ、このまま何日何年とじつとしていたら砂浜に溶けてしまひそうだ。喉の鉛とこのもやもやとした不安ごとと砂に溶けてしまえばいいのに。飛行機を掴もうと手を伸ばしたら当たり前のようにするりと手をすり抜けていった。なぜか悲しくなつた。

「会いたい……」

会いたい、と思えば思うほど涙が出た。手が震えた。消える前に、喜一に会いたい。けどもう許されるはずない。あたしが自

分で壊した。突き放した。許されるはずないんだ。

「めんなさい…。」

飛行機がすっかり見えなくなったところ、あたしはゆっくりと海水に足を入れ始めた。まだ生ぬるい温度だった。もう夕日は沈み、少しずつ暗くなってきた。それでもまだあたしは喜一が捜しに来てくれることを少し期待していた。そんな自分に本当に嫌気が差したので一気にお腹まで浸かった。

「痛っ…。」

ガラスを踏んだらしく、足に痛みが走った。最後の「確か」な痛み。そう思ってあたしはゆっくり目を閉じた。あたし、生きていのか。消えたいのか。死にたいのか。なんでわからないことだらけなんだろう。

ガシャン

「憂衣！」

聞き慣れた声だった。はっとして振り向くと、その声の主は汗だくで、息を切らしながら目の前に立っていた。愛用している自転車は倒れていた。

こまで頭悪くねえよ！誰と一緒にしてるか知らないけど、僕をそいつらと一緒にするな！」

こんな怒った喜一、初めて見た。肩と声が震えていた。

「なんで変なことばっか話してきて、大事なことは何一つ言わないだよ！そんなに僕は頼りないか?!母親の再婚のことも、弟のことも受け止めきれないくらいの小さい男だと思ってるのか?!」

違う。違う。もう言葉にならなかった。首を縦か横に振るしかできなかった。

「そうじゃないって言うならなんでだよ…。」

「めんなさい…。」

「めんなさいなんて、聞きたくない。」

「…。」

「ここに書いてあること全部言えよ。全部受け止める！嬉しいこと、悲しいこと、辛いこと、疑問に思うこと、矛盾していることも全部全部全部！」

「喜一…。」

「だから…だから僕のものになってくれよ…。」

辺りはオレンジ色に染まっていた。喜一は靴のまま海の中に入り、骨が折れそうになるくらいの力であたしを引き寄せ、抱きしめた。

「お前…何やってんだよ！」

「…喜一…。」

そんな大声を出した喜一を見たのは初めてだった。大声なんて目立つから出さずもんじゃないなんて言っていたのに。喜一は防波堤から飛び降りると走ってこっちに向かってきた。手にはあたしがさっきまで書いていたノートが握られていた。

「何、してるの…?」

「何してるのはこっちだ！お前今までどこにいたんだよ！携帯も財布も持たずに…。それに…このノートなんだよ！…遺書のつもりかよ！」

「…。」

「また僕にはわからないって?」

「あたしがいなかったって喜一は大丈夫だよ。」

「前も言ったじゃないか！僕には憂衣が必要なんだって！」

「今だけよ！そのうち必要じゃなくなるのよ…あたし…わかるんだから！見てきたんだから！」

ああ、また言ってしまった。さっきわかったはずじゃない。あたしは何もわかっていないこと。知らないこと。

「お前いつつも知ってる、わかっているって言ってるけど、何もわかってないよ！何を怖がってるかわからないけど、僕が失ってかからないと大切なものがわからないやつだと思ってるのか！それだから！見てきたんだから！」

「喜一、スボン濡れちゃう…。」

「うるさい。」

「痛いよ…。」

「うるさいうるさい！早く、早く僕のものになれ！」

「喜一…。」

「バカだって笑う?しつこいって呆れる?」

泣いているような声だった。肩もまだ震えていた。それが痛いくらい伝わったからあたしも泣かずにはいられなかった。声にならなくて、めいっばい首を横に振った。

「憂衣、僕と一緒に生きて。お願い。」

甘いクレープが食べたい。温かい布団に入りたい。朝日が見たい。おはよう、と言いたい。ピアノを弾きたい。風でスカートが揺れるのを感じたい。いろんな本が読みたい。足し算がしたい。抱きしめたい。好きと言いたい。愛してる、とキスをしたい。ああ、ああ、ああ、あたしは生きたい。「確か」に生きていると感じたい。「確か」になりたい。生きたい。生きたい。生きていたい。

ふと下を見ると、先ほど書いていた遺書らしきものは海面でぶかぶか浮いていた。きつと滲んでもう読めないな。

まだ腕の力が緩む様子がないので、あたしはゆっくり喜一の背中に腕をまわした。ところが力は緩むどころか一層強くなった。

「喜一…。」

「……？」
「あたし喜一と生きたい。」

「……憂衣……」

「好き。大好き。愛してる。」

「……ばかやろー！」

告白して、ばかやろうって言われたのは初めてだ。やっぱり相性悪いのかな。性格も正反対だし。だけどだからこそ初めて知ること、わかることがたくさんある。君と知っていききたい。嬉しいことも辛いことも甘いことも苦いことも一緒に知っていききたい。もう迷わない。一番大切なものはわかっている。知ってる。今度は知ったかじゃない。

「……何笑ってんの。」

「笑ってないよ。」

「……笑ってんじゃん。」

「とりあえず服乾かそうか。」

「冷静すぎない？」

「そうかな？」

「……手、つないでいい？」

「……何、いまさら。」

僕は少し汗ばんだ憂衣の手を握り、ゆっくり海中から出た。もう辺りは真っ暗になっていて、空には星が出ていた。

高山市長賞 小説

蛍が飛んだ夜

その日の金沢は、梅雨の頃には珍しく白い雲を浮かべた真つ青な空を見せていた。駅に着いて時計を見ると発車までにはまだかなりの時間があった。さてどうするかと考えていた時、離れた所から自分の名前を呼ぶ女性の声を聞いたように思った。

「知哉さん……」

「……………」

やはり空耳だったかと歩き出した途端、

「知哉さん、待つてー！」

確かに自分の名前を聞いた。

しかし予期しない突然の女性の声には彼は戸惑っていた――

金沢で会社の所用を終えた知哉は、越後湯沢での友人の会に出席するため少し前に金沢駅に着いたところであった。

昭和五十年七月初めの土曜日のことである。

その声を空耳かと疑いつつ、アクセントと声の響きに懐かしい記憶を蘇らせた彼は声が出た方を振り返った。

「あ、そういやニコラスの居場所わかった。」
「え？」

「宇宙にはいなくて、酸素が必要で、愛が主食で、強がりのくせに弱くて、手と足が小さくて、色素が薄くて、飽き性で気分屋で、喧嘩っ早くて、泣き虫で……」

「……けなしてる？」

「ううん。そんなニコラスがすごい好き。」

もう一度、強くその手を握りしめた。

「……遅ろ。」

「ははっ。照れてる。」

「照れてない！」

「痛っ。」

すべてがわかったとき、すべてを受け入れられたとき、やっと確かなあたし(君)に会えたような気がした。

下呂市萩原町

野口 喜代男

すると一人の女性が人込みの中を小走りに駆け寄ってくるのが見えた。彼はそんな女性の姿を以前に見た映画の一シーンのようだと思いつつ見つけていた。

「知哉さん、私です。美紗子です……」

すぐ近くからになった声に彼はようやく我に返った。その声や姿は長い間記憶の奥に閉じ込められていたが嘗ては彼の青春のページを美しい色調で彩った女性のものであった。彼女は中田美紗子といった。父親が自動車関係の会社を営む裕福な家庭に育った女性である。愛らしい容姿と優しく思いやりのある彼女は彼より五歳年下のはずであった。

久しぶりに訪れた金沢の街に美紗子の姿が思い浮かばない筈はなかった。しかし彼女の婚家先迎いを歩いたり見ようなどとは思わなかった。

彼女は今では他姓となった人である。

未練がましくその人の家を見ようとするのは、彼女を深く愛し守り続けた昭和一代生(だ)の彼の頑ななまでの宗教めいた信条が許さなかった。しかし心の奥には人混みでの彼女との邂逅を期待している気持ちも少しはあったのである。

そして今、彼の密かな思いは二十年振りに思いも寄らない現実となりつつあった。

知哉は狼狽しながらも密かな期待を持ったことに複雑な気持ちに味わいながら、彼の近くに来て立ち止まった女性を見つめた。彼は今、ここで現実となった密かな期待が果たして僥倖と思ふべきか否か迷っていたのである。

二

知哉は病気のため二年遅れで金沢大学文学部に入学した。昭和二十六年春、戦後の復興期も真只中の頃である。

入学式の日、兼六園の桜は満開であった。知哉は角帽と金ボタンの学生服がよく似合う大学生になり北辰寮という学生寮に入った。

二人が知り合ったのは、彼が大学の二年生で二十二才、美紗子が女子高校三年生の十七才の時である。彼は大学の友人達が作っている金城会というグループで美紗子と出会った。

そして彼が家庭教師をしている幼稚園児が彼女と従妹という関係で、二人が会う機会が増えていった。

勉強を教えていたのは五歳の女の子で、何とかして大学の付属小学校に入りたいと願う両親の希望で始まった家庭教師であった。

女の子は早智子と言いくくり目玉の可愛い子であった。親が共働きのため美紗子の家を借りて日曜日だけの家庭教師である。でもこの家庭教師は中々大変なのである。

「ねえ、ママは何時お迎えにくるの」

「早っちゃんのお勉強ご苦労様でしたね。知哉さんお疲れでしょう。浅野川辺りまで散歩しません？」

「うん、今日卯辰山まで行ってみようか」

「いいわね。お母さん、これから知哉さんと卯辰山まで散歩してきますからね」

「はいはい、行つてらっしゃい。今日は夕焼けがとても綺麗よ。卯辰山の展望台からは河北潟がよく見える筈よ。気をつけてね！」

美紗子の母が二人を見送りながら好意的な口調で言った。

二人は近くの浅野川縁や卯辰山を散歩し、滝の白糸の碑や徳田秋声等の文学碑を訪ねたりする日を重ねていた。

そして次の年の春、早っちゃんの名前は付属小学校合格者発表の掲示板にあった。

その頃、美紗子は時間があれば何時も大学から帰る知哉を待つて、兼六園下にあるプロムナードの白鳥路を歩くのが好きであった。

この白鳥路は大手門跡近くへの通り抜けて市民が散策する静かな憩いの道である。当時はまだ恋人同士の二人連れは目立つ存在の時代であった。

殊に冬の頃、学生服の彼と歩く白いコートと赤い靴姿の美紗子は人々の視線の的となり、知哉はその度に面映い思いをしていた。

しかし知哉は美紗子に触れたことはなかった。あの芳しい鈴蘭のような香を自分の腕の中で嗅ぐことはなかった。

それは自分が彼女を真に愛しているからだと思はいつも自分に言い聞かせていた。そんな機会が一度もなかったわけではないが

「あーあ、少し疲れたの」

「少し遊びたくなってきた！」

早っちゃんがこうなつてくると、小さい子に慣れていない彼はすつかり困ってしまうのであった。

「美紗子さーん、またお願いしまーす」

「はい……どうしたの？早っちゃん」

「あのね、わたしね、わたしね……」

「そう、それじゃお姉ちゃんとしお歌でも歌つてからお勉強しようね。」

「うん！いいよ」

甘えっ子で我儘な早っちゃんはすぐに飽きてしまい、その度に美紗子が上手になだめてくれるのである。

勉強する時にこんな会話を繰り返していた早っちゃんがキューピッドになり、そして二人は次第に親しくなつていった。

勉強が終わるといつもジュースや紅茶、彼女の手作りのケーキが出る。

「美味しいね！美紗子お姉ちゃんのケーキ」

「そう、まだあるから沢山食べてね」

早っちゃんは口の周りをケーキだらけにして美味しそうに食べた。そんな様子に若い二人が笑い声を上げる楽しい日が続いた。

そんな日々を重ねる内に美紗子は高校を卒業して花嫁修業に入っていた。

美紗子は彼の知的で思いやりのある学生らしい若々しさに惹かれ、彼は美紗子の愛らしさと優しさに惹かれていった。

やがて二人は互いに恋人として意識し始めていったのである。

彼はその都度懸命に耐えてきたのである。それが彼女に対する真の愛であり彼女を守り続けるナイトであると自負していたのである。

十月生まれの美紗子の誕生日を祝う会に呼ばれた雨の夜の帰りもそうであった。

「知哉さん、私送って行くわ」

「いいよ、電停は近いし走って行くから」

「でも濡れたら可哀相だから」

美紗子は彼に傘を差し掛けて自分も入ってきた。同じ傘の中に入つて美紗子と歩くのは初めてのことであった。夜更けの街に人影は少なく、終電の時間に近い電停付近に人影は無かった。

二人は赤い傘の中で肩を触れ合わせながら近くの電停までの短い距離をただ黙つたままゆつくりと歩いて行つた。何時もなら話が弾むのに、同じ傘に入つた二人はどちらからも何も話し掛けることは無かった。その内に小道に入ると美紗子を歩みを止めてしまった。知哉は美紗子が立ち止まった理由がわからないままに自分も歩みを止めて美紗子を見た。彼女の白い顔は雨の夜の街明かりの中で思い掛けないほど近くにあった。

立ち止まって彼を見上げている美紗子の顔が何時もの彼女とは違ふように見えている。二人は無言で見つめ合つたまましばらくの間立ち続けていた。

彼は何故心が激しく揺れるのを感じていた。少し強めになつた雨の傘にあたる音だけが大きく聞こえている。

「美紗子さん……」

何か言わなければと思つて掛けた彼の声が纏れて少し震え気味

に擦れていた。

美紗子は尚も黙ったままでいる。

彼はどうしたらいいのかわからず戸惑ったままであった。

二人は何時もと違う何かを感じながらしばらくの間、向かい合って立ち尽くしていた。

気が付くと電車が近づく音がして緊張が弛み、二人は同時に小さく息を吐いた――

北辰寮に戻ったが、その夜はなかなか寝付かれなくて苦しい一夜を過ごした。

しかし二人はその後も同じような日々を過ごしていたが、あの雨の夜のことはお互いに口に出すことは無かった。

家庭教師がない日は二人で夕暮の香林坊界隈から旧制四高跡辺りを歩くことがあった。

知哉は暮れなずむ頃の金沢の街の情景が殊の外好きであった。空襲を免れたこの古き城下町は戦後の急速な時の流れの中で頑

なに早急な変身を拒み続けていた。ビルは至る所に見られこそすれ決して近代的な建築といった感じではなく、古き都の景観に相応しく至って地味な建築様式と色彩を備えたものであった。

冬を迎えると北陸はどんよりとした特有の空模様になるが、金沢もやはり街全体が鈍色の控えめな色調に変えられていく。

空に薄ぼんやりとした宵闇が広がる頃には、今まで目立たなかった市内電車のパンタグラフの閃光が方々パツパツと煌めき道を行き交う群衆や町並みを一瞬に青白く鮮明に映し出す。そして街は夕暮特有の喧噪の中にあつて、やがて静寂の時を迎える前

た。

そしてその相手は有名な老舗の呉服屋さんの長男で、去年東京の大学を卒業し今は家業を勉強中の人だと話した。

美紗子は突然の話に戸惑ってしまった。

「私、まだ十九よ。これから勉強したいことも沢山あるし、まだ結婚なんて早過ぎるわ」

そう言うのが彼女には精一杯であった。

「でもね、お父さんもお母さんもこの話はとつてもあなたに好い話だと思ふの。だからぜひ考えておくれ」

この日、母は意外な程に強引であった。

「私、結婚なんてまだ早いわ。それに……」

美紗子は話の間中知哉を思い浮かべていた。

そんなことがあつて以来何度も同じ話が繰り返され遂にある夜、改まった両親から、

「お話をくださった方に義理が悪いから、とにかく会うだけは会つてね。お願いよ」

見合いだけは絶対にしなさいと、親として強くはつきりと言われたのである。

見合いだけならと諦めた美紗子であったが縁談があることを知

哉に告げるのが何か悪いような気がして彼には話していかなかった。

しかし見合いをした翌日、思い余つて彼に話した。両親から懇

願され仕方なく見合いの席に出たと独り言のように打ち明けた。

見合いは大きなホテルで行われ当人同士の他は双方の両親だけの気楽な形であった。

「美紗子さんの趣味は何でしょうか」

の一頻り高い騒めきの様相を見せるのである。

そんな夕暮れのひと時には街特有の哀感が漂う。車の音市電の警笛、街頭のスピーカーから流れる音楽、人々の騒めきそして教会の鐘の音、それは渾然として流れ漂う街騒である。二人は何時

もそんな中をただゆつくりと歩くだけであつたが、美紗子も知哉もそれでお互いに十分な愛情を育み合つていたのである。

戦時中に抑圧された少年期を送り戦後の苦しい生活の中で青春を迎えた彼には、静かな歩みを共にしている美紗子が初めて出会った女性であつた。

彼は美紗子を知り得た嬉しさに心が充たされ癒されていた。

彼は美紗子を愛していたし、美紗子もまた知哉を心から愛していたのである。

二人は結婚を意識し始めていた。

三

知哉は卒業すれば彼女の両親に美紗子との結婚の許しを請う積もりでいた。しかし彼が卒業を前にした冬の初め頃、彼女に突如縁談が持ち上がったのである。

二人だけのある日、母が真顔で話掛けた。

「美紗子、突然だけれどね。あなたに好いお話があるのよ」

「え？なんのお話？」

「あなたの縁談よ。とても好いお話なの」

暗黙の内に知哉とのことを理解していてくれるものとばかり思つていた彼女は、驚いて母の顔を見たが、彼女は大真面目であつ

「お話しできるようなものはありませんわ」

「映画などですか」

「……………」

「音楽はどんなものがお好きですか」

「特には……………」

席が終わつて二人だけになつても美紗子は自分の方から話すことはなかった。

しかし一度彼女を見た彼は余程気に入つたのか頻りに美紗子の家を訪れるようになったと彼女は困り果てたように話した。

会うだけでいいと言つていた両親だったが、相手が金沢でも指折りの呉服屋ということで大乗り気になつたと久し振りに逢つた知哉に苦しげに話すのであつた。

このままだといくら抵抗しても美紗子には絶対好いお話だからと押し切られ、結婚させられてしまふような気がするとも言つた。

木の葉の散り敷く夕方の白鳥路を歩きながら二人の話は彼女の縁談のことであつた。

彼は美紗子の意外な話に体中の血が逆流するように感じて苦し

く、彼女の縁談の相手に激しい憎悪を感じつつ聞いていた。

しかし相手が裕福な商店の長男だと言ふことが彼の気持ちを鈍

らせていた。

貧しい家庭に育ち卒業後の就職も決まつていない現在の彼には

どうすることもできない大きく辛い出来事であつた。

愛する美紗子を失いたくない気持ちがいくら強くても、何も出

来ない今の自分の無力さが悔しく情けなかつた。

その年も冬に入り知哉の卒業は来年に迫つていたが、未だに卒

業後のことは何の見通しも立たないままであった。
彼は焦っていた――

「もしもし知哉さん、美紗子です。今すぐにお話ししたいの。電車を降りて寮に向かっています。すぐに逢ってください。私、私ね、もう……どうしていいか、わからないの」

美紗子が泣きそうな声で電話を掛けてきたのは師走も半ば過ぎの夕方、辺りが暗くなってきた頃であった。

「何があったの？とにかく落ち着きなさい。すぐに行くからね。電車を降りたら何時もの道を真直ぐに歩いてくるんだよ、いいね」

「お願いよ、なるべく早く来てね」

縁談の返事をする事になっていた夜、耐えかねて電話を掛けてきた美紗子は、寮から走ってきた知哉と近くの路上で出合った。「知哉さん、呼び出したりして御免なさい。今夜こそ是非お返事が聞きたいって、相手のお家から三人いらっしやるの。私はお断りして父にお願いしたんですけど……」

「君が出席して相手の人のいる席ではつきりお断りした方が良くと思うんだが……」

「私、ずつとお断りしているのよ。でも」

「……………」

若い二人には解決の術も見出せないまま、曇混じりの雨が降っている師走の金沢の街を宛もなくただ歩き続けていた。

「私、どうしてもこのお話はいやなの。でもいくら断っても相手の方は強引にお話を進められるし、両親も相手の家が大きな呉服屋さんだから良いお話だって大賛成だし……」

かり動転してしまった。

嫌がる美紗子を無理に車に乗せようとしている相手が彼女の父親だけに、彼にはどうすることもできない事態であった。

近くでは既に多くの通行人が足を止めてこの出来事を不審の面持ちで眺めて出していた。

知哉は歯を食い縛って懸命に耐えた。

彼女は必死に抵抗していたが、その内遂に後部座席に座らされてしまっていた。

それでも美紗子が施錠されたドアを開けてくれと拳で叩き続き続けているのが見えている。耐え切れなくなった彼が車に駆け寄ろうとした時、父親が足早に知哉に近付いてきた。

彼は黙って頭を下げると車に乗り込んだ。

どうしていいのかわからない知哉は、美紗子がドアを叩き続ける音を刃物で胸を突き刺されるような痛みを覚えながら聞いていた。この悲劇の場面に飛出して美紗子を守ってやる勇気が出ない自分が情けなく、自己嫌悪の思いだけが彼の心の中を駆け巡り口は乾き、心臓は破裂しそうな高鳴りを続けていた。

でも何故か涙は出なかった。

降り続けている曇混じりの雨が俄に烈しさを増し、街頭の灯りを白い線で横切る雲が車のリヤウィンドウを叩き始めた。

彼は居た堪らなくなつて車に走り寄った。ガラス一枚だけを隔てて、すぐ近くで見る美紗子はもう声すら出なくなつて、泣き腫らした目だけが何かを訴えるように必死に彼を見つめている。

「美紗子さん、美紗子さん……」

美紗子が両手を付けているウィンドーに手を当てて彼女を呼び

「そうだ！ いっせ、一緒に僕の郷里へ来ないか。今すぐ、何も持たなくてもいいから！」

彼のこの頃何時も思っている言葉を告げたかったが、今だに就職が決まらず卒業すらしていない自分に美紗子を幸せにする自信はなく、今は言えない言葉だと、苦しい思いで懸命に飲み込んでしまった。今の彼はそんな一時的な言葉を無責任だと思ふのであった。

戦後の復興期最中の社会に果たして文学部出身の自分を必要とする場があるのか、卒業後にはどのような生活が待ち受けているのか、今の彼にはまだ就職の目処すら付いておらず将来の不安で一杯の毎日なのであった。

彼は泣きじゃくりながら追い縋ってくる美紗子の声の震えを聞き、何もしてやれない自分の腑甲斐無さを心で詫びながら何処へともなく遣る瀬ない思いのまま歩き続けた。

しかし二人の別れは思い掛けないほどすぐ目の前に迫っていたのである。

突然道路に急ブレーキの音がして一台の車が急停車し男性が転がるように降りてきた。

彼女の父親が大切な返事の際に家に居ない美紗子を探して、車で市内中を走り回っていたのであった。

「美紗子！ どうしてこんな時に家を出歩いてるんだ。皆さんが待つていらっしやるからすぐに帰りなさい」

二人の方に駆け寄つて来た父親が美紗子の両腕を掴んで車に乗せようとしている。でも彼女はドアに掴まって必死に抵抗している。突然に目の前で起きた思いもよらない事態の展開に彼はすっ

続けた。

車のエンジンの音が大きくなり、美紗子の顔が悲しみにゆがんでいる。

車が動き出したとき、彼はウィンドー越しに美紗子の口の動きをはっきりと見た。

「知哉さん さようなら！ ごめんなさい。許して……」

彼女の口の動きはそう言っている。それは全てを諦めた美紗子の別れの言葉だと彼は咄嗟に感じていた。

体を後向きにして縋るように彼を見つめたまま次第に遠ざかつて行く美紗子の顔、泣き濡れた表情が彼の胸を鋭く打ち続けた。

やがて車のテールランプが車の列に紛れ込んで見えなくなった時、それまで必死に堪えていた彼の涙は一度に溢れ出た。

知哉は遂に堪え切れなくなつて濡れた路面に膝をつき、通行の人々の目も憚らず呻くような声を上げて泣いた。

愛する人を失った悲しみと絶望感に地面を叩いては泣き、呻いては叩き続けた。

主を失った美紗子と彼の傘が、開いたまま揺れ動いていた――

彼はその夜から自分の無力さと意気地の無さを呪い、恋人を奪われた悲しさ辛さから逃れようと毎晩のように屋台に駆け飲みもしない酒を飲んであの夜の道を歩き回った。

そして卒業式の数日前、美紗子の結婚が決まったことを友人から聞いた彼は夢遊病者のように東尋坊に向かっていた。

そこは以前二人で訪れたことがある思い出の地であった。

早春のあの日、断崖に立って余りの急峻に少女のように声を上げた美紗子。近くの雄島の橋の上で青く透明な水に感動した美紗子。そして渡った島で彼女が作った弁当を食べた砂浜。美紗子との軌跡の数々を辿ると大切な愛する人を失った心の痛みと自分の無力さを思い知らされた。

知哉は恋人の日の美紗子を心に刻み込みようとして彼女の姿を思い浮かべ描き続けていた。

その日の東尋坊の海は荒れていた。

断崖を打つ巨大な波浪は、凄まじい飛沫を上げて砕け散り、その飛沫は吹き付ける強い風に翻弄され崖の中断まで巻き上がっている。彼女のことを思っても名前を呼んでも、胸が締め付けられるように苦しかった。

知哉はしばらくの間、岩盤に座って瞑想に耽り、立ち上がって荒海に向かい美紗子の名を何度も何度も叫ぶように呼び続けた。

しばらくの間、そうしていた彼は、やがて決然と海に向かって立ち、拳で顔を拭いながら荒波に角帽を投げて美紗子に別れを告げた。

強風に舞い波間に落ちた帽子は忽ち激しい怒濤に呑み込まれ姿を消していった。

それはあたかも運命の嵐に呑み込まれ、大切な恋人を奪い去られた自分の姿のようだと彼は口を歪め寂しく自嘲するのであった。

四

永田知哉四十五歳。文学部出身の彼は現在長野市に住む出版社

「街の中には武家屋敷跡があつてね。夜など待に会えそうな所もあるよ」

「まあ素敵、薫子も行つて見たいな……」

話題は主に古い歴史に支えられた金沢の街のこと、北辰寮での寮生活の様子、寮の仲間のこと、そして仲間で作っていた金城会というグループのことであつたが、美紗子という恋人があつたことも話していた。

でも薫子は夫の学生時代の過去も全てを含めて暖かく大きな愛情で包み込み、現在の知哉を愛する素直で聡明な女性であつた。

「君を知る前の学生時代のことなんだ。もう過去のことになつてしまったね。あの人どうしているかなあ。大きな呉服屋さんに嫁いだということだけ……」

「美紗子さんで方でしょう。きっと今はお幸せに過ごしていらつしやるわ。」

だつて貴方が愛していらつしやつた方ですもの。きっと素敵な方だったのでしょね。私何だか、羨ましいわ、ウフフ……」

如何に知合う以前の事とはいえ美紗子という女性を愛していたという事実は、彼女の心に小波を立てない筈がないと思うのであつたが、薫子はそんな様子は見せず折に触れて冗談めかしたことの言える、広く大きな心の持ち主であつた。

薫子の母は彼女が物心も着かない頃複雑な家庭事情があつて生家に戻っていた。父は仕事の関係で一緒に暮らす時間が殆ど無かつたため、祖父母を両親代わりに育つたが生来我慢強く人の痛みの分かる女性に育っていた。娘が生まれて出版社を退職し家庭に入ったが、大学の英文科出身の彼女は英文は勿論和文タイプラ

の編集長であり、二人の少女の父である。

彼は読書の大好きな文学少年の時代を、藤村文学の香りが漂う城址の街小諸で送った。

高校に進んだ彼は初めから文学を志し、藤村を慕い犀星、鏡花、秋声達文豪に憧れて北陸の雄都金沢の大学に進んだのであつた。

大学を卒業し金沢を去って四年、美紗子を失った心の傷も癒えかけた頃、同じ出版社に勤めていた三歳年下の女性薫子と知り合つて結婚した。

彼女は小諸の旧家に生まれ育つた女性である。聡明で愛らしく優しい彼女を知哉は心から愛していた。薫子もまたそんな知哉をこよなく愛しく思っていた。

二人は人が羨む程仲の良い似合いの夫婦であつた。

彼はよく学生時代のことを妻に話した。

「金沢は美しい街だよ。僕は第二の故郷だと思つているんだ。何時か金沢へいこうね」

「行つてみたいわ、貴方の学生時代の街！なんと言つても百万石の城下町ですよのね。方々に歴史の跡が見られるんですよ」

「そうだよ。大学は旧金沢城の城址内にあるんだよ。敵めしい城門がそのまま大学の正門になっていてね。学生達は行き帰りにその門を潜るんだ。勿論僕もね。」

「まあ！なんて素敵」

「城は残っていないけど城壁が残されている所もあるしね。松林に囲まれた本丸跡や、高い城壁を見ていると往時の姿が偲ばれるんだ」

「わあ、行つてみたいな。ぜひ連れてって」

イターにも堪能で、彼の仕事を助けて常に協力的であつた。

夫と二人の娘を愛し、四人で作る家庭をこよなく愛する薫子は幸せであつた。

知哉の故郷小諸は江戸時代牧野氏一万五千石の小さな城下町で、北国街道の宿場町でもあつた。

明治になり島崎藤村が「千曲川旅情の歌」を発表すると小諸城址は一躍全国に知られ、懐古園として浅間山と共に有名になった。

彼が卒業した当時は小諸は勿論、県庁所在地の長野市にしても地方都市に過ぎず、文学を専攻した彼には思うような就職口は容易に見つからなかつた。

縁故者を辿つてようやく長野市の、とある出版社に就職することが出来た。

出版社といつても社員は十数名の小さな会社であつたが、彼は出版社なら自分の専門が少しは生かせるだろうと期待して入社した。

彼は落ち着いて少し経つた頃、金沢の企業に就職した金城会の下野が久し振りに勤め先に電話を掛けてきた。

「おい永田、どうや。落ち着いたか。」

彼は相変わらずの関西弁のままであつた。

「うん、どうやらな。今、長野市の小さな出版社の編集部に就職できたところだ。君には、在学中随分いろいろ心配掛けたな。本当に済まんと思つているんだ。」

「何言つとるか、友達だろう。ところでな、おい、美紗ちゃんのことだけ……結婚式の少し前に彼女が家出したつて話、お前知つとるんか？」

「えつ、何！家出？美紗子さんが？本当か」

知哉は思わず絶句した。

「うん、本当や、彼女中々やるな。永田、お前な、そんなにまで美紗ちゃんに思われていたんやな。この野郎、羨ましい奴つちや」

「それで、どんな事だったのか、早く話せ」

彼は同僚を気遣い小声になつて言った。

「おお、話してやる。美紗ちゃんは今、式の四日程前、準備していた身の回りの物を持って北陸線に乗つたらしいぞ、そして何と青森まで行つたという話や。世間知らずのお嬢さんの彼女がやぞお前もつとしっかりしろ。何で彼女を強引に連れて行かなかつたんや」

「……それで美紗子さん、どうした」

「どうもな、話によると彼女も当てもなく列車に乗っているうちに次第に心細くなつてきたらしい。それで降りたところが青森やつたというこのようじゃ。そんな彼女の挙動を不審に思つた駅員が警察に通報して保護され、家に連れ戻されたということや……」

でもわしは残念でならん。今だから言うがわしも彼女が好きやつたんじやからな。

永田、よう覚えとけよ。彼女はな、お前のために家出までして結婚に抵抗したんやぞ。いいか。これを分かつてやらんかつたら美紗ちゃんが余りにも可哀相やからな。おい！分かつとるんやろな」

「そうか無事だったか。よかつた！それにしてもあの人が家出とはな……」

彼女はやはり金沢でも指折りの大きな呉服店に嫁ぎ、今では二児の母となつて幸せに暮らしているということであつた。そして店にも出て主人を助ける姿を見ることがあると聞かされていた。精一杯の抵抗をした美紗子が両親の勧めた最初の縁談の相手とどんな思いで結婚したのであるかと、知哉は時々彼女の心情を切なく思いやることがあつた。

五

今、駅で、彼の目の前にいる美紗子からはさすがに二十年もの歳月を感じ取られたが、知哉の目は彼女のそこかしこに恋人であつた頃の懐かしさも残っているのを見ていた。

恋人であつた頃、彼は美紗子を鈴蘭のような人だと思つていた。傍にいと彼女から鈴蘭の花のような匂いがするのであつた。

高校を卒業したばかりの彼女は化粧などは殆どしていないうであつたが、若さと愛らしさは装う美しさの何物にも勝つていた。美紗子は可憐で清楚であつた。

彼女は洋服を着ていても和服を着ても立ち姿が美しい人であつた。日本舞踊を習っているという彼女は歩き方が綺麗だったし、挨拶をする時も座る時も立ち居振る舞いが美しかった。

それに彼と話をしている、分らないことを聞き返す時の「え？」と言うような小首を傾げる仕種の稚さが殊に愛らしかつた。彼は目の前の美紗子からそんな記憶の幾つかを見せられ当時の思い出に浸つていた。

「良かったわ知哉さんにお会いできて！私、どうしようかと思つ

知哉は、断り続けてきた結婚に家出までして最後の抵抗をした美紗子の気持ちに何も応えてやれず、おめおめと金沢を去つた自分が如何に情けない無力な男であつたかを、改めて思い知らされた思いであつた。

下野との電話はそんな話で終わったが彼には美紗子の家出の決断がショックであつた。それにしても今に至るも謝ることさえしない自分の情けなさを改めて思つた。

癒えかけたと思つた古傷の傷口が裂け、再びずきずきと痛み出したのを感じていた。

美紗子に今すぐにも電話をして謝りたかつたがそんなことが出来るはずも無かつた。

「そうか。今の美紗子さんはもう結婚してしまつたのだ。全てのことは終わってしまったのだ、僕の手の届かない人になつたんだな。あの人は……」

電話の後、知哉は自分に対してそんな言い訳めいたことを頻りに語り続けていた。

でも次第にそんなことを思う自分が卑怯な奴だ臆病な奴だと思われ、家出までして抵抗した美紗子の愛情の強さを思いやつては自己嫌悪に自分を責め苛んだ。

それからの知哉には再び苦しみの日々がしばらく続いたのであつた。そしてこの話だけは薫子には一生黙つていようと心に決めたのである。

以来二十年の月日が流れ、お互いに父となり母となつて音信は一切無いままであつた。しかしその後の美紗子の消息は、折に触れて金城会の友人や下野から聞かされていた。

ていたところだったの」

「久しぶりだね、美紗子さん。でもどうして貴方がここに？

……」

彼には今日の出会いが不思議であつた。

「知哉さん、お元気そうね。昔と変わつていらつしやらないみたい。でもほんとに久しぶりね、二十年になるかしら……」

「よく僕が分かつたね！」

「忘れるものですか。私一目で分かつたわ。湯沢の会にいらつしやるのでしょ！私、午前中からずっと待合室であなを待つていたの。でも本当はね、下野さんからあなたが金沢にいらつしやつてから金城会に出席されることお聞きしていたの……」

当時彼に話す時の美紗子の癖だった小首を少し傾げるような仕種で口早に言った。

「そうだったのか、下野の奴め！」

突然の出会いにちぐはぐだった二人の会話はようやく噛み合うようになつていた。

それにしても今日の美紗子との出会いは全く予想もしていなかつたことであつた。あんな別れ方をした美紗子である。湯沢の会に出席すれば知哉と一緒にいるから彼女が出席することはよもやあるまいと思つていた。

知哉は二十年ぶりに会つた彼女を見つめながら、美紗子の声がかつたより少し低くなつたのを感じていた。

髪型や装いは老舗の呉服屋の奥様らしく、ハンドバッグや指輪なども高級な感じの物であつた。

しかし彼女から漂ってくる香りは、知哉の恋人であつたあの頃

の鈴蘭とは全く違うのを感じ取っていた。

六

美紗子と出会うことになった『金城会』というグループは途中から友人の下野に無理遣り引つ張り込まれた会である。ただ集まって話だけのいい加減な会だと思っていたが、何の束縛も決りのない自由でおおらかな雰囲気の魅力があった。知哉が金沢に立ち寄ってから湯沢に行くことを美紗子に教えた下野は、その会の発起人兼リーダーである。

知哉は下野が以前から彼女に好意を寄せていることを気付いていたが何も知らない振りを通していた。

「あの頃の女性の皆さんはお元氣？」

「ええ！今日はね、四人も出席するのよ」

「え！四人もね。そりゃ賑やかだろうね」

彼は時計を見て時間を確かめると、彼女を待合室に誘った。

発車までにはまだ時間があった。

待合室のざわめきの中で二人の声はお互いに聞き取れるが、他人にまで聞かれる心配は無さそうであった。

「美紗子さん、あなたは今、お幸せですか」

彼は二十年もの間ずっと心の中に引つ掛かり続けていた言葉を口にしながら、謝りの言葉は中々口に出せなかった。

曾て、何も出来なかった悔しさと美紗子の愛と信頼に応えられなかった悔恨は、二十年を経た今も彼の心に確かな凝りとなって秘められていた。

に急激に現代化する戦後の生活様式の中で和服関係業の迎らねばならない運命だったのかもしれないと彼は思った。

知哉は初めて聞く美紗子の苛酷な運命に慰めの言葉も出ない思いであった。

しかし彼女が何度となく口にする主人という言葉は、彼にはほろ苦い感情を味わせていたのである。

彼女が無意識の内に口にするその言葉を聞く度、家庭の危機を語る話であっても知哉には耳を塞ぎたいような思いがあった。

愛し合っていた頃の繊細で思慮深かった美紗子とは思えない心遣いのない無神経な言葉に、年月や環境による彼女の変容を見た思いであった。彼には美紗子のそんな変わり様が同じ人と思えないほどに意外であった。

それに美紗子を頼り切っているという彼女の夫には一瞬激しい憎悪すら覚えていた。

あの縁談さえなかったら多少の紆余曲折はあっても二人は結婚していた筈であり、彼女の口から出る『主人』という言葉は、取りも直さず彼を指すことばの筈であった。

知哉は、主人という言葉を経ての恋人の前で何度も口にする彼女と、かなりの年月を共に過ごしている男性に嫉妬めいた激怒にも近い複雑な感情を覚えたのである。

彼女が直面したという苛酷な運命に同情しつつも、そのことによつて二人の絆がより一層強くなっていると感じたからでもある。

しかし同時に彼女の店を襲った不運に同情し慰めなければならぬ強い自己嫌悪を覚えていた。

しかしあの別れの日、訴えるように必死で彼を見つめ、涙を流しながら去って行ったあの目は四十歳の人妻の目が変わっていた。

「……本当はね、主人のお店倒産したの。今年の春頃だったわ。何もかもみんな失ってしまったの。それ以来主人は気が抜けたようになつて本当に可哀相なの」

「……知らなかったな。そんな大変なことになつていたんだね。気の毒だったな。」

知哉は慰める言葉が見当たらず、ただ黙って待合室の外の人の流れを見つめていた。

倒産という重大な人生の危機に直面して、今まで築き上げてきた多くのものを失ってしまったであろう彼女の苦悩を思う時、二十年もの歳月の空白を隔てた今の彼には、慰めの言葉は直ぐには出てこなかった。そして今、浮かんでいる僅かな言葉は月並みの虚しいものでしかなかった。

しばらくの間押し黙つたまま待合室の騒めきの中で時間だけが過ぎていった。

「あの倒産以来、主人は私を頼つてしまつて少しの間でも私がいないと大変なの」

金沢でも老舗の呉服屋の若旦那として苦労知らずで育つた筈の彼が、倒産という人生の危機に直面し為す術もなく傷心し、苛立ち苦悩する姿にただおろするばかりの美紗子の姿がまざまざと浮かんでいた。

裕福な家庭のお嬢様だった彼女が重大な家業の経営危機に直面した時、どのように立ち向かったのだろうか。パブル経済の崩壊という時代の波をまともに受けた老舗商店の末路であり、同時

今更昔の恋人にこんな感情を抱くなんて自分ながら余りにも未練がましいと、彼は密かに自嘲した。

でも目の前の美紗子はそんな彼の思いに気付く様子などなく、倒産のことや夫のことをあれこれとこと細かに話し続けている。彼の神経は耐え切れず苛立ち、耳を塞ぎたい衝動に駆られ続け苛立つ感情を懸命に抑えていた。

知哉はそんな彼女の横顔を見つめながら聴力を失つた人のように、話を聞く振りをして呆然と全く別のことを考えていたのである。髪型も服装も変わり、恋人の頃控えめだった化粧も彼女が四十歳近い人の妻であることを如実に物語っていた。

話は依然として続いてしたが、彼の耳には文脈としては入っていないかった。気がつくとも列車の発車時刻が迫っていた。

「美紗子さん、切符は取つてあるの？あともう少しで発車するよ」

彼は話を遮るように声を掛けた。

「私？まだ切符は取つていないの。だって、あなたがどの列車になさるか分からなかったからよ」

「そうだったの。それじゃ私と同じ列車にしたらどう？すぐ買つておいで。《かがやき7号》だよ」

「知哉さんがご迷惑でなかったらそうしようかしら。少し待っていてくださる？」

「間違えないでね！かがやき7号で長岡経由、越後湯沢までだよ。分かってますね」

「はい」

美紗子は小走りに切符売場に向かった。その日彼が予約したのがこの列車だった。北陸線のこの列車は

長岡で上越新幹線に接続するため最近出来た全席指定の特急であ

る。やはり発車直前の座席指定券は売り切れで取れなかったらし

く、がっかりした顔で乗車券と特急券だけを求めて戻ってきた。

「指定席はもう一杯ですって……」

しかし彼は半分泣きペソをかいている顔に漸く二十年前の恋人

を見た思いがあった。

それは恋人同士の頃ほんの細やかな口争いの終りに彼女がよく

見せた少し泣き顔の懐かしい表情であった。

「美紗子さん大丈夫だよ。さあ、列車に乗りましょう」

突然何かほっとした思いに変わった知哉は美紗子を促して立ち

上がったが、ここは金沢である。どこで誰が見ているかわからな

い。殊に呉服店の奥様としてそれまで多くの人と接してきた彼女

には、この街での顔見知りが多い筈である。

彼は辺りに細かく気を使いながら彼女の少し前を素知らぬ振り

をしながら歩いた。北陸には珍しい梅雨半ばの晴天に七月初めの

金沢は青空の下、通路を吹く風が爽やかだった。乗り場に向かう

通路には笹竹と風鈴が吊され涼しげな音を響かせている。

「あら風鈴！何時か風鈴市に行きましたね。」

彼のすぐ後を歩く美紗子も風鈴に気付いたらしく少し燥いだ声

で話し掛けてきた。

知哉は忘れていた金沢の七夕を思い出していた——

七

かがやき7号の車内は彼の予約席のすぐ横に一つの空席を残し

ているのみで立っている人も可成りいた。

彼は取り敢えず自分の席に美紗子を座らせるとひと先ず空いて

いる横の席に座った。

「座れて良かったわね。長岡まで大分掛かるんでしょう。座れな

かったどうしようかと心配だったの」

「信越本線経由で約三時間位かな。立っていたらとても大変だよ」

「そんなに掛かるの。良かったわ。知哉さんにはあの頃から守っ

て頂くばかりみたい」

「そうだったかな？でも僕は頼りがいのない情けないナイトだっ

たんじゃないかな」

知哉は意に添わない結婚話に嘆き悲しむ美紗子を守りきれな

かった悔しさを自嘲を込めて言ったが、彼女には通じなかつたら

しく例の小首を傾げる仕種だけが返ってきた。

「この列車、このまま止まらないですーつと走り続けてくれない

かしら……」

「え？……」

「だって、この列車の中には知っている人は誰もいないし全く別

の世界ですもの。貴方と二人でどこか遠くへ行けたら好いなって

思っただの……」

知哉は大胆なことを言う美紗子をすっかり変わったんだと思

いつつ眺めた。

「湯沢って私初めてなの。知哉さんは？」

「僕も初めただよ」

「どんなところかしらね。温泉町なんですよ。あの雪国って小説で

有名な……」

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であったという冒頭の一文

は人を魅了するね。小説の中には島村が出会う駒子と葉子という

二人の女性の張り詰めた真剣な生き方が描かれているんだね。駒

子は湯沢の町の芸者さんなんだね」

「芸者さんってどんな生活をしているのかな」

すっかり安心したのか昔の恋人はすぐ横で屈託のないことを話

している。これでさっきの逃避行の話は思い付きだったのかと知

哉は可笑しくて心の中で一人笑いをしていた。

「お客さんの乗り降りが少ないのね」

「これは上越新幹線に接続するための列車だからね。降りる客は

少ないと思うよ」

「ずっと座れるといいわね」

「いつまで座ってられる分らないよ。でもまあ取り敢えず座っ

てるでしょうか」

「私ね、この席の人、きつとキャンセルしたんだと思うわ」

「そんな都合の良い話になるかなあ……」

「ほんとね、ウフフフ……」

彼は周囲の人を気にしながら小声で差し障りのない話題に終始

した。しかし周囲の乗客達は二人を注目する様子もなくそれぞれ

に談笑している。知哉は発車後しばらくしてようやく警戒を解き、

美紗子との話の中に入ってしまった。

こんな偶然は今現在の二人には考えられないことであった。仏の

憐れみか神の悪戯かは分らないが、今のこの現実正に運命が

授けてくれたまたとない機会であった。それにしても何時、どん

な風に謝るべきか彼は密かに悩み続けていた。

時刻はすでに午後二時を過ぎていた。

「美紗子さんお腹空いたでしょう。食堂車は付いてないかなあ

……」

「私、急いでいたから何にもお弁当買ってこなかったの。困ったわ、

お腹空いたし……」

彼女はすでに昔の恋人に戻っていた。

「それじゃ、僕のを一緒に食べようか」

彼は金沢駅で求めてきた《鱈寿司弁当》をバッグから取り出し

て彼女に渡した。

「あら、富山でしょう。私、大好き！」

美紗子は主婦の手つきになって、蓋の上の笹の葉に包まれた寿

司弁当を上手に二人分に切り分けた。

「美味しいわ。二人でお弁当が食べられるなんて夢にもおもわな

かったわ。こうしていると何だか私達夫婦に見えないからしら？

よくハイキングに行ってお弁当食べたわね。楽しかったわね。い

つも思い出すのよ」

嘗ての恋人は昔に返って無邪気であった。

ついさつき家が倒産した話をしていた昔の恋人は弁当を前に明

るさを取り戻していた。やはり他人には夫婦に見えるかもしれな

いと彼は思った。

しかし人目にはどのように見えようと、二人には二十年という

歲月の隔たりがあった。

彼女には夫や子供があり彼にもまた妻子がある現実、ふと我に帰る度に「薫子、済まない」という疼きとなって胸の奥に痛みを感じさせていた。

彼が座っている席はキャンセルされたのか終点までずっと空席のままであった。

思いがけない二人だけの旅は三時間余りで終わりを告げようとしていた。

長岡で上越新幹線に乗り換えると越後湯沢まであつという間であつた。

「上越新幹線乗り換え！この列車は間もなく越後湯沢に到着します。お忘れ物の……」

やがて列車は湯沢の駅に到着した。

二人が降り立った駅頭にはあの『雪国』の『駒子や島村』を彷彿とさせるような温泉街の情景は全くなかつた。初めて目にする湯沢は山に囲まれた静かな温泉町であつた。

その日、越後湯沢も七夕であつた。

「さあ美紗子さん、行こうか」

二人は竹飾りがサヤサヤと葉擦れを聞かせている午後の湯沢の町へ歩き始めた。

八

二人が会場のホテルに着くと既に大部分の者は到着して、一室に集まって賑やかに談笑していた。自協会長の下野が目敏く見付けて声を掛けてきた。

金城会は卒業後もなおずっと続いていて、場所を変えては数年毎に開かれている。さすがに十年以上も経つとそろそろ青春が恋しくなるらしく、自称幹事長の下野の呼び掛けで二、三年毎に行こなわれるようになった。

ただ集まって飲み、語り、寝て帰るだけの会であつたがなぜか殆どの者が出席するのである。やはり青春を過ごした金沢の街と友人は年を重ねるに従つて懐かしいものにも変わるであろうし、北辰寮の生活もまた然りなのであろう。

金城会は寮生が中心で医学薬学、工学、経済、法、文、理学、教育等など総勢二十数人の大学生に七、八人の女子高生が加わつた三十人ほどのグループである。

戦後間もない頃の貧しい学生生活であつても、青春の輝きは燦として常に彼等の頭上であり、その貧しさが故に一層仲間が肩を寄せ合つた青春の集いであつた。

彼はこの会を『青い山脈金沢版』だと思つていたが正にそんな雰囲気溢れていた。

学業もさることながら学生寮という自治の園にあつて、社会的に認められたモトリアムの四年間は素晴らしい価値を持った人間形成の場であり、人生における珠玉とも言える年月であつた。若き学徒の群れはそんな中で学び語り世の様を嘆き人を愛し、切磋琢磨しつつ人間性をも身に付けていったのである。

金沢の旧制四高の伝統を受け継ぐ寮生活や金城会というさしたる目的こそないものの何の束縛もなくただ皆で集まつての駄弁り会は、思想や政治を人生をそして文学映画、音楽、更には美術、恋愛、女性観を議論し昂じれば激論となることしばしばの集いで

「よう来たか。遅いぞお前等。なんじゃ二人で来たんか。しまった！俺が彼女をエスコートして来るんじゃない」

彼の言葉には本音も交じっているのを知哉は相変わらずだなど感じながらメンパー達と目で挨拶を交わしていた。中塚や水戸、そして泉野、岩崎、本村、谷川、田島達夫婦も一様に年相応の雰囲気を見せていたが、声はそれぞれ若々しく張りがあつた。

「よう、元氣か」

「久しぶりだな永田。お前、変わらないな」

「おお、会いたかつたぞ、よく来たな」

何時もながら男達の挨拶は至つた不粹で短い。

彼等とそんな挨拶をしながら女性達を見ると、久しぶりに会う彼女達には男性達と比べより年齢を感じさせるものがあり声のトーンも随分下がっているようであつた。

知哉は美紗子と二人で来たことを全員の面前に曝した恥ずかさでしばらくは無言のままだった。

でも美紗子は平然と女同士で喋っている。

「私、金沢から永田さんと一緒に来たのよ」

平然どころか誇示している話し方である。

「まあ、美紗子！あんたも中々やるわね」

「軍中でお弁当も一緒に食べたのよ。美味しかったわ。富山の鱒寿司よ！」

「うわ！よくもまあぬけぬけと！馳走様」

「オホホ……」

久しぶりの会に四人の女性達は相変わらず賑やかで一段と姦しかった。

あつた。

そんな時貧しい青春に飲む物は水以外無く、摘む物もパンの耳だけであつたが、不平不満はなく疲れ果てると自然解散となつた。卒業してからも金城会が何回も続くのを七不思議だなどと言いつながら何時も大半の連中が集まつていた。

金城会という会の名称は女性達の出身校である成城高校と、金沢大学をもじつた命名だと彼は思つていたが事実そうだったようだ。

当時大学は金沢城址にあり石川門と呼ばれる厳めしい城門は大学の正門になつてた。

学生は皆、数百年を経た今にして尚、威容を見せる正門を誇りに思つていたのである。

そんな往時の紅顔の青年達はそれぞれに中年となり、愛らしかった女学生達も主婦の顔になつていたが、その会の日だけは不思議なことに往時の青春の顔に戻るのである。

そして久しぶりに会えば何のわだかまりもなく即座に前回の論争の続きが再燃し、心が通じ合うのである。

「諸君、久しぶりの会じゃが大勢集まつてくれて我輩は感謝に堪えん。今回女性達も四人出席してくれた。これから始めるが例によつて大いに飲み、笑い、語ろうではないか」

下野のお定まりの演説調の挨拶、近況報告、乾杯と続き、そして賑やかな宴会へと移つていった。

下野の心遣いで彼と美紗子の席は隣同士になつていたが、二人とも隣や近くの友人との再会の喜びや昔話に興じていて、二人だけの会話は意識して避けていた。

男達は三年振りの会にすっかり酔い痴れ、互いに何だか訳の分からぬことを喚きながら猶も杯の応酬を続けている。

やがて可成りの時間が過ぎた頃、

「諸君、酒も料理も無くなつてしまつたな。相変わらずよく食い、よく飲んだ。この辺で河岸を変えたいと思うが如何であるか」

下野が立ち上がり例の学生調でクラブへ移動し二次会を行うと宣言した。

九時近いクラブは混んでいて薄暗い照明の下で客達がカラオケや話に興じていた。

やがて金城会も得意のレパトリーを披露し始めた。もうもうと立ち上る煙草の煙とカラオケの騒音の中、大声と煙が知哉には耐え難かつたが諦めてコーヒを啜っていた。

その内に美紗子の友人の一人がそつと近付いてきて小声で耳打ちした。彼女は美紗子の親友で彼女のことはよく理解していた。

「永田さん、美紗子とは久しぶりでしょう。二人で散歩でもしてきたら！後のことは私に任せて！何も心配しないでいいから、いい？」

「えっ、でも……いいのかな？」

「いいから、早く行きなさいよ」

そつと抜け出して少しの間二人だけの時間を過ごしたらと言うのである。知哉は目で彼女に感謝の挨拶をし素知らぬ顔でクラブを抜け出した。

九

酒を嗜まない彼であったが、久しぶりの友人との会に少し口にしたビールが何時もの自分を変えたように感じていた

美紗子は少し前に彼女に言われて外へ出たらしく既にクラブ内には見当たらなかった。外はすっかり夜の帳に包まれて嘘のような静寂があり、空気も冷たくて新鮮に感じられた。ホテルの入口を出ると先に出ていた美紗子が物陰から小走りに駆け寄ってきた。

「何だか私、恥ずかしくて……」

彼女は知哉の近くに立つと、背中を見せて浴衣の袂で顔を覆い小さな声で言った。それは恋人であった頃、待ち合わせの時に彼女がよく見せていた仕種であった。

彼はそんな彼女を見ながら二十年の歳月が一挙に目の前に戻って来ているように感じていた。

七月七日、七夕の夜九時過ぎの越後湯沢の温泉街は近くの街灯の明かりの中に薄着い姿を見せ、昼間の暑さの名残りを微かに留めながら夜の涼気の訪れを感じさせ始めていた。

山際にあるこのホテル周辺は人家は少ないが少し離れた所には町明かりが見えていて、温泉街の賑わいを感じさせている。

そしてこのホテル周辺の遠く近くには彼等と同じように散歩しているらしい二人連れの影の幾つかがあった。

やがて二人はホテルの前の細い道を寄り添いながら人影の無い方へ歩き始めた。

彼はホテルの下駄の音が辺りに響くのが気恥ずかしく足音を殺すように静かに歩いた。恋人であった頃のように二人は黙つたま

まで静かにゆつくりと歩いた。その内に美紗子の肩が彼の左腕に触れたままで離れようとはしなくなっていた。

二人の上を通り過ぎた歳月は互いを変えてしまった苦なのに、彼の胸のどこかで微かに息づいていたものが急激に音を立てて起き上がり始めていた。

美紗子の歩みは彼の左肩の辺りに頭を付ける姿勢に変わっている。恋人時代には全く無かつたことである。

美紗子の手が知哉の手に触れてきた。湿り気を帯びたその手は、以前の美紗子とは違って彼の手を強く握り締めていた。知哉の左肩にもたれかかっている彼女の髪や体からは彼の記憶にはない芳しい香りがしている。

今、左半身で受けている美紗子の体は意外なほどに重く熱かつた。以前の二人にはこんな形での散歩はなかつた。彼は運命と歳月が隔ててしまった二人の距離の深さを思った。

青春の頃の恋人達は懐み深かつた。

当時公園などのベンチに語らう恋人達は、互いに少しの間隔を置いて座っていた。昭和二十年代も終わり頃のことである。しかし今ホテルの周辺を歩いている数組はどれも纏れ合うようにして歩いている。

知哉の中に薫子の小さな白い顔が浮かび、その微笑みに心は痛みを覚えかけていた。

彼は混乱してくる頭で、

「夢の中にいるんだ。現実じゃないんだ」

そんな言い訳めいたことを思い続けた。

そしておぼおぼと美紗子の手を取り彼女を左半身で受け止めな

がら歩いた。

「今日、君が出席するとは思わなかつたな」

「私、主人のことがあるから随分迷つたの」

倒産して以来夫は彼女が外出するのを極端に嫌うようになったと彼女は言った。

今日ここに来るのも友達に助けてもらつてようやく出て来られたのだと話した。

彼は事業に失敗した彼女の夫のそんな傷心ぶりを憐れみ、もう少し男らしくなれないものかと思ひ、自分と彼の立場の逆転に密かな優越感を感じていた。

しかしその思いが蔑みと報復に似た感情に変わろうとするのを耐えた。そんな自分が下劣に思えた堪らなく厭であった。

彼は美紗子がある自分が下劣に思っているのか聞いてみた。口に出せないまま複雑な気持ちを抱きながら歩いた。

「二十年ぶりだね。こんな機会を持たせてくれた君の友達や下野に感謝しなくてはな」

「あの人がね。折角だから二人で散歩して来たらって勧めてくれたの。少し恥ずかしかつたけど、私思ひ切つて出てきたの」

彼女は両親の目を盗んで恋人に会いに来た少女のように息を弾ませながら言った。

知哉はそんな彼女に過ぎ去つた二十年前の幻影を重ね合わせようとしていた。

「折角の貴重な時間だからお互い青春時代に戻つて歩こうか……」

その時またしても薫子の顔が浮かんで来たが彼に既に自分の言

葉に酔い始めていた。

二人のために友人が与えたくれたこの機会は最初の間こそ後ろめたい思いがあったが、言葉を変わすうちに罪の意識は少しずつ薄れて行くようであった。

付き合いで飲んだアルコールのせいもあって彼の理性は少しづつ失われかけていた。

でもそれは知哉が自らを偽ろうと自己催眠にかけた言い訳でもあった。余り酒を好まない彼は多少上気はしていても酔ってなどいなかっただけはつきりとした理性もあった。今自分がどんな状態に置かれているかは明確に意識していた。

しかし今、彼は頭を振り、敢えて金沢の頃の自分に戻ろうとしていた――

「あっ、知哉さん、蛍よ。あそこ、蛍だわ！ほら、たくさん光っているでしょう」

近くに蛍の光を見つけた美紗子が興奮した口調で言っている。歩き始めた頃には見えなかった蛍が可成りの数を見せている。

蛍が群れ飛ぶ時間になったのである。

「ほんと、光ってるね。七夕の夜に蛍が飛ぶなんて何だか幻想的だね」

「こうして歩くの久しぶりね。私、とつても幸せだわ。私ね、本当はあの頃、こうして歩きたかったの。白鳥路の散歩が懐かしいわ。そう言えば今夜は七夕ね。今夜の私達、二十年目によつと逢えた彦星と織姫かしら……私、結婚してもずっとこんなにして知哉さんとお逢いできる日を夢見てきたの」

思いがけなく与えられたこの機会に今までの全てを話し尽くそ

ただらうしね」

「そうね、そうでしょうね！」

「でもね、貧乏サラリーマンの女房じゃ大変だよ。僕の家内なんか口じゃ言わないけど、随分苦労しているんじゃないかな」

「……………」

会話が途絶え近くでは相変わらず蛍の群れが盛んに飛んでいる。「私はね、何時もあの頃のことをよく思い出すの。二人で行った卯辰山のことや東尋坊のことなどをね。私の誕生日のお祝いの会の後であなたを送っていったあの道のこと、そしてお別れした最後の夜のこともよ」

「……ああ！僕もはつきり覚えてるよ。でも美紗子さん！貴方はあれ以来本当に幸せだったの」

それは知哉が長い間思い続けてきた言葉であった。同じことを金沢駅でも聞いたが、あの時の美紗子の素振りに何か引掛かるものを感じていた。二人以外には誰もいない夜の道で知哉は再びその言葉を口に出した。

「私？……私ね……………」

彼女は不意に押し黙ってしまった。

「知哉さん……………」

やがて躊躇うように肩に掛けた彼の左手に美紗子の手がそつと重なってきた。

気がつくとも美紗子の口からは小さな嗚咽が漏れ彼女の肩が震えていた。長い歲月の間の数々の思いを告げるようにしばらくの間肩を震わせ続けていた――

知哉は肩に置いた手に彼女の震えを感じながら、もはや今の二

うとでもするように、彼女は一気に話し続けた。

「最後のあの夜、君は泣きながら来て、泣きながらお父上の車で去って行ったね。あの後僕もあの場所ですつと涙が止まらないままに座り続けていたんだ。雲混じりの雨がずつと降っていたね。あの場所は犀川大橋の近くの道だったな。もう二十年も経ったんだね！あの夜のこと、君は覚えてますか」

「ええ、はつきり覚えているわ。嫁いでもからも忘れなかったわ。悲しかったの。実はあの方のお父様が父の会社の大株主という事情があつてどうすることもできなかったの。私最後まで抵抗したけど御免なさい。あなたに黙って……結婚してしまつたの。私、出来るだけは頑張つてみたんですけど。なんてお詫びしたら……私が悪かつたの。知哉さん許して！ごめんなさい！」

「僕だつてあなたをどうしてやることもできなかった意気地のない男だよ。僕は何もしてやれないのに君は家出までしてくれただつてね。美紗子さんご免なさい。こんな情けない僕を許してくれますか……………」

知哉は漸く謝りの言葉を口にして大きく息をついた。

「もういいのよ、私の方が悪かつたのだわ。あの家出、私、どうしてもいやだつたから！もうどうなつてもいいと思つてしたの。ご免なさい……知哉さん、今お幸せ？」

「え？……僕は今娘が二人いるんだ。平凡な家庭だけど。こんなのが幸せなんだろうか」

「何もなかつたら、今の知哉さんのお嬢さん達は、貴方と私の子供だつたのでしょうか」

「うん……………」それより、田島達みたいに僕達も夫婦で出席でき

人には戻ることのない青春の日々と可憐で清純だつた美紗子と過ぎたあの頃を思った。そして彼女の親の手で引き離されるようにして別れた夜の夜のことを思っていた。

あの夜も美紗子は自分の運命を嘆き肩を震わせて泣きながら歩いてきた。若い二人にはどうすることもできないまま、彼女の父の車に乗せられて去っていく美紗子の涙に濡れた顔が浮かんだ。熱いものが込み上げ薄暗い街灯に照らされている夜の情景がぼんやりと霞んだ。

歩みは止まり道の傍らに立ち止まつたまま二人は向かい合つていた。知哉の心に二人で歩いたあの夜の道と同じ傘の中の美紗子の顔が浮かんだ。

道を照らす街頭の淡い光の輪の中でお互いを確かめ合い見つめ合つた。

「私、年を取つたでしょう」
美紗子が耐えられないように顔を伏せた。

彼が両肩にそつと手を置くと彼女は倒れかかるように彼の胸に寄りかかつてきた。

二人には初めてのことであった。

彼女の重みを感じながら知哉は理性を失うほどの激しい衝動に駆られていた。

今、彼の理性は美紗子が人の妻であり自分も人の夫であるという現実を忘れさせようとしていたし、平静さと判断力までも失わせようとしていた。

青白く光る蛍の灯が彼の何かを揺り起こしたのかも知れな

かった。そして温泉街での七夕の夜という雰囲気と、少しだけ飲んだアルコールが彼の理性の緩むのを助けているのかも知れなかった。

彼女の顔はすぐ近くにあつて淡い灯の下で仄白く浮かび、微かな香りを漂わせている。

でもそれは恋人の頃の香りではないのをまだ残っている記憶の中で感じていた。

美紗子が縋るように彼の胸に右手を置いてきた。二十年前の果たし得なかつた思いが心を烈しく揺さぶり、全てを忘れさせようとしていた。

彼女の肩に手を置いたままでどれほどの時間、別世界をさ迷っていたことであろう。

彼の思考力は薄れていき、最早他のことは考えられなくなつていた。

耐え切れなくなつて美紗子を抱き寄せようとしたその時、彼は擦れたような彼女の声を聞いたのであつた。

そして胸の辺りがすつと軽くなつた――

「知哉さん、まだ蛍が飛んでいるわ。ほら、すぐそこ、あんなに沢山飛んでいる！ さっきの蛍達かしら」

「……………」

少し離れた道端にしゃんがんでいる美紗子の声が別人のように聞こえている。

知哉は思いがけない彼女の動きと声を呆然とした思いと戸惑いの中で聞いていた。

すぐには理解できなかつたが、少し落ち着くと彼女のとつた動

彼は今その現実を確かに見たのである。

彼女の離れた胸は虚しく軽かつた。

知哉はなおも呆然と彼女を見つめながら、次第に覚えていく感情の中でつい今し方の美紗子の豹変を思い浮かべていた。

やがて蛍の群れは方々に別れたりあるものは草の上に灯を移していて、その数は次第に少なくなつていった。そして光の強さも幾分か弱まつたようであつた。

知哉は一瞬故郷の小諸の家に近い、蛍が群れる千曲川の清流を思い出した。

子供がいなかつた頃薫子と見た蛍はもつと沢山いて、二人が帰る頃にも盛んに光つていた様子が鮮やかに脳裏に浮かんだ。

「知哉さん、ほら、全部草に止まつたわ」

美紗子の明るさを装つた声が聞こえた。

すぐ目の前の薄明かりに他人の妻となつてしまつた一人の女性があつた。

「蛍達もどうやら落ち着いたみたいだね」

彼はしゃがんで蛍と戯れている美紗子に近寄り、青白く光っている草の上の蛍を肩越しに覗き込んだ。

十

その夜は知哉に寝苦しくて反転が続く一夜となつた。途切れる眠りの中で、何度も蛍を追い掛けている夢を見た。蛍は捕まえようとしても手を擦り抜けてしまうのである。

彼の傍にいた女性は美紗子のもようでもあり、薫子のもようでもあ

きの意味が推測できるようになつてきた。

確かに彼女は彼の次の行動を避けたのだ。

ついさっきまでの知哉にはまだ見ぬ世界を覗こうとする夢があつたが、美紗子はその夢の手前で彼よりも先に目覚め、現実に戻つていたのである。そこには二十年もの歳月を別々の世界で生きてきた女性がいた。

「あら、ここにもこんなに沢山！」

すつかり夢の世界から戻つたその人の声ははっきりと聞こえている。

まだ夢から覚め切っていない知哉がぼんやりしたまま彼女を見ると、道の傍にはまだ蛍が飛び交っている。

しかし流石に九時半を過ぎた時刻の蛍は空中に止まるものは減つて、殆どの点滅する光は草叢の上に移っている。

知哉から離れた彼女は蛍の群れに近寄り、手を延ばしながら何事もなかつたように蛍と戯れている。その仕種には恋人であつた頃の面影を残しながらも、同時に長い年月を他姓となつて過ごして来た一人の女性の真の姿があるのをはつきりと見た思ひであつた。

その人はたつた今まで彼の胸で泣き崩れ、二十年経つての初めての抱擁にすべてを忘れていたのではなかつたかと、彼は複雑な思いを味わわされていた。

長い歳月と結婚という現実、知哉が愛した一人の女性を大きく変えてしまつていた。

あの別れまでは確かに二人の心にお互いが存在していた筈であつた。しかし運命と歳月の流れは美紗子を大きく変えていた。

つて何とも臆気で中途半端な夢であつた。

物音で目を覚ますと、昨夜遅くなつてから降つたらしい夕立のせいで湯沢は朝から爽やかに晴れているらしく、窓から入る風が涼しかった。

「おーい、女性軍がお帰りだぞー。男性達は浴衣のままでもいいから駅まで送るべし」

下野の大声が聞こえている。

どうやら女性達は早い列車で帰るらしい。

彼は手早く洗面を済ませてロビーへ行つた。昨日は女学生に戻つていた彼女達は一夜が明けると二十年の歳月を経た主婦の顔になつていた。様に帰りの服装に着替えた四人の両手の荷物家族への土産が詰まっているのか大きく膨れ上がっている。

青春の日に立ち戻つた一夜が済むと早速に家庭を思い、帰巢本能に急かされているのが如何にも女性らしいと思つたのであつた。

「ほんとに楽しかつたわ。私、久し振りだつたから。下野さんありがとう。お世話になりました。皆さんお体を大切になさつてね」

美紗子が改まつた口調で挨拶している

「楽しい会だつたわ。次回も是非お会いしたいわ」

女性達が口々に別れの挨拶をしているが、美紗子の挨拶には「ぜひこの次も会いたい」という言葉は聞かれなかつた。

知哉は彼女からの無言のメッセージを受け取つた思ひであつた。列車の窓際に座つた美紗子は何事もなかつたように、見送りの男性達に手を振りながらにこやかな笑顔をみせている。

しかし発車を報せる合図が流れ始めると、知哉と視線を合わせた美紗子の顔に彼にしか分からない微妙な表情が浮かんだ。彼女

が万感の思いを込めた目で彼に別れを告げたのである。その目は二十年前に車のリヤウィンドーを通して見たあの時の必死に縋るような目とは違っていた。しかし美紗子の躊躇いがちに振られている右手の微かな揺れは、紛れもなく彼だけに向けられたものであった。

「知哉さん、お会いできて嬉しかったわ。どうかお幸せにね。私も頑張ってみることにします。ありがとうございます。知哉さん、これでさようならにしましょうね」

美紗子の目がそう言っているように感じた。

しかし列車が動き出した瞬間知哉を見つめるその目に溢れ出ている大粒の涙を見た。

美紗子の顔はすぐに見えなくなって速度を増した列車は次第に小さくなり遂には視界から消え去っていった。

「美紗子さん、元気でな。お互いこれからもしっかりと生きていこうね。さようなら！」

無言で見送っていた知哉の心の奥には何故か安堵にも似た感情が湧き上がっていた。

「それにしても彼女等、すっかり変わってしまったな。立派なおハンじゃ」

「でも美紗子、奥様らしく綺麗だったな」

何も知らない下野達の話聞き流しながら、知哉はほっとする思いと同時に何かしら仄々とした暖かい新たなものを感じていた。そして待っている妻と二人の娘に何か土産を買わなければと思った。

終

社高山市文化協会長賞 小説

分水嶺

「これは、これは、お久しぶりでございます。ご家老様」
「正歳。もう御家老なんて言うな。徳川様の世も終わり、今や維新で薩長の時代じゃ。大きい声では言えんがの」
「はい、左様でございます。私も、今では新政府の役人でございます」

「そうじゃったのう。今、お前は工部省のお役人だ。しかし、お前も苦労したのう。薩長の人間でもないのによく政府のお役人になれたものじゃ」

「ははっ、これはご家老さまやお殿様のお陰と感謝しております」

「なあに、私なんぞはお前に何もしてやっつてはおらんぞ。しかし、お殿様はお前を大変気にかけてはいたがのう」

「はい、ありがたいでございます」

正歳はそう言いながら深々と頭を下げた。正歳は維新前に譜代大名である東野藩御普請組頭の子として世に出てきた。しかし、この時代の諸藩は皆、勤皇か佐幕かと揺れ動いていた。

高山市一之宮町 青山英彦

しかも東野藩は薩摩、長州とまったく関わりが無かった。ご維新の際に特に江戸家老の所田陣内の働きが東野藩を救ったようなものだった。

藩主も所田を全面的に信頼し、一か八かの決断でも所田の言う事に疑いを持たず信頼して従ったのである。所田は東野藩の外交官としてあらゆるところに情報網を持っていた。今で言う情報が藩を救ったのであった。

このご維新の時に正歳の父、御普請組頭である須藤正兼は殺されたのである。世情は、都では蛤御門の変と、後に言われる京都御所での薩摩・会津連合軍と長州との戦があつたばかりである。そんな不安定な世の移り変わりの激しい最中に須藤正兼は殺されたのである。

下手人は布袋平九郎という若い藩士であった。布袋は犯行の翌日には藩を逐電していた。布袋平九郎が須藤正兼を殺害した理由については様々な噂が流れた。もともとらしく流れた噂は痴情の果ての殺害、つまり正兼が平九郎の妻女に無理難題を吹っかけて手込めにしたというものである。しかし、日頃の正兼の生活ぶりを知っているものは誰も信じなかったが、しかし、その噂は執拗

に流され続けた。

二

布袋平九郎が逐電すると同時に妻も姿を消してしまったのである。正兼は御普請組の責任者というよりも今言う技術畑の人間で、特に土木工事、つまり道路、堤防、城塞などの設計を任されていたのである。当然それには予算の見積りも算出し、それを勘定方に出して決済を買った。

それから実際の土木工事が始まった。混沌とした世情の中でも災害は発生する。

藩の中央部を流れる、名無川の下流域は長年堆積した肥沃な土地が広がり、藩の食料の大部分を生産していた。しかし時にはその名無川が荒れ狂って堤防が破壊され作物を痛めつけてしまう事もあった。

そのため、藩としては何を差し置いても堤防の補強工事だけはやっておかななくてはとの方針で近隣の百姓などが日雇いで多く集められ工事が始まった。

また、その工事の資金を調達するために勘定方は多額の藩札を発行したのである。その藩札は、工費用の資材や人足の給金として使われた。その工事が完成する前に須藤正兼は殺されたのであった。

この時、正兼は十四歳であり、そして江戸へ遊学していた。父正兼の跡を継いで土木技術者になるつもりで算術を研鑽していた。ともに正兼に家督を継がせるため、藩主に説明せねばならない。

国許の目付方からの報告では、須藤正兼が役所から仕事を終えて帰宅する途中、布袋平九郎が待ち伏せして襲撃したというものである。目撃者も多く、下手人は布袋である事に間違いはない。しかし、布袋の妻女も同時に姿を消してしまったという事実が目付方も困惑しているようであった。

調査の最終結論は出ていないが、殺害の動機、そしてなぜ、平九郎と妻女が同時に姿を隠してしまっただのか。平九郎は実行犯だから理解できるのだが、なぜ妻女が姿を消す必要があるのだ。その辺までで捜査が行き詰っているようであった。

四

正兼の家督相続については藩主に異論は無かったのだが重役たちから待ったがかかった。いかように、この御時勢であつてもまず相続願いを出す前にいたさねばならぬ事がある、と強く批判された。

つまり、親を殺されてそのまま犯人を放つておいて家督を継ぐというのは理にかなわない。まずは、敵討ちの許可を得て布袋を討ち取ることが先であろうというのが重役たちの大方の意見であった。

正兼の身の振り方を心配していた陣内もこれらの重役の意見に反論の余地はまったく無かった。仇討ち赦免状を貰う手続きに

た。そのころ江戸には高名な和算を教える塾がたくさんあった。その中の一つである蘭義塾という算術の塾へ正兼は通っていた。勿論、江戸藩邸内にある一部屋を借りて住んでいた。そこへ、国許から父正兼が布袋平九郎という男に殺され、しかも、その男は藩を逐電してしまったという急報が入ってきた。

三

江戸家老の所田陣内は正兼の父である正兼とは幼き頃からの友であった。剣術も同じ道場に通っていた。その頃、所田の家は家老職を出す家柄ではあったが当時は家老職の家ではなかった。しかし二人はどことなく馬が合い、近年では江戸と国許と離れて暮らしていた。しかし、時折手紙をやり取りし、特に藩邸には大切な友人の子息を預かっているという気持で正兼を藩邸に住まわせていた。

そんなところへ「正兼殺害される」の報が届いた。正兼は自分の父が突然この世から消えて無くなるとは、いくらこの騒がしい世であつても考えてもみなかったことである。

今後の正兼の身の振り方については所田が親代わりとなった。正兼とは長い付き合いで気心もよく分っていた。

他人の妻に懸想して、ましてや手込めにするなどはまったく信じられないことであつた。所田は早速国許の目付方へ問い合わせの手紙を送った。

正兼殺害の事実、つまり噂話などを排除した目付方の客観的な調査を報告するよう命じた。もちろん正兼は大切な友人であるが入った。藩主を通して幕府に願ひ出るのである。幕府はその事情を鑑みて許可を与える。その手続きを経て、正兼は赦免状を貰った。

結果、これで須藤家の家督を継ぐということは事実上不可能となつてしまつたのである。

陣内はめまぐるしく変わるこの世の中で、天下はどちらへ転がるのだろうか。薩長連合か、はたまた、幕府はしぶとく生き延びるのだろうか。その世の移り変わりに厳しく耳目を働かせ、微妙な変化にも十分注意を払っていた。

このような時代に逐電してしまつた布袋やその妻女の行方を探索することはもう無理であると考えられた。

正兼としては、赦免状を持つているからどこへでも行くことができる。しかし行動するにはまず資金つまり金が必要であつた。国許には母が一人で住んでいる。このような事態になつて一番慌てふためいているのは、母上であろうと正兼は心配した。私が家督を継ぐそんなことより、自分の大切な夫を切り殺され、拳句の果には思いもよらぬ噂が流され、実行犯は妻女ともども消えてしまった。そして正兼は江戸表に居て、母の力になることが出来ぬ。そのような苦しみの中で正兼自身もどうしてよいのか分からず悩んでいたのである。

しかし、ここが所田陣内の偉いところである。所田は、正兼の行く末を案じ、家督相続の厳しい条件を考えると相続は諦めた方がよいのではないかと考えた。

所田は、いわゆる東野藩の江戸家老つまり藩の外交官である。

江戸には日本中のほとんどの藩の出兵、江戸屋敷があり、そこには所田と同じような役目を持つ武家が数多くいた。

所田は九州方面の国々の重役と深い付き合いはあったが特に昵懇の間柄であったのは幕府の家臣であり幕府勘定方の重役である内藤由隆であった。

内藤は仕事上の主たる業務は算盤を使う事務方の責任者であった。資金の流れには大変詳しい男である。そこへ所田は目をつけていたのである。幕府内の資金がどのように流れているかを知る事によって幕府の方針、それに係わる人間などいろいろな情報を握ることが出来、また、うわべの数字だけを見るのではなく、それらの数字の変化を見ることによって情勢、つまり国々、または幕府の内実の動きを分析する事ができた。

これにより、東野藩は事前に藩の存亡に係わる重大な選択をせざるを得ない時でも無事に切り抜けることがたびたびあった。そのことにより東野藩藩主は所田陣内には絶大な信頼を置いていた。また、陣内が外交官として必要な経費は黙って諒解もしていた。

五

さて、話を戻そう。

この内藤由隆には妻はいたが跡継ぎとなる男子がいなかった。当然このことも所田は知っていた。

ここに来て親友である須藤正兼が殺され、十四歳になる一人息子が残され、そして国許には妻が残されている。所田は正歳の母

せないことはない美貌を備えていると考えていた。

所田陣内は多えから返事を貰っていた。家督相続は諦めます。何とか正歳をお願い申し上げます、と言って来た。

六

この返事を貰ったことで陣内は早速行動を起こした。同時に藩主にも報告をした。

内藤邸へ所田は訪れていた。不穏な空気が流れているこの時期に藩の家紋が入った駕籠に乗って内藤の屋敷へ訪問することは出来なかった。誰が、どこで見ているか分らず、のちのち藩によからぬ影響が出てはまずい、ということも考えた陣内は途中まで町駕籠に乗り後は供の者を一人つけて内藤の屋敷内へ目立つことなくふっと消え入るようになっていった。

内藤由隆は所田の来るのを待っていた。内藤には跡継ぎがないのが悲しくもあり不安でもあった。時代は流れて武家の威信が崩れ落ち、低下しても徳川の世では嗣子は絶対に必要であった。跡継ぎがなければ家はその代で断絶となってしまうのである。しかし徳川の末期であっても内藤家は千五百石知行取りの旗本であった。知行地は江戸から離れてはいたが、これが後に幸いとなったのである。

所田と内藤は奥まった部屋で向かい合って座っていた。

であり正兼の妻でもある多えに手紙を送った。

手紙の内容は、

一人息子の正歳のことは私(所田)に任せて欲しい。そして、あなたは何か親戚、友人を頼って生き抜いて欲しいと書いた。

時代は大きくうねって、天と地がひっくり返るような事になるかもしれない、そんな世の中だ。そして家督相続についてはあなたも存知だろうと思うが、もう無理だ。仇討ちを果たす事が相続の条件となっている以上、下主人の布袋平九郎およびその妻を探し出すことすらもう不可能と考えるべきだ。

それよりも、もう相続は諦めて新しいあなたの人生を考えたいほうが良いと思う。正歳の事は私に任せなさい。きつと立派な男にしてみせる。安心なされよ。という内容のものであった。

この手紙を受け取った母多えは、江戸家老の言っておられることは当たり前のことと理解した。確かに今のこの様な騒がしい世の中で敵を求めて、そして何の当ても無い旅に出て、布袋を探すという事はとてもとても生涯をかけても叶うものではないくらいなことはわかった。

多えは正歳のこと、家督相続のことは江戸のご家老さまにお任せしようと思った。それに自分のことは何とかなるだろうと考えていた。

実際、多えは分別のある女性で歳は少し臺が経っていたが、若い時から評判の美人であった。陣内は、多えはもう一度花を咲か

「内藤様、ご無沙汰しておりました」

陣内は頭を下げ、そう言った。

「所田さん、そんな他人行儀な挨拶はおやめください。もう長い付き合いじゃないですか」

内藤は、所田にそう言いながら酒を注いだ。そして居住まいを正して、

「所田さん、いや陣内さん。ところで例の若者の件、どうなりましたか」

陣内は、実は……と、話を始めた。

正歳のことである。母多えの諒解は貰った。後は本人の覚悟次第だ、と。まだ内藤家へ養子に行かぬかと話はしていない。しかし、東野藩にとっては稀有の才能を持った優秀な若者である。藩校で学んでいる時、師範はもう算学については教えることがないと言わしめるほどの逸材であった。それを伝え聞いた我が殿も彼をいたく買っておられる。

殿も何とか正歳に家督を継がせようと思われたが、藩の重役達の反対で、それも叶わず、かわいそうなことになった。が、しかし、ここで内藤さんがかねてからお探であった有能な若者を養子に迎えることが出来そうになったことは喜ばしい。この件については殿にも申し上げてある。殿は少し渋いお顔をなされたが内藤殿のところであれば正歳にとってもよい話だ、そう言われて後はそれがしに任せると言われました。

内藤由隆は黙ってその話を聞いていた。しかし、最後の言葉を耳にすると内藤は安堵の気持を正直に口にして、膳の横におい

ていた湯飲み茶碗を空にして酒を注ぎ、ぐいっと一気に飲み干した。

「ところで内藤殿、我が殿から出されていた仇討ち赦免状の件はどうなっていますか」

「こういふことになれば赦免状などはいらないと思うのだが、そうも言っておられまい。何といつても殿様から直々に添状もいただいている。私が特に誼を通じている御重役の尻を叩きますよ。今、しばらくお待ち下さい」

この時、徳川家は第十四代家茂で、公武合体を推し進めるため奔走していた。將軍家の対公家工作に努力している時、当然老中を始め幕府重役は正歳の、というか東野藩から出されている仇討ち赦免状の件はおざなりな扱いですぐに許可が下りてきた。

まさに徳川の政權は根元からいよいよ倒れ掛かっていた。
「もう、持つまい」と内藤も所田も肌で感じていた。正歳は所田から養子の話を聞かされた。殿様もご諒解されておるとも付け加えた。

さらに所田はこうも言った。
「正歳よ、殿はまことに残念。我が藩から秀才の一人が消えたのう、とも言っておられたぞ」

慶応四年、大きな出来事が起きた。徳川の世が終わったのだ。江戸を新政府東征軍に無血で明け渡されたのである。東征軍参謀西郷隆盛と幕臣勝海舟の会見で江戸は火の海になることなく静か

七

屋敷内にある丹精を凝らした庭に面した部屋に今流行のテーブルと椅子が置いてある。そこに陣内と内藤正歳は椅子に腰を下ろしていた。

正歳は内藤家に養子となつた際に名も変えぬかと陣内から話があったが彼は亡き父正兼から名づけられた名でございませう。それだけはお許しくささいと断りを入れた。

「どうだ、仕事には慣れたか」

「はい、私にとつては得意とする分野。内藤家に入つてからは陣内様もご承知のように昌平坂へ行かせてもらうことが出来、そして、西洋の高等算術、つまり数学という学問、それに土木建築を学ばせてもらいました」

「そうだったのう。お前は、由隆殿そして我が殿の期待を裏切ることなく育ってくれた」

「今は亡き義父にとても感謝しております。当然、殿や陣内様に受けたご恩は決して忘れることはできません」

「何を言うか。お前の努力があったればこそじゃ。ところで、今でも赦免状は持っているか」

「はい。大切に持っております」

「布袋の居場所はつかめたか」

「いいえ。まだ手がかり一つすらわかりません」

「そうか。ところで正歳、お前は島田市之助を知っておらう」

「はい。しかし私が内藤家に来てから便りが来ておりません。どうしているのやら。心配しているところです」

に時代は大きく動いたのである。

この時、正歳は十八歳。内藤家に養子に入つて三年めである。翌年、版籍奉還がなされ東野藩藩主は知藩事と呼ばれるようになってしまった。

徳川家は田安亀之助(徳川家達)が相続し、駿河七十万石へ移封されており、そして慶喜は水戸へ引き籠っていた。

内藤家当主の由隆はもう徳川の世は終わった、と無血開城となる前に早々と辞職し、家族ともども田舎の自分の知行地へ引き上げてしまった。

当然正歳も同じ様に田舎へ移つてしまった。しかし、所田や内藤由隆の働きかけで正歳は再び東京へ戻り、昌平学校へ入校し、数学、土木の勉強を続けたのである。

新政府は日本国を一日も早く西欧に追いつかせようという考えから、新しい人材を旧幕臣であろうと町人であろうと有能な人材を登用していった。

明治三年(一八七〇年)。新しく工部省が設立されると、正歳は昌平学校からの推薦により入省した。新しい国土の開発である。つまり特に国防、即ち外国軍隊に攻め入られない国造りを目指したのである。この時、正歳は二十歳。

正歳はどこへ行くとも左耳に特徴のある、そしてさらに左腕の動きの悪い男の姿を探した。入省して二年目、明治四年に散髪脱刀令なるものが出され、俗に言う散切り頭が普及した。このことによつて当然、布袋も同じ様に頭の形は変えただろうと正歳は想像した。

所田はさすが旧藩の家老までやっていたことから、そして今でもどういふ訳かいろいろんな所に情報網があるようだった。

陣内が言うには、市之助は今、前東野藩で羅卒(巡查)をやっていたが、今では警察署の副署長まで出世しているということであった。彼は東野藩では目付方に勤めていたことから犯罪者を追つかける術を持ち、しかもその道の裏社会への人脈もあった。それが功を奏したのだらう新政府から派遣されて来ている警察署長の覚えも良く副署長までになっているという。

「左様でございましたか。あの市之助が副署長とは」

「そうなんだ。だがな、彼はお前の父が殺された件については片時も忘れてはおらぬらしい。いまだに布袋の行方を追っているようだ。先日、珍しくわしのところへ便りを寄越した。お前の事も気にかけていた。お前もたまには便りを出してやれ」

島田の手紙は、殿様や旧藩の彼に係わった人たちの安否を気遣っていた事と、それに布袋についていろいろ調べたが、どうも東野の国には居ないのではないか。隠れるとしたら江戸つまり東京が一番隠れ易いのではないかと言ってきた。

それを聞いた正歳も

「私もそう思います。私が布袋ならばやはり東京で隠れますな。これだけ全国から人が集まって来ているのですから」

「まったくだ。薩長や土佐などからも多くの人間が東京へ来ている。それに天皇様が来ておられる事でそれに付いて公家達も沢山来ているではないか」

所田は少し語気を強めて話した。

「ところで正歳、お前は布袋の顔を知っておるのか」

「いいえ、直接会った事はございません。しかし、母から彼の者の特徴は聞いております。」

母の話によると、布袋は父を襲ったとき父の反撃を受け、左の耳の半分を切り落とされ、左肩に手傷を負ったそうです。それによつて左腕が十分に動かないかもしれぬ。そして左耳にかなりの特徴があるだろうとも言っていました。

正歳は人に会うとき、人ごみの中へ出かけるときも、いつもそれを頭の中に思い浮かべていた。

八

ある日のことであつた。省内の建物の外で荷馬車に測量器材や、出張先には泊まる宿などは無いので寝泊りできる食料や道具をも調達して馬車に積む作業を大勢の人達がやっていた。

正歳は、今回の測量調査を命じられその大勢の中にいた。荷物運び込みや省内の建物の中で忙しく人々が動いてたので砂埃も相当なものであつた。

そのとき、正歳は荷造りをしている官吏の中に特徴のある髪形をした男を見つけた。烏打帽子をかぶつてはいるが髪は総髪にしている。このことによつて両方の耳が毛髪の中に隠れている。一目では分らないのである。

そのことが正歳の目を引いた。年格好から想像すると年齢も布袋くらいだ。正歳は少し離れたところからその男を注視した。どうしても左の耳の形は見る事ができない。そして左腕の動きに

も注意した。なんとなく動きが悪そうにも見えた。

正歳の今回の出張は生まれ故郷の東野の国である。十四歳の時、江戸へ出てそれ以来帰郷した事がない。久しぶりである。そこには母がいてそして友人もいる。

新政府は西欧列強に追いつけ追い越せの大方針で新しい国づくりを始めていた。鉄道建設もそのひとつであつた。この年に新橋——横浜間が開通していた。

鉄道を延ばすため、正歳たちは旧東野藩まで足を伸ばし、鉄道建設予定地の測量調査に向つたのである。この測量地質調査の副責任者として正歳は故郷に向つて行つた。

旅の途中、調査隊の記録員を呼び寄せてそれとなく訊いた。官吏の中でも烏打帽子をかぶり、髪形を総髪にしている男がいるがあれは何者だと。

記録員は、

「内藤様、彼が何か気に障る事でもしでかしましたか」と、尋ねた。

「いやいや、気にすることはないですよ。この暑い日でも帽子をとることも無く総髪では大変だろうに。しかし、変わった奴だ、と目についたから何者かと気になつてあなたに訊いたんです。他言無用です」

「はい、心まりました。実は私も彼にはつい目がいつてしまひ変わった奴だなどと思ひ、官吏として採用する時提出された書類を見直しました」

「なんだ、あなたも彼が気になつたのですか」

「どうぞでございます。ほとんど無口で声すら聞いたことがありません」

「そうですね。どんな経緯で入省したんですか」

「はい、彼の名前は篠原と言ひます。篠原鉄心てつしんです。歳は三十五歳で、妻と子供二人がおります」

「うーむ。妻子持ちか」

そしてこうも付け加えた。

「実は、私の従兄を捜しているのですが、なんとなく彼がその従兄に似ていたんでね。旧東野藩の者だがご維新の時、一旗上げると言つて東京へ出て行つてしまつたんですよ。それ以来音信不通。家族皆心配してしまつてね」

「左様でございますか。内藤様もお気にかけておられるのですよね」

「そうですね。伯父や伯母も年老いて気が弱くなつてゐるんですよ」と、記録員は急に声を落とした。記録員はあたりを見回し小声で、

「内藤様……」

実は……

私もめつたにあの篠原の話し声は聞いたことはありませんが、今回の調査隊を編成するときに隊員名簿を私が作りました。そして、本人確認のため各自と直接話をしましたが、彼は薩摩藩出身の高級官員の紹介でこの工部省へ入つてきております。出身は江戸となつていますが、時折、東野言葉が混じつてゐます。なんとなく生粋の江戸人ではないと思ひました。

九

調査隊一行はようやく東野の国へ入つた。いづれにしても鉄道を敷く用地の選定と調査をするために現地で野営する。調査隊は総員五十名。これだけの人数が幾日も現地調査を支障なく実行するには賄ひ方まで雇つていた。

調査隊は現地に到着すると早速仮の掘つ立て小屋を作つた。寝泊りするには身分差とか工部省の役人には地位の違いがはつきりとしており、十把一絡げで寝泊りするわけにはいかない。

正歳は、この調査隊の一行に入つて現地まで来ている篠原の素顔を見たかつた。しかし、別々の小屋で寝泊りするとそれも難しいことであつた。

正歳は故郷、東野の国へ久しぶりで帰つてきた。自分がこの地を離れて江戸へ向つて以来、その時のままだ。一刻も早く母に会いたかつた。しかし、今は調査隊の一員として来ているのだ。しかも副隊長としてである。副隊長はこの調査隊の実質的な指揮官でもあつた。

そんなことから正歳は自分の我儘を控えたのである。仕事が一段落したところで隊長に話をして出かけようと決めた。正歳は須藤から内藤と名前が変わり、しかも大きく成長していたことから、この人物が須藤正歳だと気づく者は誰一人いなかった。

到着して数日経つたところで調査隊が本格的に測量などの仕事を始めた。隊員の一部を除いて殆どの者が技術者である。いちい

ち細かい指示を出さなくともそれぞれが自分の役割をわきまえて行動していた。

そんな中でやはり正歳は例の男、篠原が気になっていた。布袋は藩にいるときは勘定方に勤務していた。算盤、つまり経理の仕事はできると聞いていたが土木測量になると別の話だ。まず正歳はそこに注目した。それで篠原の周りに探りを入れたりして逆に警戒されたり、挙句の果てには逃亡されたりしては元も子もなくなってしまう。

「少し離れて見てみよう」と、正歳は考えた。

十

調査隊が宿舎を完成させ測量の仕事が順調に進み始めて数日経った夕刻の事であった。馬に乗った一人の男がその宿舎へやってきた。その男は髭を生やし、背広を着て、乗馬ズボンに長靴という身なりをしていた。

宿舎の前にいた官吏にその男は尋ねた。

「お尋ねするが、ここに内藤正歳殿はおられるか」

「どちら様でございますか。お取次ぎするにはあなた様のお名前が……」

「これは当然。私は市之助じやと伝えてください。私が来たと言えばそれで事は足りる」

それを聞いた官吏は急ぎ正歳に取り次いだ。

正歳は副隊長室にいた。官吏が伝えた名前を聞いてすぐに玄関、

「市之助この刀を見てくれ。これが俺の覚悟だ」

そういうながら刀を市之助に見せた。刀は一点の曇も無く見事に手入れがなされていた。

「それにこれもだ」

と言って、小刀も刀を抜いて見せた。

「これも父の形見だ。大太刀ではなくこれが必要な時があるかも知れない」

二人は懐かしい話はそこまでにして布袋平九郎の話になった。

島田市之助はこの東野の国での捜査状況を説明した。布袋平九郎や妻女の親族へもまったく何の報せも無いようだ。手掛りが無いと悔しがった。

それを聞いた正歳は江戸、つまり東京と東野に別れて生活しているも島田は仕事柄とはいえ真剣に捜査してくれていたのだからと改めて感謝の言葉を言った。

正歳は、

「ところで私が今気になっている人物が一人いるんだ。もし彼が布袋であればまったく灯台下暗しだったよ。天佑神助だ。」

と、話し始めた。

つまり、今回の出張を仰せつかったことから分かったのだが、と今に至るまでの話しを島田に聞かせた。

「なに！それじゃ、その男はおぬしと一緒に行動しているというのか」

「そうだ。しかし、怪しまれて逃げられでもされたら、と思ひ慎重に確認をしようとしているところだ」

といつても事務所棟の入り口で粗末なつくりである、へ向った。所田陣内からは市之助は警察副署長になっていると知ってはいたが久しぶりの対面である。

子供から大人になって、それも世の中が激しく変わり藩そのものがなくなり、徳川幕府もこの世から消え去っていた。

正歳は入り口まで走った。二人はお互いの顔を見合った。

「正歳か」

「そうだ。市之助か」

二人はしばらくの間言葉が出てこなかった。正歳は、

「市之助。元気そうで何よりだ。俺の部屋へ行こう。話は山ほどある」

二人は正歳の部屋へと向った。正歳が先に部屋に入り市之助を招き入れた。

市之助は元家老の所田にはたびたび手紙を出しているので正歳の現在を知っており、また、今日、この地へ調査隊副隊長として来ている事も知っていたのである。

市之助は正歳に訊いた。

「正歳よ、今でも布袋に対する気持は変わらんか？」

「いかにも。こちらでの滞在が長くなるので例の御赦免状も持ってきている。それに……」

と言いながら、嚴重に梱包してある装備の箱の中から父の形見の刀を取り出して、それに油紙に包まれた仇討ち赦免状を見せた。

刀を手にした正歳は、おもむろに洋服のズボンのベルトにそれをさした。そして、静かに鯉口を切り刀を抜いた。

「よし、そういうことなら俺に任せろ。俺が調べてみよう。ただし、俺も布袋の顔は知らない。やつは勘定方、俺は目付方。顔など一度も合わせたことは無かったぞ。でもその手掛りがあれば何とかなるだろう」

つまり、島田は今の調査隊へ現地採用の臨時隊員として俺を雇えということであった。名目は何でもなるだろう。三名ばかり、仕事は何でもいいから雇えという。正歳にとってはこの調査隊の実質責任者であるため、それについては何の問題もなかった。

正歳は篠原と言う男の情報を島田に教えた。

二人は翌日の未明まで酒を酌み交わし、尽きない話しを続けた。その話の中で市之助は正歳の母多えについて話しを始めた。

母は東野では有名な大きな造り酒屋の女中頭をやっていると聞いていた。当然、所田もそのように聞いていたのである。しかし、島田が言うには話はまったく違っていた。島田は正歳に申し訳なさそうな顔をして語り始めた。

まだ、東野藩が実在していた頃、勘定奉行は上田正二郎であった。上田は藩主が参勤で江戸へ行つて不在である時は家老よりも力を持つていて藩を動かしていた。

そして正歳の父である正兼が存命中に堤防工事を行っていたのだが、そのときの工事資金は藩札を大量に発行したのである。普通、闇雲に大量の藩札（紙幣）を出せば通貨の価値が下落し、物価の上昇を招くはずなのだが実際にはそうならなかった。これには深いカラクリがあった。東野藩には豪商と言われる寶屋錦衛門

がいた。藩が発行する藩札をその値の半値で買い取っていたのである。このことは上田勘定奉行と寶屋だけで秘密裏に事は運ばれていた。寶屋錦衛門は先々代、つまり彼の祖父は九州地方から出てきていた。そのことよって、今の薩摩藩の御用商人たちと深い繋がりがあった。

上田とて藩の経済運営を任されている男である。まったくの素人ではない。では、何故、この情勢不安な時期に大量の藩札を発行したのだろうか。それは、錦衛門が九州の親戚筋、つまり薩摩藩御用商人からの情報では、新しい政府ができた暁には藩が発行している藩札は全て新政府が責任を持って買い取るという途方も無い情報であった。

豪商と言われた寶屋は、この情報に全てを懸けたのである。そこが豪商といわれる所以だろうか。

上田は上田でこの時とばかりに藩札を大量に刷り、それを市中に出回ることなく寶屋に買い取らせたのである。

上田はこのいかさまのような手品で莫大な富を隠し持つことが出来たのである。当然、この件に関しては藩主、家老などは知る由もなかったのである。

事実、明治政府は、後日、これらの藩札を東野藩に限らず全国の藩札を買い上げて藩という存在を日本から消し去ったのであった。

話は少し横道へそれた。元へ戻そう。

十一

島田は髭をそり落とし、よれよれの洋服を着て調査隊の宿舎へやって来た。他に二名似たような服を着て同じく事務所棟に並んだ。記録員は正歳から三名を現地調達して増員すると言われていた。

下働き専門である賄い係り一名、後二名は測量要員の補助、つまり手伝いである。荷運びなど測量に直接係わること以外の仕事を応援することになっていた。

他の一人は島田の部下で調査である。この際、その調査は島田から絶対に悟られていけない探偵だからと言い詰められていた。記録員は島田たち二名を篠原と同じ班に組み入れた。そのもう一人の調査の名は田ノ橋といった。経験は浅いようだった。

島田は田ノ橋と二人きりになったときには必ず注視している男に気取られぬよう注意した。島田を含めた探偵をしていた二名が調査隊へ入って四日経った。篠原はいつもと違う態度を見せる事はなかった。島田も何とかあの男の耳を見ようとしたがなかなか見ることができなかった。

島田は考えた。「よく考えるならば、こんな簡単なことは無いではないか」と。

島田は田ノ橋調査をそつと呼んだ。耳元にこれから行う島田の計画を話した。つまり、この宿舎内で篠原にけんかを仕掛けて取っ組み合いをする、そして左耳を確認する、なんてこんな簡単な事を思いつかなかったのだろうか、と島田は思った。

島田は一人で、五人編成となっている寝所へ向った。篠原とは

この元勘定奉行の上田正二郎のお妾さんがお前の母上様の現在だ！と、市之助は語った。

正歳が殺された後、目付方は布袋とその妻の行方を追ったがまったく足取りがつかめなかった。そして、お前は、須藤家からいなくなってしまうていた。

お前の母上様がどうしようと思案しているところへ、その上田が上手いこと言って自分の困い者に、失礼、母上様の世話をするということになったのだ。しかし、お前が心配するだろうからと言って、この事はこの東野でも殆どの人が知らないはずだ。

俺は目付方にいたし、それに現在は警察官として様々な情報を知る立場にいる。

(しかし、市之助でも、どれくらいの金額が上田の懐に入ったのかは分っていないかった)

そういう訳だから、お前が母上に会いたいという気持ちはよく分かるのだが、突然の訪問はまずいと思う。ゆっくり母上様に時間を差し上げてからの面会をすべきだと、俺は思うのだが、と市之助は正歳に語った。

正歳は最初、市之助の話しを、何を言うかという反発する気持ちで聞いていたのだが、ようやく気持を整理して市之助の話しを受け入れたのだ。

「市之助、よく話してくれた。かたじけない。母と会うにはもう少し時間をかけてからにしよう」

「それが良い。正歳」

班は一緒でも寝所は別であった。田ノ橋に宿舎の裏口に見張り役として待機させた。入り口は事務室にもなっているので容易に出入りは出来ないようになっていた。

田ノ橋は裏口で一時間ほど様子を伺っていたが出入りする者は誰もいなかった。物陰に隠れていたがようやく背伸びをして立ち上がり寝所へ島田を訪ねようとして薄暗い通路を歩いた。

少し遠くに廊下の照明用の灯りランプが天井から吊り下げてあった。そのランプを見ながら歩いていると何かにつまずいた。

「おっと。危ないじゃないか。何だこれは」と、言いかけて田ノ橋はとっさに人間であることに気づいた。

天井から吊るしてあったランプを外し、手に持ち替えて横たわっている人と感じた物に灯りを当てた。やはり人間であった。

「おい、何をやってんだ。こんな所に寝るやつがあるか。起きろ」と、声をかけた。しかし返事は無く、ピクリとも動かなかった。

田ノ橋はその横たわっている人の顔を見ようとランプを横にならしている人に近づけた。

「あーつ、島田さん」

と、言いかけて声を飲んだ。思わず持っていたランプを落としそうになった。ようやく気を取り戻した田ノ橋は血の臭いに気づいた。横にならっているのは島田であった。床にはおびただしい血が流れていた。

田ノ橋は大声を出そうとしたが、まず島田の首筋に手を当て生死を確認した。そして素早く篠原の寝所へ向った。そしてそつとドアを開けて中に入った。篠原らしき男は横になっていた。田ノ橋は血の臭いが十分気をつけて鼻で調べた。しかし、何の

異常も見られなかった。

田ノ橋は急ぎ副隊長の内藤の部屋へ走った。

「副隊長！田ノ橋です」

と少し声高に叫んだ。

「入れ」の声を聞くなり田ノ橋は慌てて、部屋の中に入った。正歳はランプに灯を点けて明日の予定だろうか書類に目を通していった。

「内藤さん！大変です」

「何事ですか。時刻を考えてください。もう真夜中ですよ。場所柄をわきまえてください。いくらあなたが巡査でもここでは身分を隠してあるのですから」

「承知しています。でも、でも」

そう言いながら田ノ橋は顔がどんとん青ざめていった。それを見た正歳は一瞬緊張した。もしや市之助の身に何か起きたのだろうか？。

「田ノ橋君、落ち着きなさい。いったいどうしたというんですか」

「島田さんが殺されています」

「なに？もう一度言ってみろ」

その後の話は、先ほど島田と打ち合わせをして自分は裏口へ見張り立ったところから正歳に説明した。

それを聞いた正歳は記録員である田邊正四郎を起こした。彼は正歳の隣室で寝ている。正歳、田邊それに田ノ橋は裏口へ走った。記録員である田邊はそこへ行くまでの間に携帯用のランプをいくつか持ち、田邊の部下を三名ほど起こした。

現場でいくつものランプに灯りを点けると横たわっている島田

をしてさっさと引っ込んでしまった。

署長は、櫛警視と自己紹介した。櫛は島田からある程度、この調査隊へ探偵をするために身分を隠して捜査のために潜入すると聞いていたようだった。副隊長室には櫛警視、田ノ橋巡査、田邊記録員、それに内藤正歳がいた。

殺された市之助に使われた凶器は、測量機材や野営する天幕を張るときに用いる地面に打ち込む鉄製の杭であった。測量用機材の箱の中から持ち出された物で、それこそ、この調査隊にいる誰もがその杭を使うことが出来た。このことから犯人の特定は出来なかった。

署長は、時間はかかるが一人ひとり調べたいと言ったが、正歳は、

「我々も一日も早く犯人を捕えたいが、測量の期限を遅らせることは出来ない。ここは一つ私に心当たりがあります。私に任せて貰えないだろうか」

「ほう、すると私たち警察を差し置いて、あなたが犯人を捕まえると言われるか」

櫛警視は少し気色ばんで語気を強めた。

「いえいえ、決してそのような意味で申し上げた訳ではありません。市之助は私の大切な友人でもあったし、私のために命を落としたようなものです。あなた方はあなた方で捜査してください。私は心当たりの人物に直接当たってみます。決してあなた方警察を軽んじて言っているのでありません」

の床の回りは血の海であった。隊長のところまで隊員を走らせ、全員起床点呼であった。

十二

隊長はある意味では総責任者ではあるが部下たちを引張っていく人物ではなかった。やはり、このような事件が起きた時の責任者は自然に内藤正歳の方へ役割が廻ってきた。

正歳は各班の責任者である班長からの報告によると、全員が点呼に応じ姿を消している者は誰もいなかった。つまり、市之助を殺害した犯人は外部から侵入した者はおらず内部の者の中に犯人がいるということは明白であった。正歳と記録員の田邊は田ノ橋が巡査であることは伏せていた。

考えられるのは、市之助は篠原を調べていた。当然、彼は篠原に近づいたと考えられる。それで殺されたに違いないと思った。

正歳は口惜しかった。自分のために職業柄とは言へ、一肌も二肌も脱いでくれた男を無残にも殺されてしまったことの、その怒りをどこへぶつければよいのか分からず、大きな暗闇の穴の中へ落ちてしまったような気持ちになった。しかし、正歳は確信を持った。間違いなく篠原は布袋に違いない。よし、俺が直に篠原にあたる、そう決心した。

翌日、東野の警察署から署長や警察官がやって来た。警察署長は隊長に面会を求めた。隊長は、実質責任者は副隊長であると話

「まあ、よろしかろう。やってみなさい」

大見得を切った形になった正歳は内心穏やかではなかったが成行上これは仕方がないと腹をくくった。

署長は田ノ橋を連れて出て行った。

「田邊さん、今日は、いつものように隊員達は仕事に出掛けていますね」

「はい。当然、篠原も出かけています」

「念のためだが、彼の私物を調べてみてください。何も出ないと思いますが」

「分りました。慎重に調べます」

「それと、皆が戻ってきたら篠原をこの部屋に連れてきてください。あなたが一緒に来るのですよ。決して彼を一人にせず、指示を出すだけではダメです。逃亡を防ぐためにもお願いします」

正歳はそう言うとき大きく息を吸い込んだ。

正歳は自分の部屋で独りきりになった。私物を入れてある箱から島田市之助にも見せた大・小の刀を取り出し、自分の机の上においた。そして、椅子に座り目を閉じた。

市之助は死んで、自分を助けてくれる者はもう誰もいない。心寂しいというよりも頼りがいのある友人を失ってしまったという思いのほうが強かった。何か片腕をものがれてしまったように感じた。

ドアがノックされた。

「記録員の田邊です。よろしいか」

記録員が何のようだろうと思いつつ、

「どうぞ」

と返事をした。

田邊は副隊長室へ入り軽く頭を下げ、それから姿勢を正すと視線は机の上に行った。正歳も彼の視線が自分より先に刀に目が行ったことに気づいた。

「副隊長、いや内藤さん。少しお話があるのですがよろしいですか」

「どうぞ、時間はあります。何ですか」

田邊は部屋に入るとき廊下には誰もいない事を確認しドアを閉めた。内藤は机の横にある来客用の椅子に座るようにと言った。

田邊は椅子に座るとタバコを吸ってよいかと正歳に訊いた。今までこの隊の中で身分の低いものが上司に向ってタバコを吸ってよいかと聞いたものは誰もおらず初めてのことだったので、正歳は内心驚いた。正歳はタバコをたしなむことは無い。それを田邊は知っていたので許可を求めたのだ。

正歳は田邊に用件は何だと訊いた。

田邊は、「実は私は内務省の人間だ」と突然言い出した。

「来年、内務省の下部機構として警察組織が出来る。私はその組織の人間だ。どうか驚かずに聞いてください。

私も旧東野藩の人間なのです。今日までこの東野の国へは来たことがありませんでした。父は江戸藩邸詰めで私は江戸、東京で

「分りました」

正歳はそういうと机の上の小刀に手をかけた。そしてその刀を抜きじつと見つめ、独り言のように言った。

「この部屋の中で使うにはこれしかないか」

田邊はそれを聞いて

「そうです。大きいのはこの部屋の中では不向きでしょう。それをお使いなさい。篠原は私が間違ひなくこへ連れてきます。そして一緒に確認しましょう。左耳と肩の傷を」

当時（明治六年）の人々は仇討ちについてどう考えていたのだろうか。

日本の社会では長い間「仇討ち」は儒教の考え方から、当然のことと正当化されてきた。そして、特に「復讐は子弟の義務」であり、「復讐の義務は血族意外に及ぶ」と儒教は「仇討ち」を忠孝の美德として肯定していたのである。

これにより正歳が家督相続を願ひ出ても「仇討ち」が先だろうと拒否されてしまったのである。ところが時代はご維新を経て大きく様変わりした。

仇討ち禁止の最初の法律が一八七三年（明治六年）二月に司法卿・江藤新平が出した復讐禁止令（仇討ち禁止令。太政官布告第三七号）である。これにより徳川幕府が公認していた仇討ちは禁止となってしまう。

また、明治の初め頃には、幕末から維新期の派閥、政論の対立による暗殺とその報復という殺し合いがあったことから、この種の紛争を断ち切るためにも明治政府は仇討ち禁止を発令したので

すな、そこで生まれ育ちました。内藤さん同様、あの所田様に変お世話になりました。

この激動の世を迎え東野藩は無くなってしまいました。所田様のお世話で新政府の内務省に入りました。先ほども申しましたように来年、本格的に警察組織（後の警視庁）が出来、私はその準備を担当しています。今、この隊に私がいるのは所田様のお計らいです。

所田様より、お話があつて正歳を陰ながら応援してやってくれと頼まれました。赦免状を持ってきておられますね。それが必要となったときが生じたら何としてでも助けてやってくれ、と言われました。

そして、もう一つ大事なことをお伝えねばなりません。

来年、もうすぐですが、復讐禁止令が公布されます。すると、政府のお役人でもあるあなたが、おおっぴらにこの法を破ることは出来ません。もう時間が無いのです。どうか、その辺のところをよくよく考えて行動していただきたい」

田邊は自分と相手を落ち着かせるために、煙草を吸いながらゆつくりと説明したのである。それを聞いた正歳は、

「これは驚いた。あなたは内務省のお役人だったのですか。あなたと所田様のご配慮には感謝申し上げます。ところで、もう仇討ちは認められなくなるのですか。田邊さん、あなたは警察官僚ならば、今、この赦免状は効力があるかどうかは分りますね」

「ですから、来年、禁止令が公布されると、仇討ちは出来なくなります。まだ禁止令は施行されていませんから、それが使えるのは年内でしょう。もうしばらくの間だけです」

あつた。

そのような事情から政府役人が仇討ちと称して殺人を犯すことは言語道断の振る舞いとなる。しかし、「時」は直前であつた。正歳は、仇討ちは当然の義務と考えていたのだが二月を以つてそれは殺人罪以外のなんでもない事になってしまうのである。

十四

正歳は覚悟を決めた。仇討ちに係わる諸手続きは一切無しにこの部屋の中で布袋を討つてしまおうと。

手続きも何も幕藩体制は無くなってしまっている。あの警察署長に事前に話しを持っていけば恐らく止められ、島田副署長の殺害犯としてお縄にするだけだろう。

正歳はもう一度考えた。仇討ち禁止令はまだ公布されていない。であれば旧法であろうが赦免状の効力は残っている。自分に殺人罪を適用するとなるとどんな法律、ご法度があるのか。ここは乾坤一擲の勝負。迷うことなく成就すると心に誓った。

副隊長室のドアがノックされた。

「田邊です。篠原を連れてきました。入ります」

正歳は刀を机の上から引き出しの中へ入れていた。入ってきた二人の姿を見て篠原に正歳は声をかけた。

「よく来てくれた、布袋平九郎。この時を待っていたぞ」

同時に田邊は篠原を後から羽交締めにして動けないようにした。

正歳は慌てることなく引き出しから小刀を取り出し、刀を抜き放ち、一気に接近して刀の切っ先を喉に浅く突き刺した。篠原はあまりの突然さに声も出なかった。

「動くな。騒げばこの刃がおぬしの喉を貫く」

正歳はそう言うやすかさず左耳を見た。やはり左耳の半分は無かった。そして、上着のボタンを外し、左肩をも見た。刀傷が鮮明に残っていた。

正歳は田邊の顔を見て領いた。

「捜したぞ、布袋平九郎。私は須藤正兼が一人、須藤正歳である。

父の仇、覚悟しろ」

と言いかけた時、

「俺は頼まれただけだ。あししなければ私が殺されていた」

確かに父・正兼の殺害は理由がはっきりしていなかった。平九郎の妻女に父が懸想したから殺されたとは父を知る誰もが納得しなかった。

「訳を話せ。もし、逃げようとするなら、ここでお前の素っ首を刎ねる」

正歳に代わって田邊が篠原——ここから布袋と改める——にそう言った。布袋はもはやこれまでと観念した。警察官僚である田邊は隠し持っていた拳銃を手に握って布袋の頭に突きつけていた。正歳は布袋の首に刀を当てたまま椅子に座らせた。布袋はうなだれて話しを始めた。

今から七年前（文久四年）、私は東野藩勘定方に勤めていた。

この時、お前の親父・正兼殿は御普請組組頭で、名無川の堤の補

た金の半分が、まだ、この東野に残してある。この調査隊に紛れ込めば人に目立つことなく入って来られると思つたからだ」

「それじゃ、その金を取りに来たというのが目的か？」

「そうだ」

「よく判つた。しかし、お前は島田市之助も殺しただろう」

正歳は、そう言つて持つていた刀に力を入れた。喉に当っている切っ先のところから少し血が出てきた。

「そうだ。俺の身分がばれそうになつたので殺した」

と、言うと同時にそれを聞いていた田邊は布袋の頭を正歳の方へ思いつきり押しした。正歳が持つていた刀の刃は布袋の首を貫いた。そのとき、頸動脈をも切つたのだらうおびたらしい血が刃のところか吹き出た。

正歳は慌てて刀を抜こうとした。

「正歳殿、そのまましばらくは刀を抜かないで」

「えっ、どうしてこんなことに？」

田邊は正歳を落ち着かせるようにゆつくり言った。

「彼の身を考えたからですよ、正歳殿。あなたは彼の話しを訊いて殺そうかどうしようか迷いましたね。殺さなければ島田さん殺しの下手人として警察へ引き渡すことになるのです。そんなことをして御覧なさい、彼は警官殺し、しかも副署長をあのように鉄の杭を身体に打ち込んで殺したのですよ。彼は警察署で取調べと称してなぶり殺しにされるでしょう。それよりもここで一思いに楽にしてやつた方が彼のためです」

強工事の積算書を俺の上司である上田勘定奉行に提出していた。

この時、藩札を発行して工事資金を作り工事を行うように計画していたのだが、御用商人と巷で言われている寶屋錦衛門と共謀して、工事見積りよりはるかに多額の藩札を発行し、上田も寶屋もそれを自分たちの懐に入れたのだ。私はそんな多額の藩札を持つていたところで紙くず同然になりかねない危ないことをするもんだと横から見ているのだが、果たして世の中が変わつたら、奴らはそれで大儲けしやがった。

しかし、それは昔の話で、当時は藩札を私するとは何事だ、と上田奉行に抗議しようと面会を求めて会つた。奴らは一枚も二枚も上手。結局、私は多額の現金で言い含められてしまった。それに言うこと聞かねば身の安全は保障しないとまで言われた。

ところが、その秘密に気がついた正兼殿は正義感が強いお人であつた。それが返つて仇になつて口封じされることになつてしまった。その役を私がさせられたのだが。

この時も半分脅しと高額な、それこそ私たち夫婦が一生食っていけるほどの金だつた。こんな世の中だからと割り切つて金を貰い、おぬしの父を始末して逐電したという訳だ。

さあ、これでも俺が憎いか。本当の殺害の犯人は奴らだろう。そう言つて布袋は開き直つた。

黙つて聞いていた田邊は、さらに布袋に訊いた。

「お前はなぜ危険を冒してまでこの東野へ来たのだ。顔見知りの者もいるだろうに」

「俺だつてここへは来たくなかつた。しかし、報酬としてもらつ

たと言われて正歳はあの署長の顔を思い浮かべた。確かに田邊の言うとおりかもしれない。拷問を受け、拳句は殺されてしまうのだらうと思つた。

翌日、正歳は田邊の助言どおり、仇討ちをしようと決闘の準備をしているとき、布袋は、もはやこれまでと自分の首を切つて自害して果てた、と警察へ届け出た。それと一緒に徳川幕府の正式の赦免状も出した。

今はもうその幕府は無くなつているがその赦免状の効力はあると正歳は信じていた。それを受け取つた機警視も元は侍である。疑うことなく話をついた。

布袋は自害する時に、

「島田は私が殺しました」と自白したことも申し添えた。

十五

正歳が今ここで最も頼りになる男は田邊正四郎であつた。まさか、ただの記録員だと思つていた調査隊の吏員が実は内務省の高級官僚で、しかも警察機構の立ち上げを準備している警察官僚だとは驚きであつた。それに度胸が据わつた男である。この男が同じ東野藩の人間だとはまったく思いがけないことであつた。

人間は同じ組織の中にかつては居たと分ると、目には見えない不思議な絆が生まれるものなのだ。正歳は感慨に耽つた。正歳は副隊長室内で田邊と向き合つていた。年齢は田邊のほうがずっと先輩である。東京には妻子を置いてきている。

江藤新平による「復讐禁止令」が公布されるまでに後三日と迫ってきていた。

「正歳殿、期限がもうそこまで来ている。それに上田や實屋に対する赦免状そのものが無い。禁止令前に彼らを討つこともできない。今ここで彼らを討てばただの人殺しだ。父上を殺したという証拠すら無い」

「そうです」

と、正歳。

田邊はそのとおりだと言ひ、しかも彼を罰するにも何の証拠、証言も無い。正歳はどうしようか考え込んでしまった。

どうしようかとは、父の眞の仇として彼らを討つか、しかし討てば何の具体的な証拠も無いままの殺人者となるだけである。このまま諦めるか、それとも仇を討つか。しかし、何とか一太刀浴びせたい、の分かれ目にいるようだ。

「田邊さん、私は人生の分水嶺に立っているようです。しかし、あの布袋に父を殺させたのは上田正二郎元勘定奉行、何とか一太刀浴びせたい。でも、赦免状も無ければ禁止令も出る。どうしたら私自身の気持ちが収まるのだろうか」

田邊は建前としてはもう無理だ、止めなさい、実行犯を討つたのだから。でも本音としては父を亡き者にした張本人である上田をそのまましておくことは許せない、という正歳の気持は十分過ぎるほど理解できた。

しかし、この場では、

田邊は手紙を読んで、

「正歳殿。やはりこの母上様のためにも、これで仇討ちはもう終りとしましょう」

と、読み終えた手紙を元のように折り畳んだ。返された手紙を持って正歳はこう言った。

「田邊さん。私は一度母に会って今までのことを話します。そして、その時に上田をどうするか決めようと思います」

「うーむ。まだ正歳殿は迷っておられるか。あなたは殺人者になるか、ならぬかの境に立っているようなものだ。つまりあなたが先ほど言われた分水嶺にいます」

「私は母に手紙を書きます。そして会う日を決めて率直に今の私の気持ちを言います」

正歳はそう言うのと早速立ち上がり自分の机に向った。手紙を書くには、今流行のペンを用いた。机の上には用紙、それにインキ壺。毛筆で書く時代は過ぎ去ろうとしていた。

正歳が母宛に手紙を出してから十日目、母から返事が来た。今日から三日後に会うことになった。場所は須藤家の菩提寺である長久寺。そこには父・正兼の墓もある。

当日、正歳は隊長に父の墓参が母に会って来ると、一日の休暇の許しを貰って出かけた。宿舎の粗末な玄関まで記録員（まだ内務省官僚とは伏せたままである）の田邊は見送りに来た。

「正歳殿。決して早まった結論は出さないでください。きつと母上様が悲しまれるような事はなさないでください」

「正歳殿。あなたがやれる事はここまでだ。これ以上はもう無理だ、としか私には言えない」

正歳はその意見には納得できた。法的にはもう無理だ。しかし、己自身の心を納得させる事はできなかった。

二人は重苦しい雰囲気の中でお互いに顔を見つめた。

そこへ事務所の係員が「手紙が届けられています」と部屋へ持ってきた。

手紙は母多えからのものであった。久しぶりに見る母の美しい文字。手紙は昔ながらの毛筆で書かれていた。思わず懐かしさのあまり涙がこぼれそうになり、少し照れくさそうな態度をとった。田邊にはそれが幼き少年が母親に甘えるしぐさに思えた。それに年の離れた弟のようにも見えたのである。

正歳は手紙を開封する前に、手紙を両の手で持ち押し戴いた。内容は、まず無事工部省の役人になることが出来、また、この東野の国へ調査隊副隊長として出張して来られたことを大変嬉しく思う。そして、もう諦めていた仇討ちの本懐を遂げられた事を何よりも嬉しく思う、と認めてあった。

それと文面の最後に、今まで黙っていたが、今の自分は元勘定奉行・上田正二郎の世話になっていると幾分小さめの文字が並んでいた。亡き父・正兼もお前の成し遂げた仇討ちをあの世界大いに皆に自慢しているだろう、と文は結んであった。

正歳は涙が落ちるのを隠そうとせず、手紙を田邊に見せた。田邊がその母からの手紙を読んでいる間に決心した。母に会いに行こう、そして上田が父の眞の仇であることを告げよう。

「ええ。分かりました」

そう言いつつ馬上の人になり、東野の町へ向かって行った。

十六

長久寺山門で馬を下り、馬を引いて境内へ入った。庭を掃除していた寺男に調査隊副隊長・内藤が参ったと告げた。寺男は正歳の訪れを知っていた様子で軽く会釈をして正歳から手綱を受け取り、

「母上様がお待ちでございます。どうぞその先の小道を進んでください。庭先へ出ます。そこにあるお部屋で待っておられます。どうぞこゆつくり」

「ありがとう」

そう言つて、かつてまだ正歳が少年であった頃、よく母に連れられてこの寺へ来たものだ、と思い出して来た。江戸へ出て以来、母には会っていない。

季節は弥生、ちょうど桜も咲き始めて庭は春の彩りがとても眩しかった。

母は開け放された庭に面した座敷に一人、白地に花柄の着物を着て座っていた。それだけでも座敷が春らしく見えた。

正歳は少し速足になった。

「母上、母上様」

そう叫んでしまった。二人の久しぶりの対面はお互いに言葉は無かった。

母多えは、大きく、そして遅しく成長したわが子を嬉しさと驚

きの表情で、大粒の涙を流して見た。正歳は膝を母のほうへ進め、自然に手をとった。少年の時以来の母の手を見た。それから自分の頬に母の手を当てた。

「今まで母上には数々の親不孝を重ね誠に申し訳ありませんでした。これからは……」

その後の言葉は出てこなかった。母は正歳の顔を両手の手のひらではさむように優しく撫でて、

「ようもここまで無事に成長してくれました。その姿を私に見せてくれただけでも何も言う事はありません」

しばらくして、この寺の住職がやって来た。脇には若い僧が伴って、お茶や菓子を持ってきた。住職は二人に挨拶して静かに出て行った。

「どうぞ、ごゆるりとお過ごしください」

「母上、積もる話しは山ほどありますが、今日は父の仇についてご報告に参りました」

正歳は布袋を討ち取った経緯を優しく語った。そして、最後に、「母上、そのような訳で、真の仇は上田正二郎元勘定奉行であることが分つたのです。しかし、復讐禁止令が交付されました。それに上田に対しての仇討ち赦免状すらありません。」

今日、ここへ母上様に会いに来たのは他でもありません。母上のお顔を見て上田を討ち果たす覚悟を決めようと思つたからです」

それを聞いた多えは、一瞬呆然となったが、すぐに正歳を戒め

て来た。あの櫛署長であった。顔立ちは相変わらず冷酷そうに見えるが、いつになく緊張しているようにも見えた。

副隊長室へ田邊が案内してきた。櫛署長は正歳の前に立ち、田邊は二人の横に位置した。

「署長さん、今日は何のご用件ですか」

と、正歳は尋ねた。

「うむ。実は内藤さんの母上が上田正二郎を殺害し、自刃して果てられた」

た。

「正歳、何を言うのですか。お前の気持は私にも痛いくらいわかる。しかし、お前はこれからの日本を背負っていく人です。もう年老いた上田を討つてなんになるのです。よく考えてみなさい。もうこれで十分です。母はお前が科人になるのは耐えられません。父上もきつと私と同じことを言いますよ」

母は懇願した。

正歳は母の必死の説得を受け入れざるを得なかった。

正歳は再び馬に乗り宿舎へ帰った。その帰り道、上田を討つ事を諦め、母を今後どうしようかと思案をしていた。

宿舎に戻ると田邊が早速やって来た。

「正歳殿、母上様と存分に話し合いが出来ましたか」

「ええ。母に叱られました。もう仇討ちは終わった。お前はこれからのことを考えなさいと言われました」

正歳は明るく答えた。

その言葉を聞いた田邊は安堵の顔になった。

十七

母との久しぶりの面会を済ませた正歳は本来の仕事に専念した。また世話になっている所田陣内にも今までの経過報告とお礼の手紙を書き送った。

母と会ってから四日目の夕刻であった。馬に乗った警官がやっ

選 後 評

俳句の部

今年の俳句の部の応募作品は、言ってみれば粒ぞろいの作品が多かった。一年間で十句、もっと意欲的な心の有る個性的な作品の応募が望まれる。

中でも高山市議会議長賞に選ばれた上田眞穂子さんの作品は、全体的な安定感と「みな角を落しし鹿の寄りて来る」「海の日に海の色なるグラス買ふ」「木犀や顔のあたりに風生れり」「行列の殿に付く師走かな」などの諸句に見られる感性の輝き、自己と自然との関わりを適切に表現されていて出色であった。

高山市文化協会長賞の斎藤眞砂子さんは「アアといふ埴輪の声やつくしんぼ」「どら焼の餡子つぶつぶ子供の日」「虹一つくぐりて向ふ音楽祭」「冬の日輪プラス思考に変換す」の諸句に見られる発想の転換をうまく季語の力を籍りて成功した。

同じく山下守さんの句は「妥協とは口閉ざすこと春炬燵」「祖母若く母美しき七五三」「問診に素直に答へ花ハッ手」などの句に見られる老境を日常の中に置いた作句態度に好感が持てたが「端居して来し方おもふ八十路かな」等の持って回った作風に共感を呼ばなかった。

同じく東濃敬子さん「問取り図はサザエさん宅草の絮」「片頬に飴の膨らみ水温む」「河童居る遠野の語り返り花」などに見ら

れる「軽み」がこの作者の身上と思われるが、将来において転換が必要な時が必ず来ると思われるので慎重の上にも慎重に。

同じく小林高子さんの「それぞれの顔して笑ふ春の寄席」「野の花の籠置かれをり夏座敷」「掻き上げし灰のぬくもり名残の茶」などに見られる事物の省略の妙縮を心得た処理が光った。

同じく小泉孝子さん「青梅雨や木地師の墓はみな低し」「扨摺に時ねぢれゆく夕間暮」「宙支ふ腕涼しき阿修羅像」等の句に見られる作者の思考がうまく事物に寄せられて句が完成していく点に注目した。

青竜賞の上垣佳可さんの句は青少年らしい自由な発想で将来に希望を持たせるに十分であった。どうか概成の枠にとらわれず、これからも精進してほしい。

同じく青竜賞の山下茜さん、表現に幼なさがちらつくのが魅力であるとともに一つの課題のような気がする。ここを一步乗り越える時に方向を誤らないようにして欲しい。

(小鳥 幸男 記)

短歌の部

選考の結果、本年も一般六名、高校生三名の作品を選ぶことが出来ました。

一般の部では、下呂市、飛騨市、高山市など、飛騨各地から二十七名の応募がありました。「九十五歳」「八十五歳」など名前前の傍らに年齢を明記されている方が多々あり、

「うたよみは長生きをする」との先師の言葉を思い出しました。

高山市議会議長賞の清水文代さんの作品について

少し類型的な感じを抱かせる歌もあるが、十首が十首そつなく纏められ、八十五歳とは思えぬみずみずしさがあり、「調べ」の美しさがある。

選者が惹かれた二首。

ばちばちとはじけて草の葉に落ちる線香花火よ子は明日帰る
問ひかけて答ふる人なき淋しさか「今朝の味噌汁少し辛いね」

高山市教育委員長賞の須代一郎さんの作品について

戦争に関する一連十首である。短歌担当の私が見逃していたこの作品に目を向けられたのは、詩部門担当の林先生であった。林先生の指摘に「古い」と答えると、「大下さん、この人はまだ生きていますよ。何処が古いんですか」との言葉。私はその場でいま一度読み返してみた。その結果、この痛切なモチーフを散りばめた作品に、然るべき光を当てることが出来た。

選者が惹かれた二首。

本当は死にたくないと散った戦友飲んではいれぬ酒を手向け
る

人柱堤の穴に入る如く爆弾抱えハッチを閉める

高山市文化協会長賞の尾崎珠子さんの作品について

眠ること、起きること、食べること、そうした日常の行為に
関与するロボットのような機器の存在。見過ごしてしまいそうなど

常のひとつまに注ぐ独自のまなざしがある。

選者が惹かれた二首。

眠る間に洗濯機動き飯が炊けラジオが鳴りてわたしを起こす
伝へてよひとり都会に暮らす娘へ幸ひ願ひ難飾ると

高山市文化協会長賞の和田操さんの作品について

親子や夫婦の情など、湿りのようなものにおんぶしないこの作者には、見えないようで見ている視点の面白さがある。どちらかと言えば軽く見られがちな旅行詠だが、異国の町の光景を瞬時にして掴むこの人のセンスを見逃すことは出来ない。

選者が惹かれた二首

セーヌ川のポンポン船にも三色旗立てて働く男ら見ゆる
ペタンクする男らの声と風の音中世のままの午後のサン・サ
バン

高山市文化協会長賞の今井みちさんの作品について

粒ぞろいの十首とは言いがたいが、この作者の作品には諧謔が
潜み、其処から派生する愛らしさがある。

選者が惹かれた二首。

食べさしをすてはだめよほらごらんいちご畑をカラスが見
ている

舞い降りることくに立ちし春の野にベビィシューズはふわつ
と踏み出す

高山市文化協会賞の小林伸子さんの作品について

応募二十七編の中の唯一の社会歌である。まだ若い作者の生真面目で一途な性格が随所に表現されている。しかし、単なる報告だけの歌もある。社会に向けたその目を、己の内部にも向け、「さて、自分はどのようなだろう」と深く掘り下げてみることも時には必要だと思ふ。

選者が惹かれた二首。

非武装とふイムジン河の対岸に翁の見ゆる自転車こぎて
見はり台や鉄条網を見て過ぎぬ「イムジン河」の歌詞確かめながら

高校生の部

森田絵理加さんの作品について

作者にはわかっていても読者には理解できない歌がある。森田さんにも、部分的に不鮮明な箇所があった。しかし、歌として大切な調べがあり、みずみずしい感性が感じられた。

選者が惹かれた二首。

雨降りの地面に触れる小海月の跳びはねるよなタンゴのダンス
水面に映った蛍のうすあかり風に揺られてハートの形

平坂真帆さんの作品について

五首それぞれが、とても素直にうたわれている。余り素直なので稚拙なようにも感じられるが、このままでいいと思う。

二村と志子

里の春を覚りてきたるや雉一羽玉虫色のはね耀わす

今井きみ

七つ釘三つ失せたる軍服を風に当てる予科練たりし夫は

鳥山敦子

結局は切つてしまえり胡麻塩の髪に纏わる哀しみもろとも
ローソクの終りの炎の揺らめきに何故か拘わる性を寂しむ
夜深き七階の部屋にしみじみと瀬音聞きいる山峽の宿
(大下 宣子 記)

現代詩の部

応募作品は全部で九編、期せずして昨年と同数でした。

しかし、審査員の中から、「今年の現代詩の中にはよい作品が多いから、入選数を増やしたらどうか。」という声も出るほどでした。

しかし一方で、「力みすぎている。」「ひとりよがりの表現から抜け切っていない。」という厳しい批評もありました。

以下、応募順に選者としての感想を述べてみます。

1. まゆ玉

後藤 順

昨年も鋭角的な表現のすぐれた作品を出して下さいました。

選者が惹かれた二首。

いつまでもこのメンバーでこの土地に子供のままでいたかったなあ

黒板にびっしり書いた先生のチョークの文字で眠くなります

片岡知紗希さんの作品について

意味が不鮮明な歌や、流れを無視してぼつんぼつんと途切れるような応募作品が多い中で、片岡さんの歌には、素直さと優しさ
とわかりやすさと流れがあり、独自の眼差しが感じられた。
選者が惹かれた二首。

紫のあやめ咲きたる庭先であなたの幸せ願っています
オルガンでぼろんぼろん音遊び偶然出来た思ひ出の曲

選外となった作品の中で、選者が惹かれた作品を記し、選評を終えたいと思います。

後藤みさ緒

亡き妻の會つて座りしその位置にわが座を移し寒夜の永し

中村博子

家族間通話亡夫に繋げたし万里の長城風光る時

野村清二

マニフェスト、リコールなどと騒ぎつつ飛驒の秋景静かに進む

しかし、今年の作品はまとまりに欠けているようです。

「まゆ玉」と題して、蚕飼いの中でその生涯を終えた祖母と幼くして糸引き工女に出た母の歴史。そして、その祖母や母といっしょに暮らした作者の昔の日々への想いと、今、年老いた母。

その中で、祖母のその祖母の時代から連綿と続いている山村の宿命のようなものを表現したいと思われたのだと思いますが、ところどころ表現が飛びすぎていて、読み取れない部分があります。いきなり「黒いまゆ玉が夕陽を呼び込んでいる」と表現されても、「黒いまゆ玉」とはなにを意味しているのか、読み手としては戸惑います。

また、なぜ「沈黙が寂しさを食い尽くすまで、眠り続ければよい」と突然つきはなしてしまわれるのか。

もう少し、肩の力を抜いても、祖母や母やその祖先の歴史を語ることはできると思います。実力をお持ちの方ですが、部分的表現にとらわれない心構えも大切かと思ひます。

2. 冬日癒しの温泉に憩う

加藤 英一

大雪もやんで、雪降ろしすまし、福祉バスに乗ってヘルシーランドへ出かける。そこには、なつかしいいつもの顔ぶれがいて、楽しいひとときを過ごす。

雪国の暖かい人と人との触れあいを、六行三連の詩に素直にまとめてみます。八十五歳の悟りに近い心情がうつくしく表現されています。

3. 生き様

佐藤 曉美

運動会にことよせて、自分の人生を振り返ってお書きになったのでしよう、お歳はわかりませんが、言葉遣いは若々しい。

前をむこうとするのだけれど、

友人と風は 背中を押すばかり

と書かれています。まだまだ元気があふれている感じがします。

4. 「ことば」

田中 和江

もう四〇年も、五〇年も詩や随筆や小説を書いてこられた方ですから、なにも言うことはありませんが、昨年少し感想を述べさせていただきましたように、詩を書く時の姿勢を少し変えてみられたらどうでしょうか。

自分の心の中にあるものは、どんなに新しい言葉が創造できたとしても、抽象的な言葉を並べているだけに終わってしまうとしたら、心の中にあるものが具体的な形となって表へ出てくることできません。

この詩の中には、部分的には光ることもありますが。この詩にこめられている心情もなんとわかります。「ことば」という抽象的な題で一編の詩を作り上げるだけの力量も恵じられます。

しかし、読む者には「詩の心」は伝わってきません。「上手に言葉を遣ってある」という段階でとまってしまおうのです。

あとは昨年の評と同じ感想です。

5. 夕立の記憶

山附 純一

とても素直でよい詩だと思います。

外で遊んでいた少年達が、急に来た夕立を避けてものかげで雨やどりをしている。

こんな風景は今でもよく見かけるし、子供のころの思い出として、誰でも記憶にある風景です。

そうしたなげない情景に目をとめて、あせらず淡淡と書き進める姿勢に、「詩の心」を感じます。

しかし、

少年の心に

雨粒が跳ね 穂波がうねり 波紋が揺れ

雨音が滲みゆく

という部分は、作者は早くも少年たちから眼を離してしまっ、作者の「ひとりよがりの世界」へ飛んでいます。

現代詩には、ものそのもの（ここでは少年たち）を離れて、すぐにまた詩的な表現（往々にして抽象的になったり、ひとりよがりになる場合が多い）へ持っていくという傾向があります。

入賞候補になりましたが、もう少し少年達の姿を追ってほしかったと思います。「夕立は少年の心を潤す」の一行も平凡です。「涼しくなった家路」と書けば、少年達のすがすがしさはじゅうぶん表されています。

6. 「挽歌」——二つの命に——

坂口 比斗詩

自然体の、なかなかすぐれた作品だと思います。「手に纏ける玉」に——の方に少々破たんがあったため、上位入賞を逃しました。

7. 緑の災

宮森 大輔

ことばが美しく、新鮮さも感じます。この詩のいちばんよいところは、

「口をつぐめ、人々の記憶は 土からわきあがる一本の草の 記憶にかなわない」

というところです。

ここには、人間といわず、天地自然の摂理が読み込まれていて、心をひかれます。

しかし、作者はそれをどこで感得されたのか、よく読んでみると、周りの情景が矛盾してきます。周りは今、「緑の災」なのか「焼け跡」なのか。

現代詩には、こういうような、自分だけわかっている他者にはわからなくてもいい、というような傾向がありますが、現代詩はもうそろそろそういう流れから卒業してもよいのではないかと思います。

8. 遺す

細江 隆一

七十歳の父と、四十代の私と、四歳になったばかりの息子と、三人が「千代の松原公園」へ遊びに来ていて、ふと古稀を過ぎた父が、「釣り道具を一式お前たちに遺すさ」と、遺言めいた口調で語りかける。

題名も表現も、きばらずに（力まないで）、素直に書かれている好感のもてる作品です。

しかし、作者のくせで、「いつまでもあると思うな親と金」とか、「永遠の生命は存在しない」とか、なにか教訓めいた言葉がじゃ

「長い手紙」に——は、亡くなった先生の声が、道を歩いていてもどこからか、

「いっしょに あるいて みないか」

と、聞こえてくる。

それは「誰にというものではなく」、「誰かにというのでもなく」、先生が風の中に残していかれたかのように自然に聞こえてくるのです。

とても新鮮なことばであり、ここには応募作品九編の中で、最も新鮮な詩心が表出していると思います。

しかし、「見はるかす山々は、まだ白いペールの中」のあたりは平凡で、「工夫ほしいところ」です。「眼鏡の奥の眼差しが」から、「先生にはまだ返事を出してない」の終章までは、読む者にとってもいい感じを与えてくれます。

「手に纏ける玉」に——の方は失敗作だと思います。

詳細は避けませんが、構成・内容ともばらばらでまとまりがついていません。時間的にもどこに焦点を合わせておられるのかわかりません。波間に横たわる女性は、お父さんが描かれた画の中の人物なのでしょう。

お父さんの姿もあちこちに飛びとびに出てきますが、お父さんの姿がなかなか見えてきません。

「今は私の心の波間にたゆたう」というような表現は、詩としては古い類型の中に入ります。

「長い手紙」に——の作品の形を続けてほしいと思います。

に入ってくると、読み手としてはそこで少し興がさめてしまいま
す。

言いたいことを言外に表現する。現代詩は自由でよいと言いま
すが、少々のテクニクは考えるとよいと思います。

9. 虚偽

日下部 友 香

年齢が若いころは、心の中にあるもやもやを、こんなふうなこ
とばで表現してみたくなるのも自然かな、と思います。

作者にしてみると、短い一行一行のことばに大きな意味をこめ
てみえる、その気持ちもよくわかります。

しかし、文学とか文芸となると、その一行の中にかくれている
ものを言葉をかえて表現してみせてほしい、という願いがありま
す。

たとえば、「怒りを抑え」という場合にどんな怒りを抑えてい
るのか、「歓喜を隠し」といった場合に、どんなことに歓喜を感
じているのか、そしてなぜの歓喜を隠すのか。そのへんを掘り起
こして書いていくのが文学であり、文芸であると思います。

作者は、自分の心の中にある「虚偽」が許せなくてこういう詩
を書かれたと思いますが、一度、詩にしろ、日記にしろ、書いて
みれば次のステップへ進む気持ちにもなれるのではないでしょ
うか。

作品としては、去年のほうがよかったです。

ことのついでに、余分なことになると思いますが、金子みすずのよ
うな若い人の詩や、石垣りん・新川静江のような生活派の詩人の詩
(みんな時代は古いですが)などを読んでみられると、少しは勉
励だったに違いありません。

ばかり。そして20年。論語の「死生・命あり」を実感する日々。

真剣に死と向き合った当事者にしか感じられない生命のはかな
さが、20年という時間が過ぎた今も著者の心を高揚させ続けてい
る、ということが伝わってくる。その強烈さゆえ、自己の実体験
を一度突き放し、客観視するということが出来ないまま作品化さ
れている点に共感を覚える。本人にとつてこの体験を客観視する
こと、随筆という文学作品として対象化するには、あまりにも強
烈だったに違いありません。

2 『落花生の花』 17枚

土小家 旭 多治見市

社員M子さん宅に娘さんの結婚祝いを届ける。玄関前に亡夫の
植えた落花生の花。上海のホテルで機内サービスの落花生を眺め
つつ、上海の女性責任者の言葉を反芻。その微睡みの中に高校時
代のB子さん。B子さんのその後のエピソード。B子さんの人生
とともに、自分自身の死に至ったかもしれない昨年の入院体験。
同じ病棟で末期癌を患って入院中の、高校時代の同級生T君と偶
然の出会い。T君の奥様を交えた会話、様々なエピソードに人の
尊厳を想う。更に、M子さんの後日談。そして、最後は落花生の
名前の由来が記される。

いくつかの題材を組み合わせながら、作品の最初と最後を落花
生が包むという、オムニバス形式で構成されている。事例の中に
その関連性を、詩文のような柔らかさで暗示し、強引に説明し切っ
てしまわない著者の手練た表現は卓越している。

強になるかもしれません。

(林 格男 記)

随筆・評論の部

本年度の随筆・評論の部門に応募があったのは、随筆作品の3
作品であった。各応募者の年齢には隔りがあったが、偶然にも
3作品のすべてが、人の「死」という、共通したテーマであった。
随筆は形式に束縛されないがゆえに、応募しやすい分野である
一方、形式に寄りかかることができないということは、逆に創作
困難な分野であるともいえる。題材、視点、取材、構成、表現、
表記、等の視点から、作品を評価した。

〈随筆の部〉

1 『生かされている』 18枚

青山 英彦 高山市

20年前のある日、目が腫れ検診を受けると、胆嚢に大きなポリ
プがあることが判明。他の病院で検診するが結果は同じ。手術に
よる摘出を薦められるものの決断できない中、老母から亡き父は
かつて長野市のお寺の方の不思議な治療を受け、ポリプが消え
たと聞く。早速、その人を訪ね治療を受ける。それが効を奏した
か、ポリプが消える。西洋医学に対する科学的説明不能の医療
方法。医師である友人も、医師となった息子も、ただ不思議がる

3 『生きる、生き抜く』 10枚

細江 隆一 八百津町

「逝く連鎖」、人の死が3回続くという体験記。一人目は親戚の
伯父。治療により完治したかと思われたものの、急性肺炎が原因
で死んでしまう。退職後の社会奉仕という新しい人生を始めよう
とした矢先のことであった。二人目は職場の、40歳代の筆者と同
世代の同僚。病気のうわさはなかったはずだがと、近隣に尋ね聞
くと、原因はアメリカでの飛行機操縦の事故死とわかる。そして、
三人目は書かれないまま、「誰も明日の運命を知らない、感謝と
希望をもって悔いなく生きたい」と結ぶ。

ユング心理学に「共時性(シンクロニシティ)」という認識
がある。蝶のことを考えているその時に、偶然にも窓から蝶が舞
い込んできた、というような時の当人の心理状況について考察し
たものであるが、この文章を読み進めるうちに、この秋はゆっく
りと心理学の本と対峙したいという気持ちになった。

(田之本克己 記)

児童文学の部

応募作品の数は少ないのですが、今年もよい作品に出会うこと
ができてとてもありがたいと思っています。飛騨というところは、
すぐれた児童文学を生むのにふさわしい歴史的、民族的風土の地
なのかもしれません。

1. あもうのくろめ

橋 渡 香 織

作者の橋渡さんは、昨年随筆の部で入選された『飛騨高山城山愛記』2008、ヒノキに想う』のあとに、『追記』として、

飛騨をこよなく愛するインタープリター

(心からの環境メッセンジャー)として記す。
と書いてみえます。

今回の児童文学「あもうのくろめ」は、視点を高山から天生の月が瀬へ移されましたが、二つの作品の深いところを流れているものは、「飛騨を愛し、森を愛し、木を愛する心」です。

天生というところは、山の国飛騨の中でも特別に神秘的な自然の情感が漂う山々が重なり合うところ、近付く者のすべてを拒まない、とても奥の深い山であり、村であり、峠です。

ここに、法隆寺の釈迦三尊像を造った止利仏師の伝説が誕生する。

この伝説は、江戸時代の中頃にできた『和漢三才圖会』という有名な本に載っている(私はまだ確認していませんが)と言いますから、天生の月が瀬に生まれた鳥(止利)仏師の伝説は、かなり古い時代から全国に知られていたのでしょう。

昭和四十九年、奈良唐招提寺の御影堂の障壁画を描いた東山魁夷は、その上段の「山雲の間」(私も一度拝観したことがあります)を、天生峠の谿から舞い上る霧の幽玄な景観のスケッチをもとに描いたのだと言います。

東山魁夷は、六月、雨上りの霧が舞い上る天生峠の中腹にさしかかった時、「虚空の何処からか、私にこの景観を描けと無言の声が伝わって来るのを感じた」のだと言います。

もし、市長賞に順位があるなら、野口氏と橋本氏のどちらが？と悩ましい思いをしたのは確かである。

ここに、私の感想を述べてみる。

高山市長賞

小説 確かな君と、曖昧なあたし

橋 本 雅

一昨年まで、青龍部門で戯曲を出品していた作者が、一般の部に小説を提出した。

選者は、成長したであろう作品を、興味を抱いて拝読するに至った。

主人公 憂衣が持つ、自身への恐怖や葛藤の背景には、父の死と母の再婚がある。

新しい父を受け入れられない、加えて母に対する憎悪が増して行く。愛した実父の不在で、憂衣の彼「友達以上恋人未満」に対する気持ちの乱れ、迷い、甘え方の不明などが、文中全体から、降り注がれて来るかのように、リアルに伝わって来る。

読者が惹かれるリズム感で進行するのは、作者の力量と才能だと判断する。

まるで、自身を吐き出すかのように、深層心理を描き切るうとする作者は、多分ひとつの作品を仕上げた時、自分への浄化を覚えるのであるが、単に作者の衝動とエネルギーの放出で終わるのが惜しいと思われる。「歯がゆい」「矛盾」この言葉の出現回数を上回る表現方法を見出して欲しい。

今後の作者への期待は、今ひとつ客観的な目線を養い、作風が確立されたなら、そのとき、小説は、完成をみると信ずる。その

橋渡さんはそんな不思議な景観の中に生まれた伝承に挑戦し、類まれな新鮮な表現でこの作品を書き上げられています。

ただ、審査会で話題になったことは、都への旅立ちのあたりの構成力の弱さ。もう一点は、作品を「ひらがな」だけで書き通すことへの功罪でした。

特に、後者について。「ひらがな」には「当たりのやわらかさ」、「温かさ」という利点がありますが、これだけ長い作品になると、ひらがなだけで押し通すことが逆に息苦しさにもなりかねません。漢字にも「色」があり「響き」があり、「心」がありますから、適度に遣っていけば、作品を深めることにもなるのではないでしょうか。

ともかく、作者橋渡さんは、山深い飛騨の国が持っている神秘と幽玄の世界を、新鮮かつ個性的な作品として、私たちの前に見せてくれました。

(林 格男 記)

小説・戯曲の部

応募作品九編を拝読した。

時代小説が三編、戯曲が二編。

小島幸男氏 林格男氏 大下宣子氏 田之本克巳氏 大坪裕子が下読みをし、後日最終審査を行った。

今年の出品作品について、審査員の評価に大きい差がなかった。残念ながら、文芸祭賞、江夏美好賞に該当するものがなかった。

点が、文芸祭賞に届かなかった理由である。

カミソリのような鋭い感覚を放つ内容のところへ、主人公 憂衣の彼の名前が「喜一」であることに、「確かな君」であり、一抹の安堵感を覚えるのは選者だけだろうか。

原稿の行間の開け方など、戯曲風だ。これは、作者が意図して視点の混乱を避けているのだろうが、小説は一行の改行で組み立てるのが通常である。

高山市長賞

小説 蛍が飛んだ夜

野 口 喜代男

力作である。

作品前半の舞台は昭和二十六年の金沢である。戦後の街の様子が、品性のある文章、言葉運びで、情感豊かに描いてある。

青春が、ある人にとっては生きる糧であるが、糧以上の重みで引きずる人生を歩むのも「人生」だ、と、この作者の人生観を垣間見る思いの作品である。

中年になって尚、昔の恋情を忘れていない男の心情が、描き切れている。その心情をより浮き上がらせるためにも、女の身代わりの速さを示そうと、女のしぐさ、会話、服装などで表わそうとする作者の工夫と綿密さが感じられる。

その点の完成度には、高い評価が出来る。

巧みなのだが、無理のない清潔で切れ味の行き届いた文章で、まとまりのある作品である。

平成も二十二年となり、最近特に巷間は、昭和のいろいろな分

野が見直され、懐かしがられている。この作品は、まさに昭和なのである。だが、選者は、この作品を、ひとことで、昭和ロマンと言いつもりはない。それは、小説としての基本を見るからである。

加えて、男と女しか居ない現世での恋愛の根幹には、昔も今も変わるものは無いと思う。しかし、この作品を、最近の若い者は、どのような印象で、受け止めるのだろうか、と、それが、文芸祭賞に届かなかった理由である。

最近の国語教育は、ひらがな優先である、と聞く。小説は読者の目からの娯楽物でもあり、評価物でもある。難しい漢字を極力直されることで、作品の印象が変わると思われる。

高山文化協会長賞

小説 分水嶺

青山 英彦

時代小説である。

父が殺害される、導入からサスペンス仕立てで、分かりやすく物語が進む。

当時は、親を亡くしても、それが殺人であれば赦免状が出され、かたきを討つことを義務付けられる。成就出来ない限り、家督相続が出来ない。

物語は徳川時代が終わりに向かおうとする。維新後、明治政府より復讐禁止令が公布されるわけだが、それを知った主人公が仇討に焦る様など、興味深く書かれ、読み手を誘い込んで行く。

本来なら大きな変化のあった時代だけに、いくつもの史実物が作られ、また、いくつもの創作も生まれて来た。

時代物を手掛けるには、時代考証が必要になり、労力的にも大変な作業であろう。

その分、丁寧に書かれた作品には説得力が付いて来る。作者の今一度の推敲を望みたい。

小説 椿説 弓張り提灯 藤原実方朝臣の歌の解釈は

倉坪 晃 一

短い作品であるが、テーマが面白い。

百人一首の一つを取り上げ、自説に加えて、作者は作家 阿刀田高氏の承諾を得て、参考にし、ユーモアのある作品に仕上げたところは、今までに無い手法である。

登場する二人の男の会話には、艶と味があり、人柄までが忍ばれる表現に驚かされる。

会話は時間の経過を促すには、ある面役に立つ技だが、この作品のように物語のほとんどが会話で占められた物を小説とは言えない。

会話で進める作品は戯曲としたい。しかし、この作品は正式な戯曲形ではない。

内容が興味深いだけに惜しい思いがする。

まさに、作者は「椿説(ちんぜい)ならぬ珍説」をしたためたと思われる。

小説 頭巾

南 アキラ

時代小説である。

一気に読ませる筆力を有する。また、物語の組み立てには手慣

作者は時代の変遷を、自然な形で、鉄道調査隊を舞台にし、登場人物の配置で試みている。

その過程は見事である。

読後感に不満が残るのは、筆は走り、推敲が足りていない。文章中、話口調で表わされている個所が目立つ。それが文体の格調さを消す結果となる。

「つまり」が邪魔なくらい文章を荒らしている。

これだけの内容の作品が、もったいなく思われる。軽い小説で終わるのが惜しい。推敲が徹底されたなら、重厚な作品として評価されたであろう。

今回の受賞は、物語の面白さが買われた点である。

小説 鷹の献上秘話

松井 嶋子

時代小説である。

題が示すように、岐阜県 六蔵 岡田家の実話であろう。読み手に、ある程度の臨場感を与える。

献上された鷹が、江戸にて活躍する場面が、この小説の山場であるにも関わらず、「それは、それは見事なものであった」と作者は言うが、その見事な部分を読者は知りたいのである。

庄平と言う若者とキヨの、死を覚悟したまでの間柄を、この物語の二つ目の軸にしたい、であろうと思われるが、説明で終わっている。

全体に、すべての個所に肉付けがなされたなら、後世に史実として残る作品に仕上がる。

今のままでは、描き切れていない不満が残る。

れさえ感ずる。

読み進むにつれ、時代物であることを忘れさせる。それは、いつの世にも、人として必要なものは「何か」と文中で論されて行くからである。

決して説教がましい語りでなく、機会があるなら高学年児童に読ませたい、と選者は思う。

主人公 源治が浄土真宗に深く自分を納めていく、そのきっかけとなる「頭巾」が題名になっている。

源治の努力の最大限が、仏への帰依であった、と伝えたい作者の思惑は伝わって来る。そのための伏線となる、いくつかの不思議な体験を源治に与えているが、読者には納得いかないものが残る。それは、一般小説で、神秘的な出来事の出現の数々に読み手は妥協をしないからである。

その部分の書き込みの深さで、小説の出来具合が決まると思われる。

この作品は応募規定百枚の半分弱である。作者の力量を持って、奥行きが出せていたなら、賞に十分値したのである。

参考文献に民話を用いられているが、この作品を「民話」とするなら、その分野の成功作品となったであろう。

小説 国府村立国府中学校第一期卒業生同窓会

下畑 七三

私小説かと思われる。

百枚に近い作品である。

一枚の同窓会を知らせる葉書から生じた思いを回想の形で書い

ている。整った文章で物語は進行する。戦後の混乱期に、幼少期を過ごした主人公 健吉の目線で、細部に至るまで、よく記憶され書き込まれている。

未熟児だった劣等感が生む心理描写が巧みであり、その成長過程を見守る母ヨシの強さも、余すことなく描かれている。

貧富の差が無くも、現代のような平等社会のはしりに、揺れ動く子供なりの葛藤も、十分に描かれている。教育制度が改革された、まさに、その時、中学一期生として生きた健吉像が、よく解る。

文中の人間すべてを掘り下げ、客観的に捉えてあるにも関わらず、作者は「ポジティブ、ネガティブ」の言葉で、なおも人間像を表そうとしてあるが、違和感を覚える言葉で終わるのが残念である。

読後に充実感を味わえないのは、健吉一代記の、事実の羅列の印象を受けるからである。ひとつひとつの事柄への配慮は、十分過ぎるほどなされているが、山場となる個所が見いだせない。誰にも訪れるであろう「同窓会」に、簡単に出席する者もいれば、抵抗を抱く者、欠席せざるを得ない事情を有する者等々がいるはずである。

題が示すように、ここでは作者は健吉を出席させる訳だが、第一期生としての出席に何を鼓舞したいのか？その的に集中し、絞られて書かれていたなら、読者を惹きつけ、小説として高く評価されたと思われる。

じむが、実際、今の日本の演劇のシナリオに横書きもあるのだろうか。

段々、変化して行くのだから、縦書きを当たり前にしていた選者には、少し戸惑いが生じたのも確かである。

高校生の部活を題材にし、若さのあふれた作品である。

学生だけが持つ、進学への心配はもちろん、先への不安、希望、夢などを天文部の中で役者たちが、それぞれの自分を表して行く。

天体と言う透明感が、一役加っているのである。

舞台の転換に、空や星座が使われるところも、美しさの見どころを心得た。作者には練られたものを感じる。戯曲の基本が分かっているのも確かである。

世相的に若者の暗いニュースの多いこの頃、この作品の多感な高校生は、大きな想い出作りに、友の気持ちが一つになって行く様が、読み手をも前向きにさせる。

思わず、この天文部の皆に向かい素直に応援したい。そんな思いで、この評を記している選者である。それなのに、読後に不満が残るのは、物語が平坦に健全に流れ過ぎているのである。物語のまとまりは完璧なのだが、それだけでは観客は満足しない。演ずる人の自己満足で終わる。ドラマ展開に誇張や意外性が足りない。少々大げさくらしいクライマックスが欲しい。それが賞に届かなかった理由である。今後に期待したい。

(大坪 裕子 記)

戯曲 ふうの記念日 飛騨弁バージョン

橋 渡 香 織

副タイトルに「スクリーン効果劇」と付けられている。

飼っている犬の ふう がいなくなつた。ふうを探す家族のやり取りが、携帯電話の効果音を取り入れ、臨場感を伝えている。

主役対象が小動物であることを、作者は十分承知して、副タイトルにあるように、あえて背景を大きく設えることで、舞台に存在感を与えようと考えた技であろう。

進行途中、母の心の声をナレーション形式で取り入れてある。

ここに、作者が元来持ち合わず飛騨を、自然を愛する様が詩的に織りなされている。豊かな感性があふれているが、舞台戯曲としては、この部分の構成が少し長いと思われる。

この作品は当然舞台を意識して作成されたものであるが、スクリーン以外余り舞台に動きがない。反面、FMラジオが登場し、地域番組であるが故の活躍をし、大切な存在を示している。

全体を通して選者が結論付けたのは、この作品はラジオドラマ部門に推薦したい。

各自の携帯音、自転車をこぐ音、母の心の声音、ラジオのアンウンサー、ふうの声など、ラジオドラマなら、「音」の動きが、かつ達なだけに必要条件を満たすからである。

作者の戯曲挑戦は初めてである。今後を期待したい。

戯曲 星を追いかけて

大 田 清 隆

原稿が横書きで提出されている。

携帯メール、他横書きに慣れて来た昨今、戯曲の会話は目にな

第 35 回 飛驒文芸祭 作品募集要綱

第 35 回飛驒文芸祭を下記のとおり募集いたします。

1. 応募資格 飛驒在住者または出身者、もしくは勤務者。
2. 対象作品

イ	小説・戯曲・児童文学等	400 字詰原稿用紙 100 枚以内	1 篇
ロ	随筆（エッセイ）・評論等	〃	20 枚以内 1 篇
ハ	現代詩	〃 A4 サイズ用紙使用	3 篇
ニ	短歌・俳句	〃	〃 10 首（句）
	ただし 18 歳未満	〃	〃 5 首（句）

「イ・ロ・ハ・ニ」の応募作品は平成 22 年 8 月 16 日から、平成 23 年 8 月 15 日までに、創作又は発表したもので、既発表作品も可とします。
上記篇（首、句）を超えても不足しても審査の対象となりません。
3. 応募方法 ① 自主応募 ② 団体（結社）等による推薦（用紙適宜）
 - ・応募作品には、住所、氏名、電話番号また、小説・戯曲・随筆・現代詩などの区別をそれぞれ明記してください。
 - ・高校生以下の応募者には青竜賞を設けますので、学校名、学年を明記してください。
 - ・応募封筒に「文芸祭応募」と明記してください。
 - ・既発表作品の場合、その発表印刷物またはコピーによるも可。
 - ・イ、ロについては、入賞した場合、フロッピーディスクに入力したものを提出していただきます。
4. 締切期日 **平成 23 年 8 月 15 日（当日消印可）**
5. 送付先 〒 506-0053 高山市昭和町 1 丁目 188-1 社団法人高山市文化協会 事務局宛
6. 審査 (社)高山市文化協会文芸部委員並びに文芸部門より選出の役員で予選をし、最終審査には必要に応じ、専門の経験者を加えることがあります。
7. 発表 発表は 10 月中旬。広報「高山の文化」等に掲載し、入賞者には別途通知します。
8. 賞

文芸祭賞	1 名	賞状及び副賞
江夏美好賞（小説のみ）	1 名	同
入賞（高山市長賞、他）	11 名	同
青竜賞（高校生以下対象）	若干名	同
9. 表彰式 平成 23 年 11 月中旬
10. 作品集 入賞作品を表彰式当日までに発行、応募者および関係方面へ配布。
11. その他 応募原稿は返却しません。

☆ 多数のご応募お待ちしております。

◎ 応募についての問い合わせは下記まで

〒 506-0053 高山市昭和町 1 丁目 188-1

社団法人 高山市文化協会

TEL 0577-34-6550 FAX 0577-34-6877

Eメール：mail@takayama-bunka.org